

---

# 満月ロード

琴哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満月ロード

### 【Nコード】

N5509L

### 【作者名】

琴哉

### 【あらすじ】

人間の土地では、国王を各国に。

魔物の土地では、魔王を一匹たてた。

城から抜け出した魔王は、人間が祭り上げた“勇者”という存在を気付かぬうちに潰してしまっていた。

そのことで“勇者”の存在に気づく魔王。

空いた“勇者”の席を奪いに行くことにした。

魔王の本当の計画はそれだけではなかった。

魔王らしくない魔王のお話。

## 第1話

短命で魔力を持たない者は、生き残るため、魔力を持った者を殺める。

長命で魔力を持った者は、生き残るため、魔力を持たない者、逆らう者を殺める。

魔力を持たない者は、自分たちのことを「人」と呼び、魔力を持った、恐ろしい者たちを「悪魔」と呼んだ。

魔力を持った者は、魔力を持たない者を「化け物」と呼び、魔力を持った、強き者たちを「魔物」と呼んだ。

時と年月が経る事により、自然と呼び名は統一された。魔力を持たない者を「人間」や「人」と。魔力を持つ者を「魔物」と。

但し、お互いの仲だけは、悪くなる一方で。

尚且つ、長命を持つ魔物の中には、魔物の間でも最も恐れられる、「魔王」が一匹。

短命だが、魔物を滅ぼす意思が強い人間の中には、「人王」が各国にあらわれた。魔物が魔力で使用する「魔法」に対抗するため、人々の一部で、呪文を使用する「魔術」の研究が進み、活用されていた。

「ひ、ま」

「狩りにでも出ましようか？」

「えー。罪もない“人間”を殺す趣味はないよ」

暇で暇で仕方がない俺は、人間の敵といわれている魔物の王。魔王である。

強大な魔力を持ち、残酷な殺害を好む、善意のかけらもない魔物の中の魔物。「魔王」ということで恐れられている。

が、そんな噂と現実が違うもの。別に残酷な殺害・殺戮<sup>さつりく</sup>を好むわけでもないし、頭が良いわけでもない。確かに、幼い容姿の割に数千年生きているし、強大な魔力も持っている。

身長160センチ、人間容姿年齢18歳、精神年齢15歳と少々低め。魔物実際年齢1000歳越えの男。1000歳を過ぎた時点で、歳を数えるのをやめた。血で染まったかのように、赤黒い髪と赤と黒が混じる瞳。生まれつき、爪の色も赤と黒が印象的。魔物の中で綺麗だと言われている色合いを兼ねそろえていた。

ついでに、856歳という中途半端な時期に魔王に選ばれた。その時に「お傍にて尽くします」とやってきた、身長179近くの人間容姿年齢24歳、当時魔物実際年齢1059歳の男。生まれつきだろっ金髪を腰付近まで綺麗に伸ばし、綺麗な青色の瞳。他の女魔物からモテモテな容姿だろっその姿の持ち主が現れた。そんな男の名を“シェイル”と言った。

そして、今も控えめにほほ笑みながら、魔王の椅子にてふんぞり返っている俺の隣に立ち、楽しく狩れそうな場所を考えている。

他にも俺に仕える者はいるが、懐いているのは数名。

魔物のくせに庭をいじるのが好きな男や、料理に命をかけている男。掃除が大好きな気の強い女と、情報収集の為自主的に旅に出ている男がいた。

「人間には罪があります。我々を殺そうとしている」

「それは無暗に人を殺すからだろう？ 人間は敵だと感知したものは人だろうが魔物だろうが殺すんだ。俺たちと同じだろうが。魔力を持ってるか持っていないかの違いだろう？」

「…あなたはもっと

「魔王らしくしろ？」

「わかっているなら」

「んー。別に魔王だから、“あれしてくれこれしてくれ”って言われないじゃんか」

「恐れられているから言えないのでは？ いいことです。アマシュリもそう言っていたではありませんか」

いいことなのだろうか。

王として魔物の要望を聞き、どういう風にこの世を持って行つてほしいという希望を聞かなければいけないものだと思っていたが、王となつて数年後、特別何もしなくていいという結論になった。

人王の中では、その持つっている国の民の意見を聞き、よりよい国にしようと頑張っている王がいた。その考え方が気に入っていて、何もしなくていいと思った数年後、魔物の中に潜り込み、いろいろな話を聞いていた。その中で、面白い情報を持っている者がいた。それが、今魔王に仕える情報旅魔である“アマシュリ”という男だった。

人間で言う15歳くらいの若い容姿をしたアマシュリは、記憶力

のいい男だった。年に数回しか魔王の姿で城から出ない、俺の姿を覚えていた。特徴を口で伝えられるくらいに。そんな魔王の話を聞いているうちに、アマシユリを気に入っていた。

しかも城から出てもしゃべることをあまりしないため、魔王の声を覚えている者などそう多くはない。それなのに、俺が別の魔物のフリをして話している声で、魔王だと気付いた。魔王だとバレずに外に出るため、口を開くのを嫌う魔王というのを印象付けたというのに、少し話しただけで気付くということは、相当な観察力があると思い、城に招待した。

束縛されるのが嫌いな旅人としてみれば、仕えることなんて御免だと思っていたし、実際アマシユリもそう言った。

『別に束縛し、傍に置いておくつもりはない。そんなことをしたら情報が入らなくなるから。だから、自由にしてい。但し、情報がほしいときに呼ぶ。相当急いでいないときはすぐに来いなんて無茶は言わないし、来れないときはそう言ってい。そういうスタンスをする者を嫌うか?』

につこりほほ笑みそういうと、想像や聞いていた魔王の性格とはかけ離れています。気に入りましたと言って、微笑んだ。

それから情報がほしいときにはテレパシーを飛ばしたり、自主的に城に訪れ、いい情報や悪い情報を伝えてくれた。いい友だ。

「アマシユリかあ…元気にしてるかなあ」

「お呼びしますか?」

「うん。いいよ。俺が会いに行く」

「では、今いる場所を聞いておきます」

「いいって。探すよ自分で。たまには運動しなくっちゃね」

そう言って椅子から飛び降り、両手を合わせて天井に向けて身体

を伸ばす。

最近、魔物の領域に人間が入り込もうとしてきているという話がある。アマシユリから聞いたわけではないのに、閉じこもっている俺の耳にまで入ってきているということは、相当被害があったのだろう。

その駆除もしておきたい。

実際、人間は嫌いじゃない。楽しいし、技術を持っている。最近、人間が作ったゲームというものが気に入り、人間のフリをしては、買い求めに走ったりしていた。

拘束魔法以外、魔力が強いわけではないアマシユリのためにも、魔術者を近寄らせないようにしなくてはいけない。

俺、魔王が成立するまで、人間と魔物の領域は混ざっていた。だが、そんなことは争いが起き続ける一因にしかないと考え、魔王になって一番初めに、領域の確保を行った。魔王の城を中心に、徐々に人間の土地を占領し、広げさせた。そして、ある程度の領地領海領空を手に入れた後、広げるのをやめさせた。

人間の土地がなくなってしまうのは可愛そう。という心で。もちろん、魔物には伝えなかった。

『全ての領地を奪ってしまったら、楽しくないだろう?』

そう微笑み止めさせた。

そんなんで止まると思っていなかった為、呆然としてしまった。

「さて…。出かけるか」

「魔王。これを」

「外、寒いかな?」

「冷え込み始めています」

「そう」

シェイルは、黒いロングコートをそつと肩にかけてくれる。

その手付きがやさしく、そこが女にもてるんだろうなと、ほほえましくなる。が、優しく見えるシェイルでも、魔物だ。いったん戦闘態勢に入ると、相手が死してもなお、切り刻もうとするしつこい性格をしている。

以前一部の魔物が、魔王を殺す。という計画を目論んでいた輩たちがいるという情報をアマシユリから聞いた俺たちは、敢えて気付かないふりで魔王に面会を要求してきた計画者たちを入れ、牙を向けてきたところを、シェイルが片を付けた。

俺がやりたかったというのに、立ち上がる暇を与えずに潰した。争いを見慣れているアマシユリもその場に立ち会っていたが、その恐ろしさに足を震えさせていた。

大丈夫だと慰めてやったが、アマシユリにとってのトラウマとなつてしまったみたいで、今でもシェイルと関わる時は、かなりの緊張を見せていた。

> i 7 4 0 5 — 1 1 7 6 <

「じゃあ城を頼むぞ」

「魔王…私を置いて行くのですか？」

「バーカ。お前まで連れて行ったら、城を誰に任せればいいんだ？そこらへんの魔物に占領されても面倒だろうが」

「…そうですが、ここにはヴィンスもリベリオもいます」

「一応だよ。確かにあいづらだってそこらの魔物よりは強いが、何かあったら困る。だから、シェイルが城とこの者たちを守ってほしい」

「…わかりました」

「大丈夫だって、（城を中心に）東西南北にある洞窟にいるドラゴンたちには近寄らないからさ」

「あたりまえです！」

いつもシェイルには無理を言っている自信はある。

城を抜け出した時も、相当叱られる。

どこかへ出かけるときは、いつもついてこようとするが、魔王の俺よりもイザゴザを大人しくさせるためにシェイルを向かわせるものだから、シェイルのほうが魔物には有名となってしまった。だからこそ、一緒に連れて歩くと魔王だとばれてしまう。

それに、この城に仕えているもので、一番力を信用できるのがシェイルだった。だからこそ、留守の間はここを護っていてほしい。

シュンとしてしまったシェイルの頭に、背伸びをして手を乗せる。

「すまないな。何かあったらすぐに俺を呼びつける。どんな些細なことでも報告をしろ」

「はい」

「長く離れはしない。戻ったらシェイルも自由に街を歩いてこい。休みだ」

「いいえ。私はあなたのお隣に」

「はいはい。それは戻ってから考えようか」

「はい」

入口までお送りしますと言ってきかないシェイルを説得し、魔王の間で別れ、長い通路を足音を鳴らしながら歩いた。すると、奥から料理人のリベリオが、楽しそうな顔で食べ物があったカートを押してきていた。何か出来たのだろう。

「あ、魔王！　もしかしてどこかお出かけですか？」

料理に命をかけているリベリオは、人間容姿25歳でシェイルと似ている身長。姿かたちは、落ち着かない感じで、人間で言う「チャラ男」。だが肌は白く、白い髪は癖っ毛で肩にかからないくらいの長さで、あちこちにはねている。綺麗な顔つきをしているくせに、表情が豊かなおかげでとっつきやすい。

いつもおいしい料理を作ってくれて、料理人の中で一番気に入っているし、城の料理人の中でも人気がある。ご飯の時間以外は、なんだかんだとパンだのスイーツだの作っては、持ってくる。今もその状況だったのだろう。

「ああ。今日は何を作ったんだ？」

「スイートポテトと、ジャンボイチゴケーキ。フォンダンショコラに抹茶パフェです」

i 8 6 1 3 — 1 1 7 6 <

と、ポリウムと組み合わせが痛々しいのが玉に瑕。

「そうか。残念だが、シェイルとともにみんな食べていてくれな  
いか？」

「魔王様…食べて行かないんですか？」

口に指をくわえ、甘えるポーズ。

175以上ある身長を持ち主がやっても、一切可愛くない。

「す、すまないな」

「いえ…。いつお戻りに？ シェイルは出かけることご存知ですか？」

「知ってる。戻りはわからん。何かあったら呼びつける」

「呼びつけるだなんて…。お城に何かありましたらすぐに報告します…」

「ああ。そうしてくれ。珍しい食材があったら持って帰るよ」

「はい。ありがとうございます」

にっこりほほ笑むリベリオは、少しだけさびしそうな瞳を見せる。

「あ、あの…魔王？」

「ん？」

「お気をつけてくださいね…」

「ありがとう」

## 第2話

城から出て森に入り、気配がないのを確認すると姿を変える。

魔王の姿でいろいろな場所を歩きわたるつもりはない。少なくとも、今回は魔王の仕事というわけではないためだ。

シエイルには、アマシユリを探すという名目を伝えはしたが、実際は最近領域に入り、魔物に危害を加える人間が邪魔だった。

確かに、魔物が人間の領域に入るとは稀にあるし、殺人を行う魔物もいる。別にそれを咎めることはしない。なぜなら人間も魔物の領域に入り、害することがあるから。但し、最近それが多くなつた。

されたらし返す。というものからかけ離れているのがわかる。

被害が多い地域に足を進めるため、走っていくよりは飛ぶほうが早い。

背中に魔力を集め、翼を具現化する。魔力の量により、その翼の大きさは左右する。もちろん大きければ大きいほど早い。しかし、今はそんなに急いでいるわけでもないし、“魔王”ではないため、平均な大きさにする。自在に大きさを変えられるのも、魔力の強さと器用さだった。

俺は幼いころから割かし強い魔力の持ち主だった。

しかし、もちろん負けることなんてよくあったし、俺よりも強いやつらがたくさんいた。すでに亡くした父なんか、誰とも比べ物にはならないくらい強かった。そんな父が大事にしていた母の形見を、死に際俺に託した。

自分の母を知らない。みたこともないし、話を聞いたこともなかった。でも、父は母を大事にしていた。形見を肌身離さず持っていたのが良い証拠だ。だから、父の形見と母の形見として、涙の形を

したネックレスを首からぶら下げ、服の下にしまいこんだ。

だが、それだけでは安心できずに、魔力でその胸元に埋め込んだ。もちろん取り出すことは可能だが、あまり取り出すことはしない。傷をつけるのはもったいないし、盗まれたりなんかしたら死にたくなってしまうだろうから。

なんていうネックレスかは知らないが、とても綺麗だった。水色。よりも薄く、かといって白というわけでもなかった。濁っているようで、よく見たら透き通っていて、中で何かが揺れているようだった。

父のことを思い出しながら空を飛んでいたら、魔物と人間の領域の境目にさしかかっていた。

最近騒がれている地域だ。

今日もまた、騒がしく争っている様子がある。

もちろん、人間の死体があれば、魔物の死体もある。魔物の領域でなんてことを…と思いながらその争いの中に翼をしまい、足を下ろした。

争いに参加しようとしている魔物に近づき、声をかける。

「おい。これは何の騒ぎなんだ？」

「人間が魔王を倒すためって言うて入り込んでるんだ。人間なんかじゃ魔王にかなわないってわかってるが、軽々と通してなんかやれねえだろ！」

「そうだな。俺も手伝う」

「助かるが、自分の身は自分で守れよ」

「ああ。そうするよ」

情報は得た。ここの魔物たちはいい奴らだ。

たぶん、魔王のため。と表面上は言っていたが、実際は暴れられる絶好のチャンスだとも思ったのだろう。しかし、これは正当防

衛。魔物は自分の領地を護っているだけであって、悪いのは人間。懲らしめるのにはちょうどいい。

（でも、魔王が俺だつて気付いてないのはありがたいけど、“自分の身は自分で守れよ”か…）

当たり前だ。

実際争い時に、いきなり参入した魔物を護ることなんかしやないだろう。しかし、ちよつとした寂しさが。きつと、魔王だと全ての魔物が分かっているのであれば、さらにここの收拾を張り切るだろう。

魔王のお傍にいたいだとか、魔王と顔見知りだと、自慢ができるという心がある魔物がいるという話をアマシユリから昔聞いた。

そんなことを思い出していると、一人の人間が大剣を振り上げ、俺に向かって振り下ろしてきた。

「うあああああつ！」

「おつと」

なんの準備もしていなかった俺は、右足を引き、身体を90度回して避けた。

地面に刺さった大剣はゆっくりと持ちあがり、片手に持ち替え横に振りまわす。二度目は交わすことなく、自分の髪を一本抜き、それを剣に具現化させ、刃先を下に向けて地面に刺すような体勢で大剣を受け止めた。が、あまり腕力が自慢できないため、数センチ引きずられたのちに放り投げられた。

後ろにあつた木を数本背中であり、勢いがなくなつた体は、数本目で身体を止めた。

「いつてえ…剣嫌い…」

剣術や銃の使用はあまりしてこなかったし、習ってもいない所為で相手にするのがあまり好きではない。

すこし遊びたかったというのがあって相手をしたが、やはり大人しく剣でのやり合いは無理そうだ。

相手は標的を俺に決めたのか、大剣を片手に持ったままこちらに向かって走ってきた。

受けた時、相当な重みを感じたから相応に重みのある剣だろうに、片手で持ち上げられるなんてゴリラか。そう思いながらも、使い慣れない剣を捨て、片手デコピンをするように中指を丸め、親指で爪先を止める。狙いを定め、溜めた魔力を男の胸元に向かって親指を離し、中指に溜めた魔力を飛ばした。

反応した男は、大剣を自分の前に起き、その弾を大剣で受け止めたようにした。

しかし、その弾は弾き返したり、受け止める事などできない。触れたものの全てが“無”となる。

自慢のように振り回していたその大剣は、受け止めた部分のみ弾の形をして消えた。刃先は崩れ落ち、大男くらいの長さがあつた大剣は、短剣のような短さになり、太さは変わらなかった。

折れた大剣に、男は呆然としてしまった。その隙を狙い、身体を大男の真ん前に立ち、自分の腕を心臓を狙って胸元に突き刺した。

「残念だったね」

意識のなくなった大男は、そのまま前に倒れこむ。

受け止める腕力のない俺は、胸から手を引き抜き、横に避ける。

「さよーなら」

そう言った瞬間、争いが起きているほうから、いきなり炎の球が

こちらに向かつて数発撃ちこまれる。

「魔術か」

撃ち込んだ奴の顔はまだ認識できないが、それを避けることなく魔力で水の壁を作り、森に引火しないよう護る。他にも炎の魔術を使う人間がいるかもしれないと思い、森と争いが起きている境目に魔物なら入れるくらいの魔力で水の壁を作ってやる。

その水の壁で血で汚れた腕を洗い、水滴を振り払う。

引火を恐れていた魔物からホッとした声があちらこちらから聞こえてきた。魔王は魔物をできるだけ護ってやりたいし、領域を焼け野原になんかせられない。

こういうところは、よく「魔王らしいところがあつてよかった」とシエイルやアマシユリにホッとされる。

「らしい…か」

そういわれて、ホッとする自分もいる。

剣士や柔術者等は他の魔物に任せ、俺は魔術者を中心に潰しにかかった。

魔術者が嫌いだ。

魔物が使う魔法に対抗しようと、いつだったか“魔術”というものを編み出し、研究する者が増えていた。最近は扱える人間が増え、魔物を脅かす。

魔法のように、魔力によつての威力の違いがない。その代わり、儀式をおこなうように呪文みたいなものを詠唱している。

みてきた中では、その詠唱時間が長ければ長いほど、強い魔術を繰り出していた。

魔力を持つ者を魔物というが、魔術を使うものだって、人間ではないんじゃないか。別の種族になるんじゃないかと思う。が、アマシユリが言うには、人間だということだ。幼いころから修行に出され、魔術を習わされている。と言っていたから、人間なのだろう。

「お前すげえな。助かったよ」

ここの地域の魔物だろう。

器用ではあるが、細かい作業が嫌いなせいで、作りだした魔力の水壁を一気に崩せないという欠点と戦い、踏むように水壁を崩していると、一人の男が声をかけてきた。

「ああ。お前らも強いじゃないか。やっぱり今みたいなの多いのか？」

「多いな。たぶん境界に属する地区は苦労していると思う。特にここはひどい。だから、周りの地区の奴らが手伝ってくれてるから何とかなるけど…」

「ふうん。警備つければもう少しましになりそうだよな」

「警備かあ。魔王の下に配属してる魔物だったら強いだろうし、そういう奴らが来てくれれば大分違うと思うんだけどなあ」

そうため息を漏らす男。

俺が魔王だと知ってのことが、知らずのことか。

口調からして、俺を魔王だと知っていればこのような言い方ではなく、お願いという形で話になるのだろうが、お願い。というよりも、こういう形で聞いたほうが動きやすい。

魔王だとばれないように、俺は口を開いた。

「確かにそうだよな。魔王って、王ってだけでなんか仕事してるのかなあ」

「王はきつと忙しいんだ。きつとこの騒ぎのことだつて知っているだろう。でも、もつとしなくちゃいけないことがきつとあるんだ。だからきつと、きつとその仕事が終わったら、こつちのことも気にかけて頂けるもんさ」

そうつらい顔ではなく、嬉しそうな顔でしゃべるこの男に、少しだけ親近感がわいた。

“きつと”という仮定だけだが、それでも魔王がいつか…。思っているだけで、俺は何かをしなきゃいけないんだという気持ちにさせられる。その状態が好きだ。

何かあつたらと、シェイルは警備や軍として数百人の魔物を育て、強くしている。その数百人の中でも、もつとも力のあるものを城の警護として日々動いている。その下にいる奴らでも、もつと人数を増やし、各境界地区に配属させるのもいいかもしれない。

いろいろ楽しいことを思いついてきたせいで、壁を壊す手が止まり、座り込む。

つついテンションが上がると、自然と具現化してしまう尻尾を地面を這わせるように、右に左に揺らす。その姿が猫みたいだと、リベリオに好まれている。

「あんた、名はなんていうんだ？」

「あ？ 俺か？」

楽しんでいた最中に、名を聞かれた。

魔王の名を伝えるのはまずいし、かといって適当に名前を言ったって、忘れてしまつて呼ばれて気付かない。だなんて状況もまずい。

「んー。適当に呼んでよ。固定の名前つてないからさ俺」

「固定の名前つて…親になんてつけられたのかつて聞いてんだけど

…」

「それがさー。幼いころに亡くなっちまったみたいで、知らないんだよね。あちこちに転々としてるうちに、名前忘れちゃった」

なんてホラを吹いたところで、その嘘自体も忘れてしまっただろ  
うなあ。と思いながら、適当に口を開いている。

「そっかあ。つらい思いをしてるんだな」

「結構適当に付けられるの楽しいんだよ？ 忘れるけど」

「はははっ。忘れちゃうのか」

「うん」

「でも、本当に今回はありがたい。またどこかにいっっちゃうのかい？」

「うん。まあね。転々とするの楽しいし」

「じゃ、またよったら声かけてくれよ。俺はずっとこの地区にいるからよ」

「うん。そうするよ」

結局名をつけられずに、その男は俺の近くから去って行った。

魔物だって、手を出さなければ人間と同じように、話して仲良くなつて、友達になる。人間と魔物の違いは、魔力があるかないかの違いだけだ。そう思っている。

### 第3話

長居はしないようにと、すぐに壁を壊す作業に取り掛かり、森の中へと姿を消し、シェイルとテレパシーを交わす。

（シェイル、城はどうだ？）

（相変わらず平和ですよ）

その言葉には、いいから早く帰ってきてください。と、鬼の形相をしているようだった。

魔王がいない間は、シェイルが魔王の間を護るという形をとっているため、軍に指導もまともにできない。報告等があれば魔王の間に入ってくるが、特別な限りは、魔王が戻るまでシェイルがその間を護る。

（そうか。ちょっと相談があるのだが）

（どうかなさいましたか？）

（境界の地域が狙われてて、争いに混じったんだけど…）

（何しているんですか！ ケガは？ 汚れは！？ ありませんか？ 無事なんですよね！？）

魔王を心配する側近って…。

確かに、シェイルほどの残酷な潰し方はしないけれど、魔王なりに強いつてことをシェイルはすっかり忘れてしまっているのだろうか。

シェイルが傍にいるときは、俺が手を出す前に潰しにかかり、見ていることしかできないのが現実だけれども、弱いわけではない。

そこを主張したいが今はそんな話をしているわけではない。

（無事だよ。なめてんの？　　ったく。問題はそこじゃなくて、）

（どこですか）

（最近になってこの地域が相当狙われやすくなってるってわけ。なんでも、魔王を潰すって人間どもが、この地域から攻撃をかけてくるんだってよ）

（迷惑ですね）

（だろ？　で思ったんだが、シエイルがOK出した軍の奴らを、各境界地域に配属させるのはどうだっておもったの）

（実際、今まで争いが多かった地域には配属させてますが）

（…えー。知らなかったんですけどー）

（言いましたよ？　　ただ、魔王が流しただけです）

（あーまーねー）

難しい話は嫌いだ。そのため、そういう話は右から左。もしくは左から右へと流してしまい、聞いていなかったのだろう。

認めます。

（しかし、その地域は今まで争いが少ないほうでしたから、配属はさせてません）

（シエイルも知ってるだろう？　　最近ここ激しいって）

（はい）

知っている。ならば、どうしてここには配属させなかったのか。確かに俺が配属しろといったわけではないが、今まで俺が理解せずに配属させていたのならば、ここだって配属させてもよかったのではないのだろうか。

もし理由があるというのであれば、配属させるほど、強い魔物が出来上がらなかったのだろうか。それだったら納得できるのだが。

シエイルは頑固だ。

ある基準を超えた魔物でしか、城の警備や街の配属は行わないだろう。

（なぜ配属させなかった？　こだわりか？）

（はい。配属させられるほど、信用を得る強い魔物がいなかったのだ）

（配属の数を増やせ。他の地域には何匹だ？）

（争いの多さで違います、平均リーダー二匹と、100匹ほど）

（じゃあ、ここもその数で。主に剣術に長けてる者を。後、魔力に長けてる者数匹。最初はそれで様子を見よう）

（わかりました）

いったんシエイルとそれだけで交渉をやめ、野原に足を下ろした。疲れた体をいやすため、身体を仰向けにして背中を芝生に預けた。その瞬間、背中に鈍痛が走る。

「いつ…たあ」

反射的に身体を起こし、芝生を見る。しかし何か鋭利なものがあるわけでもない、フサフサな芝生だ。

何がそんなに痛みを走らせたのだろうと、周りを見てみるが、何もない野原だ。

先ほどの戦いで傷を負ったと考えてみれば、魔術者と戦っているときも、別に攻撃を受けた感覚がない。そう考えていると、最初に戦った大男の大剣を受けた時、放り投げられたのを思い出した。

ああも簡単に投げられるものなのかと、少しだけパニックに陥っていたが、その時に背中から木々に体当たりしてしまった。その時の傷だろう。

「さいあく…シエイルに無事って言っちゃった」

嘘をつくつもりはなかったが、罪悪感。

背中をかばうように、うつ伏せになった。すると、遠くのほうから一体の気配がある。

この気配を俺は知っている。

「アマシユリか…？」

ぼそりと呟き、こちらに向かってきている気配のほうに顔を向けた。すると、飛ぶのが得意ではない、緑色の髪をした幼い顔つきの男が走ってきていた。

アマシユリだ。誰かを探すように、キョロキョロしているが、何かあったのだろうか。

立ち上がりアマシユリのほうに向かって足を進める。

「アマシユリ？」

「あっ…」

声をかけると、ようやく俺に気づきにつこりほほ笑んで足を速めていた。

近寄ると、小声で怒鳴ってくる。

「魔王！ おひとりで何をしているんですか！ さっきだってこちらの地域で争いがあつたみたいですし！」

魔王だとあまり周りにばれてはいけないと気付いたから小声なのだろうが、周りに魔物や人はいない。しかし、外ではアマシユリは気をつけている。“魔王”という単語を、できるだけ使わないように。

「あーほらっアマシユリを探して」

「そんな名目いりません。本題はなんですか？」

「ここの地域が最近奇襲をくらってるということで潰しに来ました……」

「やつぱり」

「それより、誰か探してたんじゃないのか？」

「あなたを探してたんです！ まったく……シエイルから連絡が入って、さっさと合流して連れ戻してくださいなんてあの人に言われたら、そうせざるを得ないじゃないですか」

「シエイルからあ？ 俺は自分で探すって言ったんだぞ！」

心配してだろうが、なんだか裏切られた気分。

確かに魔王が魔王の間にはいないのはまずいのだろうが、ずっとあそこに閉じこもっているだなんて、無理。つらい。

「でしたら連絡ください。いる場所くらいはお伝えできます」

「それじゃあドキドキ感が味わえないじゃないか」

「いりません！ って……怪我してるじゃないですか！ 暫く監禁されますね。シエイルに」

「うっ……。治ってから帰るもん」

「治ってからって……。ちょっと冗談だったんですけど、もしかして……いや、確かに今まで見たことないかも……」

「なんだよ？」

ぶつくさ言うアマシユリを、じーっと見つめる。

言うことはなんとなくわかってる。

「もしかして、治癒魔法……得意じゃないのですか？」

「……」。そういうのは今までヴィンスに任せてたもん」

「ヴィンスは庭師でしょう。確かに、利用できる者はしておいたほうが良いですが、きちんと治癒専門の魔物をつけたほうが良いんじゃないですか？」

「んー。考えておく」

「というより、治癒魔法、覚えてくださいよ」

「うるちやいなあ」

「可愛こぶらない！」

アマシユリと二人っきりで会々と、こうなることは分かっていた。シエイル並みに口うるさい。が、シエイルがいる魔王の間では大人数しい。だからこそ、二人っきりになると、シエイルがいるときの分までしゃべる。なので、シエイルに叱られた後、アマシユリにも叱られること多々。

「ほらっ早く上着脱いでください！ 手当はできますから」

「ぶー…」

「あ、後で文句言われるの嫌ですから言っておきますけど、怪我したのはシエイルに伝えておきました」

「えあつちよつと！ 言わないでよー」

「言いますよ。人間たちが決めた勇者を潰したという報告もしておきました」

「は？ 勇者？」

> i 1 4 6 3 2 — 1 1 7 6 <

手当て中、いきなりわけのわからないことを言い出すアマシユリに、首をかしげて振り向く。

新たな情報だ。

勇者というのは、よくゲームをしていると「魔王を倒すため、勇者が立ち上がった！」とかっていう場面や、「あなたは勇者だ！」

是非魔王を……」という場面に遭遇する。人間が作ったゲームは、だいたいい人間が主役なため、魔王が魔王を倒している気分で、ちよつといたたまれない部分がある。

アマシユリが言っているのは、その“勇者”なのだろうか。

「はい。最近ですが、人間全国の中から“勇者”という魔王討伐を目的とした人を出し、仲間を集め、数人……数十人を連れて魔物の領域に向かうっていう話です」

「へえ、その勇者が潰されたのか？」

「はい。先ほどあそこの地域で」

「あれ？ さっきの地域？」

「そうです。魔王様が戦ったあの団体は、勇者が築き上げた魔王討伐団体。あの中に勇者がいたのです」

「あー。じゃあ、また人間たちで勇者を祭り上げるかもしれない？」

「そうです。よくわかりましたね。あまりそういうのに頭を使われる方ではないと思っていましたが」

「んー。そうあってほしかったからかも」

「はい？」

勇者がいたら魔物にとってはしつこく、邪魔な存在だ。それを、また勇者を立たせるかもしれないということに、“そうあってほしかった”なんていえば、素っ頓狂な声が出てもおかしくはない。

今勇者がいないのであれば、勇者をまた選出するだろう。アマシユリもそう言った。そこで考えたのは、人間のフリをして、自分が勇者になるようにし向けさせるのはどうかと考えた。

実際どうやって勇者になるかはわからないが、何かの選手権だの、投票だの行つのだろう。人間が考えることだ。

「つまり、それに参加するつもりですか？」

考えを伝えると、またややこしいことをお考えで。と言わんばかりに、いやな顔をされた。

まあ魔王が勇者という面白い事をしたら、どうなるのかという想像をしたら、楽しそうだった。

もし、勇者の信頼が厚くなったのちに、「わたくし、魔物でしたー」なんて言ってみろ。勇者に決めた国の大恥だ。しかも、魔王だなんてばれたときには、恥を通り越して大馬鹿扱いだ。

想像するとなんだか面白そうだ。

「魔王。尻尾。出てます。可愛いですけどしまってください。楽しんでるのがバレバレですよ」

「あ。あはっ」

呆れた顔でアマシユリがいうものだから、すぐにしまって笑って見せる。

「アマシユリ、人間にいい情報を持った者はいないのか？」

「…本当になるつもりですか？」

「まあな。一応シェイルにも報告はするが、もし、人間に知り合っているのであれば、どうすれば勇者になれるのかを調べてほしいんだが」

「確認します。それは、魔王としての命令でしょうか？」

「いんや。お願いだ」

『一度お城にお戻りください。情報を収集次第、ご連絡いたします』

そう言ったアマシユリの言うことを聞くように、俺はすぐに城に戻った。アマシユリが、シェイルに怪我をしたことを伝えていることなんか、すっかり忘れて。

「魔王様……」

「……シェイル？ 落ちつけよ」

「落ち着いていられますか！ 怪我をしているならそう言うてください。何が無事ですか」

「その時はすっかり忘れてたんだよー」

魔王の間に戻ると、ドヨンとした空気が流れていた。

色で表すなら、黒。黒とグレー。主に黒。そこに死体があっても不思議じゃないような空気だった。窓を開けて空気の入れ替えをしたかったが、そんな時間は許されなかった。

椅子に座らされ、見降ろされる。そして今に至る。つまり、戻ってきてすぐにいやな空気を察し、すぐに座らされ、すぐに説教。他のことを考えている暇なんか与えてくれなかった。

「忘れていた？ 怪我を？」

「そうだよ。ほんのちよつとだったんだって。切り傷をいちいち気にしていられるか？ それと同じだ！」

「見せてみなさい」

「やだ！ せっかくアマシユリが手当てしてくれたんだ。ほどくなんて勿体ない」

「いいから。今ヴィンスを呼びました。すぐに手当てさせます」

いきなり脱がされ、椅子を逆から座るように、背中を向けさせられた。

こんな空気の中ヴィンスを呼ばれるのか。かわいそうでならない。呼ばれるようなことをした自分が悪いのだが、すぐく申し訳ない気持ちになってしまう。

時間がかからずヴィンスは現れたが、空気を察した瞬間魔王の間に入る足が止まった。が、傷を見た瞬間、そんなことなど気にせず足を踏み入れてきた。

会話を交わすことなく、ヴィンスは怪我の治癒に入った。

> i 1 1 1 1 8 4 — 1 1 7 6 <

ヴィンスは庭師希望で、外の仕事ということで魔力はそれなりに強く、自分を護るには十分なほどだ。一時期、人間の土地に子供の姿に変化し身を隠していて、人間の習慣等を知っていて、よく人間の土地にいたころの話を聞いている。

出会いは、たまたま他の魔物の庭に遊びに行ってた時、転んでヴィンスが愛用している工具で腕を怪我したという間抜けな事をした時、治癒してくれたのがヴィンスだった。魔王だと知らないとしても、自分のもので傷つけたということで、相当謝ってくれたが、何もないところで転んだ俺を笑うことはなかった。

単純だろうが気に入った俺は、荒れ地となりかけていた城の庭師としてスカウトした。

もちろん連れ帰った時はシェイルにひどく怒られたが、治癒能力に長けているのを知り、庭師としてではなく、医療専門としようとした。が、ヴィンスの希望は庭師ということで、無理やりシェイルを納得させた。というか、逃亡してやる。と脅した。むしろ、俺よりも魔王としてシェイルのほうがお似合いな気がしている。

「終わりました」

そういうと、俺の背中から手を離し、お辞儀をした。

「サンキュ」

上着をはおい、ヴィンスに礼を言う。

この空気に少しは慣れたようだが、やはり長居はしたくないようで、すぐにこの一室から出て行った。

「で？　今回は何をたくらんでいるんですか？」

「そうそう。あのさ、いい情報を得たんだよね」

「勇者の話ですか？」

「なんで知ってたんだよ」

「アマシユリに聞きました」

「じゃあ、計画も聞いてる？」

椅子にいつものように、足を組んでだらしなく座る。

勇者がああの地域にいた。気付いた時には勇者を潰していた。そこまでアマシユリに聞いているのだったら、計画もなんとなく知っているような気がした。

「勇者になる。ということですか？」

「…やっぱり聞いてたんだ。アマシユリから」

「はい。しかし、いい案だと思いました」

「え？」

まさか、俺の案に賛同するとは思わなかった。だいたい俺が考えていることは却下されるという、冷たい男だと思っていたから余計

に。

「しかし、問題があります」

「ん？」

「その間、ここの魔王はどうしますか？」

「…そうか。そこがネックだな」

考えていなかった。

魔物に示しをつけるためにも、年に数回。定期的にはないが、広場にて魔王の姿を見せる。その隣にはシェイルがいて、シェイルの恐ろしさを知っている者がいるため、手を出さない。手を出さないし、出す必要はない。ただ、魔王を殺すと企てている魔物がいないわけではない。

魔王の座はおいしいものなのだろう。

うまくすれば、魔物を利用して、人間を滅することができかもしれない。しかし、それなりの能力を必要とする。信頼とか、信頼とか信頼とか。少なくとも魔王を潰すには、シェイルの相手をするということだ。シェイルの相手をしたのちに、魔王を相手になんてできる体力が必要だ。数人で来たとしても同じ。

（魔王の座かあ）

そもそも、俺はそこらの魔物に負ける気はしない。が、もし何かあった時は、勇者と魔王。どちらも失うこととなる。その際は、周りからの指示としてシェイルになるだろう。人間にそれがばれた際には、ラッキー。と、人間としての恥。どちらもあるだろう。

相当な魔力を必要とするが、一ついい案はある。もちろん俺が死してしまえば意味がないものだが。

「やるしかないかな」

「何をですか？」

「一度だけしかしたことはないんだけど、一つだけ俺の無駄にある魔力を利用できるいい方法があるんだけど……」

「……いい方法とは？」

スツと立ち上がり、シエイルに付いてこないように手で示し、部屋の真ん中に足を肩幅くらいに開いてしっかりと立つ。

右手を広げて、自分の前まで上げ、手の甲を見つめる。顔から約15センチくらい。手の平に魔力を集め、そっと目をつむる。

目の前に自分がいるのを想像し、自分の今の右手と、目の前の自分の左手を合わせた形の、同じ格好をした自分を。

自分の手が手に触れるのがわかった。少し冷たいが、自分だ。シエイルが奥で驚いているのが分かる。それはそうだろう。俺は今、自分のコピーを作っている。いや、コピーではない。俺の意思で動かせる入れ物を。

だからこそ、維持するには精神力を問われるし、気を抜いただけで魂のないただの人形になってしまう。普段はそれでもいいかもしれないが、年数回の面会時にそれはないだろう。

ゆっくりと瞼を上げると、そこには色も形も姿も同じ自分がいる。こんなものだろう。

「どうよ」

「……完璧です」

「“そうだろう？”」

「ほお。声まで同じなのですね」

「まあね。ただ、動くのはまだしも、しゃべらすには相当精神力を問われます」

技や術の説明をする先生のような口調でしゃべってみた。

実際、そのまま立たせていたり座らせたり、歩かせたりする程度

だったら、他に集中する何かをしていない限り問題はない。

精神力を研ぎ澄まし、静かな場所であれば、精神を交換することも可能だ。

「では、これで問題は済むということですね。逃亡を企てられなさそうで楽そうです」

「だろだろ」

「但し…」

「ん？」

「十分気をつけてくださいね。怪我とか…許しませんよ？」

「ちよっとした怪我ぐらいは許せよ」

「駄目です。誰かを護衛としてつけさせますよ」

「まずいだろそれ」

## 第4話

コピーの集中に慣れてきたころ、アマシユリからテレパシーが入った。

人間の情報屋と交渉ができたみたいだ。勇者になるためにはという情報も入った。どうやら、近々闘技場で動きがあるみたいだ。それに参加し、優勝したものが勇者と認められるとのことだった。

シエイルに了承を得たこちらの事情も伝えたところ、あのシエイルが！？と驚いていた。さすがに、コピーを作ったという事実は伝えないようにと、シエイルに言われ、そのことは伏せていた。事実を伝えれば、もっと驚いていただろう。

但し、『魔術が使えないと難しい』という話を聞いた。だがそこに関してはあまり問題はない。暇だと言い続けていた俺は、人間の領地に潜り込み、魔術を学んだ。あまり多くはわからないが、基礎技と、大技数個。それをチヨクチヨク使えば、そこらへんの人間をどうにかすることくらいはできるくらいの技術程度だが、それでどうにかなるだろう。

それでどうにもできなさそうだったら、呪文を詠唱しているふりして魔法を使っちゃえば問題はない。はず。

ただ、小さな問題がある。

あまりにも戦いに集中した際、下手したら“コピーでも呪文を唱えてしまう問題”がある。そのことに関しては、シエイルに一応伝えはしたが、危ないとかの問題ではなく、恥ずかしい。シエイルは詠唱すれば来るとわかって近寄らないだろうし、俺が使った魔術なんかは、シエイルに効くような代物ではない。

久々に人間の領域に入った。人目のつかないような場所でアマシユリと会い、情報提供していただいた人間ともご対面。

アマシユリは、今回行っ魔物が魔王だということまでは伝えてい

ないみたいだ。

情報提供をしていただいた人間の名は、“ジュディア”という珍しい名だ。闇で生きるのが好きそうな顔をしている。暗く、他人と接するのが嫌いなタイプ。

さすがに魔王としての姿ではなく、今までしたことのない容姿だ。さすがに身長等を変えるにはかなりの精神力が必要なため、そこまでは行わなかった。

暫くアマシユリとジュディアと会話をした後、その場を離れ、その土地に慣れるため街を歩いた。

「あ、そうだ。こちらで何とお呼びすればよろしいですか？ 私は工作上、本名を知っている者がいないので、アマシユリのままで構いませんが…」

「あーそうだな。考えてなかった」

魔物の中で、俺の名前を呼ぶものがないから、本名を忘れている可能性があるため、その名前でもいいのだが、念には念をで駄目なのだろう。

闘技場に向かった先でも、名を名乗らないといけないそんなとき、スラッとな乗れないようでは怪しまれるだろう。

今まで出会ってきた者たちの中から、必死に探し出す。いつだったか、こんな名を聞いたことがある。

「シレーナ」

「え？」

「俺の名前だよ」

「女性みたいな名前だね」

「…そうだな」

聞いたことがあった。小さいころからその名前を聞いていた気が

した。どこか遠くでだった。

人通りの多い通りに出ると、店の音や話し声、近くのゲームセンターの音。とにかく音が響きわたっていた。周りをゆっくり見回し、今行くべき道を探していたが、アマシユリは何を迷うことなく、こっちと道を進めてくれる。

アマシユリの後ろをついて行きながら、いろんな人を見まわした。少しでも足を踏み外すと、迷子になってしまいそうになる。

しかし、しばらく歩いて気付いた。

ずっと同じ方向に向かって歩いている人がいる。俺達が進む方向によく見ると、図体はでかく、鍛えてますと言う体系。向かっている先は、同じく闘技場だろう。どんなに筋肉がある男にも、負ける気がしない。

アマシユリに言われる通り、闘技場の受付にて、名を書き言われた通り、待合所に腰を下ろした。アマシユリも、面白半分に受けてみるそうだ。説明を受けたところ、どちらかが参ったというか、戦闘不可能だと判断した時、その戦いは終わる。

しかし、殺してしまったら失格。ここは殺しを目的とはしていない。という考えからだ。

残念ですが、武器は闘技場で用意した鋭利さのない武器。ということだった。

待合室で武器を選びながらボーっとしていると、後ろのほうから何かの視線を感じた、振り向くべきか振り向かないべきかを考えていると、アマシユリが不思議な目でこちらを見てきた。

不審な反応に気付いたのだろう。うつすらとアマシユリにほぼ笑み、笑みを消して振り向いてみた。すると、そこには何もかもを見透かしたかのような、緑の瞳に、白く輝くような長髪。一瞬、シェイルがいるのかと思った。しかし、シェイルはそんな冷たい瞳を俺には見せないし、戦闘態勢に入らない限り、睨みつけることはしない。

壁に寄りかかり、腕を組んで観察するように見つめてくる。

「なに？ あいつ……」

「知らない……」

知り合いというわけではないし、今まであんな奴とやり合った記憶がない。

きつと、ガキが来るような場所ではないと叱りたいのだろうと思いつつも、目を離さず、見つめ続けた。

> i 1 1 4 1 8 — 1 1 7 6 <

先に話したのはどちらでもない。遮ったのは、闘技場が開かれたからだ。ようやくこれからが戦場。実際やってみないとわからない。負けたら負けで別にいい。面白半分だったっていうのがあるが、あの男。白髪の長髪野郎には負けられない。

（シェイル並みに強かったらどうしよう……）

試合は、トーナメント形式。

潰せば潰すほど、強いやつらと戦える。戦えば戦うほど、上へ勝ち上がり、勇者になれる可能性が高くなる。

最初のほうはあまり魔術を使わず、剣一つと体術にて潰していく。案外簡単に上のほうまで上り詰める。しかし人数の関係上、上まで

が長く、試合の間が長い。そのおかげで、いろんな人間の争い方。自分が取得していない魔術を、他人の戦い方で学んでいく。

「僕的には、魔術よりも、治癒魔法を覚えてほしいのですが…?」

誰にも聞かれないように小声でアマシュリが囁いた。囁いたと言っても、さわやかなものではない。低く、脅すような声色で。

「ごめんなさいと口を開こうとした瞬間、次の試合のスタート音が聞こえてきた。」

次はだれかと目を向けると、そこには最初待合室で睨みつけてきた男だ。その向かいに立っているのは、ごつい男だが頭は弱そうだ。重そうな剣を振り上げるが、白髪長髪野郎はそれをいとも簡単に交わし、その瞬間に呪文を詠唱し隙を突いて魔術を使い、怯んだ瞬間刃のない剣でその男を殴り上げた。

その戦いっぷりがきれいで、魔物だったらシェイルと良いコンビになるだろうと関心した。勝利の笛が鳴ると、歓声がわきあがり、選手は引いていく。

「すっごおい…シレーナ、魔術でやれる?」

「あ、ああ」

無理だろう。

魔法を使えばできるだろうが、今取得している魔術で白髪長髪野郎に勝てる気がしなかった。しかし、勝たなければならない。わかっているつもりなのに、手が震えた。

引き際、ちらりとこちらを見た気がしたが、敢えて気付かなかったふりをした。

なんだか、シェイルが二人いるような気がした。気配も姿も違う。

アマシュリと俺の試合に時間はある。待合室の一角に座り、アマ

シュリに護ってもらい、俺は眠った。眠ったと言っても、それは表上の理由だ。本当のところは、俺のコピーとの精神交換だ。今のこの状況をシェイルに知らせておきたかった。

魔王が闘技場にて楽しんでいるとき、魔王の城では…。

「おっ菓子〜おっ菓子い〜」

「リベリオ…。生き生きしてるな」

「魔王様のためなら、どんな料理も作って見せましょう！」

大人しく料理をしていればいい男だが、口を開かせてみたら、全てにおいて魔王様命。一度、魔王様がシェイルを殺せるかという実験のため、リベリオに毒を盛らせようとした時も、シェイルを気にせず毒入り料理を楽しそうに作成した。

もちろんそんな策略は見事に破れた。

破れたというよりも、魔王様がそんな策略を忘れ、シェイルのために用意した毒入り料理に手をつけ、案の定魔王様が嘆いた。そんな姿を見たシェイルは、もちろん料理人を疑う。犯人はもちろん時間がかからずリベリオだとばれた。

運よくヴィンスに治癒された魔王様の言葉にて、リベリオの命は

助かったものの、暫くの間シェイルはリベリオを警戒し続けたという過去がある。

作りあがった三時のおやつをカートに乗せ、魔王のいる一室へと足を進めた。

もちろん、今の魔王がコピーだというのは知っている。コピーが作成された日、スイーツを持って行ったところ、いつもと微妙に違う反応を見せたところで違う魔王だというのに気付いた。真相を知った時は、かなりのショックを感じたが食べてくれることに違いはない。怪我をしないかと不安ではあるが、そう簡単に傷をつけられるはずがない。

「信じていますよ魔王様！」

そう響かせながら一室に入るなり、シェイルの冷たい瞳が向けられる。

たぶん、城の中であまりシェイルを気にしないのは、リベリオくらいだろう。どんなにドンヨリとした雰囲気になっていたとしても、持ち前の明るさで入ってくる。

「リベリオ……」

「あら、魔王様。今日は目を開けていらっしやるんですね」

「うるさいぞリベリオ」

「うるさいのはお前だシェイル。いつも隣にいるのだから、たまには俺にも話させる」

「……」

シェイルに向かってアツカンバーを向けるが、すぐに魔王に向き直り、手を合わせる。

「魔王様の大好きなスイートポテトオンリーにしてみました！　っ  
ていうより、多く作ったら魔王様のご機嫌がよろしくなくなるから  
なんだけど……」

「リベリオ」

「ま、魔王様！　今日はおしゃべりになるのですね」

「あー。耳元でうるせえよ相変わらずだなリベリオ」

「おや？　魔王様？」

魔王なものには違いがないのだが、今までのコピーではなく、魔王本人のしゃべり方だ。

不思議に思い、ゆっくりと魔王の頬に触れてみる。今までの冷たい魔王ではない。温かく、生きていると思わせられるような感触。いつもなら冷たく振り払われるのだが、そつと微笑まれるなんて、やっぱりコピーだったのだろうか。そう不安になるが、魔王は立ち上がりリベリオに背を向ける。何をするつもりなのかと、首をかしげると首だけ振り向き、ニツと子供のようにほほ笑んだ。

「ホレッ。いつもおいしいお菓子を作ってくれるお礼」

そういうと、気分が良いときの尻尾を上機嫌に出してくれた。ホレホレと、猫じゃらしのように右に行ったり左に行ったり。その姿があまりにも可愛くって、ついつい後ろからギュッと抱きしめてしまう。

「ぬおっ！　そってくるか」

「やっぱり魔王様は抱き心地が良い。こつ、腕にすっぽり入って、護ってあげたくなるような大きさってえっ」

「くつつくな」

リベリオの言う通り、すっぽりと腕の中に魔王が入って楽しんで

いる最中、邪魔をしたのはシェイルだった。  
後ろから首をつかむように引き？がした。

「ところで魔王。勇者候補のほうはどうです？ 何かあったから精神交換を行ってきているのでしょうか？」

「んーまーね」

「報告を」

「それがさ……」

## 第5話

「お人形…みたい。無防備だなあ」

アマシユリは、魔王が目覚ますまで身の回りの警戒を任された。魂の抜けた人形のようになるから、その間だけ注意を払ってくれていればいい。そう言われたのはいいが、ここまで無防備で意識がないとなると、何かあった時に自信がなかった。少し騒げば起きる程度のモノだと思っていたが、どこから見ても起きそうにない。

不安を感じながらも、壁に寄りかかり無防備に座っている魔王の前に、ちよこんとしやがみ、周りを見回す。

本当に、目を閉じていればきれいな顔つきをしている。今は姿をかえていても、ほんの少しの面影がある。口を開けば、ただの子供のようにわがままを言ったり、騒いだりしているだけなのに。

人間が魔王を見たところで、あまり“魔王”だという印象からは、かけ離れているのではないのだろうか。もっと、凶悪な顔をしていて、強い魔力を放ち続けているイメージ。きっとそれが人間からの想像だろう。それを考えると、拍子抜けだ。ただのきれいな子供。そうとしか見えない。

じつとみつめていると、後ろから嫌な気配が近づいてきた。

感じたことがある。これは、魔王も気にしていた白髪長髪野郎。体をひねらせ、視線の先を見つめる。

眠っているところを襲うだなんて、卑怯な真似はしないだろうが、警戒するに越したことはない。

闘技場で支給された武器を握り、体勢を落とす。争いごとはいり得意ではないから、今行われている試合に途中まで勝ち進んでいたのだって、幼いころに教わった剣術のみ。しかも、普通の長さの

剣を振り回す力がないので、小さい体を利用して短剣にて勝ち進んでいる。そんなハツタリ程度の力がしばらく続いただけでも、奇跡に近いものだろう。

本当に、この男に当たらないで終わったの事には、自分の運の良さに感動する。

「さっきから何なんだよおまえ」

「…別に。お前に興味はない」

「知ってる！ シレーナをずっと見てるだろう」

「ああ」

本当に興味がないみたいだ。

視線は一向にこちらを見ないし、意識を飛ばした魔王にしか目が行っていないみたいだ。

（魔王だと…ばれたわけじゃないだろうな）

そう簡単にはれないし、人間が魔王の姿を知っているわけがない。知っていたら、魔王だって簡単に人間の地に足を延ばさないだろうし、シエイルが許さない。

「なんで」

「お前に理由を言う意味がない」

「はあっ！？ 聞いているのは僕だ！」

「うるさいガキだな。どうせ遊び半分で来ているみたいだが、早々に諦めたほうが身のためだろう」

「なんであんたに言われなきゃいけない。でも、お前も勇者希望なんだろう？」

「別に…勇者じゃなくたっていい。勇者と同行だっていい。ただ、魔王を倒す名目があればそれで」

「もしかして、魔王とか魔物に大事な人を奪われたとかか？」

「そうだが？　ここはそういうやつか、賞金目的でしかないだろう」

同情することができない。

なぜならアマシユリだって弱かろうが魔物だ。人間の気持ちに左右されるわけにはいかないし、おとなしくやられるつもりもない。しかし、考えてみれば、賞金目的か魔物を殺したい。そういうやつらが集まったって仕方がないのだろう。

考えるまでは、賞金目的か力自慢。勇者という肩書がほしただけだと思っていた。この中には、本当に魔物を倒したいやつらがいるのだろう。

「もし、もしお前が勇者になったら、だれか連れて行くのか？　それとも……」

「一人でなんて無理だろう。闘技場で見かける力のある奴を同行させるつもりだし、その辺は臨機応変に誰かを連れていく。一人だなんて、魔王に会う前に力尽きるのは目に見えている」

「へえ、自信満々に一人で行くやつかと思ってた」

嫌味を含めたつもりだというのに、アマシユリの言葉にうつすらと微笑んだ。

しかし、最初に聞いた質問の答えをまだ聞いていない。どうして魔王。シレーナを目の敵にするかのように、目で追い続けるのか。

「それより、何か用があったんじゃないの？　どうしてシレーナばかり目で追うのか気になるんだけど」

「その男。強いだろう？」

「あ、ああ。そこらへんのやつらよりは全然」

「会ったときに分かった。感覚で。でも、その力を闘技場で発揮しようとはしない。今のところ、雑魚ばかりだからどうにかなるが、

他にはもつと強いやつらがいる。ここにいる以上、もう少し本気を  
出せと、忠告をしたかっただけだ」  
「伝えておくよ」

（大変大変大変だよ魔王！）

その声で、俺は闘技場の体へと精神が引き戻された。  
何が大変なのかと、アマシユリに話を聞くと、今さっきまで白髪  
長髪野郎が来ていて、どんな会話になったのかも話を聞いた。その  
あと、何気なくトーナメント表を見ると、次の戦いがその白髪長髪  
野郎だった。

しかも、あまりトーナメント表を見なかったから気付かなかった  
が、呆気なく決勝戦まで上り詰めていた。歯ごたえのなさに、今回  
強いものは、すべて白髪長髪男のほうに回っていたのだろうと、勝  
手に納得した。

今までは、呼ばれたらいく。という形をとっていたから、どんな  
敵と戦うのか知らなかった。だが、これでどうしてあのタイミング  
であの男がやってきたのかが分かる。次戦う敵が、今何をしている  
のかが気になったのだろう。なのに、来てみれば寝ている。そりゃ  
忠告の一つも言いたくなるだろう。

嫌な重みを背中に抱えたまま、待合室から出て行つた。

白髪長髪男はこの闘技場の中で、強いことから有名人となっていた。

白き才オカミ。身長割に、素早く。しかも、素早いのは動きだけではなく、魔術の使い方も巧みだということで、そう呼ばれていた。

「はじめましてルーフォン？」

「はじめまして。シレーナ」

白髪長髪男というわけにはいかず、先ほど知らされた相手の名前を呼んでみた。すると、真似するように相手も俺の名を口にする。シレーナ。やはりどこかで聞いたことがある。どうしても思い出せない理由として、1000年以上も生きている所為だと、長命を理由とする。

スタートの音が鳴った。

周りの歓声を聞きながら、ルーフォンという男を見つめた。どこからやってくるのか。

「お前から来いよ」

基本的に自分から攻撃するのが好きではない俺は、低く何処にでも逃げられるような体勢をとり、ルーフォンに向かってそう言った。すると、フンッと鼻で笑ったのち、地を蹴って走り出した。右手に持っていた剣を、左肩付近まで横に上げ、向かってくるその男の様子を見る。

左から振るつもりだ。相手ルーフォンも、それが分かるようにあえてそうかまえたのだろ。にやりとほほ笑んでいるその口元が、そう言っているような気がする。

体重をつま先に集め、左肩付近から斜め右に振られるその剣の上に乗るように、後ろにジャンプし、後ろに反った肩を軸に宙返りを

して見せる。肩を軸にしまったせいで、宙返りが大きく後ろに行ってしまったが、避けるためには仕方がない。

最初は腰を軸にしようと思ったが、想像より高めの位置を剣が横通る気がして、反射的に軸を後ろに持って行った。

「ちえっ」

本当は、宙返りをする際に、踵で顎から蹴り上げてやろうと思ったが、思ったよりもルーフォンの体勢が後ろに行っていたせいで、綺麗にすかしてしまった。

「頭は使うようだな」

「お前もね」

馬鹿にするようにほほ笑むその姿が、逃亡に失敗した時のシェイルのあきれ顔に似ていて、ちょっとプチっと脳味噌が鳴った。

シェイルとやりあったことはないが、きっとシェイルと戦っても、こう簡単に避けられるのだろう。

じっくり考えている様子を与えないかのように、右下に振り下ろした剣のまま、再度俺のほうへ剣先を向けてくる。

右下から左上。先ほどの逆だ。

それを前にジャンプし、ルーフォンの真上に自分の頭が来るように宙返り、横切る際に短い呪文を唱える。初歩水魔術だ。

水の玉が後頭部に向かって数個向かう。目だけで俺を追っていたからか、ルーフォンは左に肩を動かし、軽々とその魔術から避ける。剣のほうにまで気が行っていなかったのか、剣先に軽く当たったが、振り払われた。

ルーフォンに背を向けるように着地し、簡単に避けられたことにムカムカしながら、ルーフォンのほうに向きなおる。

「初歩的だな。剣術も弱ければ魔術もあまりか。得意なのは身軽さだけか？」

「悪いけど、それも大きな武器だと思ってるんでね」

魔王になるときだって、いろんな魔物を蹴落とした。別になりたかったわけではないが、俺の胸に刻んだ形見を手に入れようとしてきた魔物を、攻撃すべてを身軽さで避け、接近し強大な魔力で一匹一匹捻りつぶしてきた。踏みつぶすように殺した。その恐ろしさに、魔物たちは魔王にさせた。潰し始めて魔王になるまで数年経ったが、日々潰した。死した魔物の上で戦い、残骸を踏みつぶし続けた。

血に染まった姿に恐れをなし、近付いてこなくなつた魔物たち。別に俺はそれでもよかった。

そんなとき、敵意がないシェイルが静かに足元に現れ、そつと手をとった。そこから魔王だと認識された。

まさか、ルーフォンの一言なんかで、何百年も前の記憶が甦るなんて思わなかった。

勝つ気満々のルーフォンは、俺に剣先を向けるのを止めなかった。避けつつ魔術を使うのにも、相当疲れてきているのが現実。魔術も、知っている中で強いのを使用しようとしても、その分の時間がない。ルーフォンも合間合間に魔術を使ってくるが、止めれるものは止め、避けれるものはとことん避けた。しかも、俺が知っているような基本的な魔術ではなく、実践として使っているようなモノばかりで、対処のしようがない。

観戦していた際に覚えた魔術だって、実践していないから、あまりうまく発動させることもできず。だんだんイライラしていた。

「むかつく」

「お前も十分むかつくよ」

ルーフォンの戦いでこんなに長引く戦いをしなかったからか、歓声が最初よりも強くなっているのが分かるし、ルーフォンを応援する声や、意外にも俺の名を叫ぶ者もいた。

ちらりとアマシユリのほうを見ると、どうすればいいのか分からないような顔をしている。

もうそろそろ強めの魔術を発動したいのは山々なのだが、そんな時間はいただけない。新たに編み出したかのように、適当に呟いて魔力を使ってもばれやしないだろう。

そう安易に考え、力強く地を蹴り後ろに高くジャンプし、その間に魔術を省略させているように、知っているような呪文を引っ張り出してくっつけた。

自分の真上に、魔力で大きめの水の玉を作り、呪文を唱えながら大きくしているふりをする。実際にこのような魔術はある。しかし、これとはまた違うし、威力はあまり期待できないもの。だがこれは違う。自在に威力なんか変えられるし、詠唱している呪文も違う。適当に省略してみせ、その玉を着地する前にルーフォンに向かって投げつける。

驚いている様子のルーフォンは、身を守ろうと、何かの呪文を唱え、それに対抗する魔術をその玉にぶつけるが、水の中に入るのみで何の成果も上げられない。

諦めた様子で、持っていた剣で身を守った。その瞬間、観客から審査員、待合所のほうまで全て静まり返った。

水の玉が消えると、そこには剣を地にさし、魔術で薄い壁を作ったおかげでボロボロの中でも、何とか持ちこたえているルーフォンの姿があった。しかし、これ以上今までどおりの動きは出せないだろう。

「…なんだその魔術は…」

「開発した」

「…」

威力の割に、短い呪文だった。そう言いたいのだろう。  
呪文なんてテキトウだし。なんて言えるはずもなく。

「言えよ。降参のサイン」

「…俺は言えない。俺は魔王を倒さなければいけないんだ」  
「どうして」

「どうして…？ お前は馬鹿か？ あんなものがあるからこの世は崩れるんだ！」

「魔王がいなければ幸せだとでも？」

「少なくとも今よりはな」

肩で息をしながらも、ボロボロになったルーフォンの体は、突き刺さった地面から剣を抜く。

一瞬左右へ身体が振られていたが、そんなのも気にしている暇はないのだろう。

それ以上傷つく必要があるのだろうか？

魔王がいなければ幸せかもしれない、しかし、本当にそれでいいのか。共存しようなんて思わないが、魔物すべてが悪いのだろうか。人間は何一つ悪いことをしていないのだろうか。この世界は狂っている。

同じ生き物だというのに。

「そうか。ならやればいい。別に勇者じゃなきゃ魔王を倒しちゃいけないなんてルール、この世には存在しないだろう？」

「…どうということだ」

「俺が勇者になったら、各国の王と顔を合わせてくる。どんな王がいるのか。本当に人間すべてが良いやつなのか。本当に魔物が悪いのか。そこを見極めてから魔物のいる地へ足を踏み入れる。その間にお前が魔王をやってしまえばいい。そしたら、今回の勇者は亀だ

って笑われ、お前は英雄。すげえだろうが」

そもそも、魔王が死んだからといって、魔物が全滅するわけではない。

もしかしたら、魔物たちが暴れ出し、領地を気にせず人間をつぶしに行くかもしれない。そしてこの男は、手を出してくる魔物すべてを殺しにかかるのだろうか。生きている魔物を、全てつぶす気なのだろうか。

そんなのは無理だ。

少なくとも、人間よりも魔物のほうが強いし長命だ。そう簡単にやられてなんてくれはしない。

俺ら魔物からしてみれば、人間だって罪もない魔物を手にかかる。魔物だからといって、差別をするように殺すだろう。人間も魔物も同じ。どちらが悪いかなんて、わからない。

「英雄か…そんなものいらない」

「じゃあお前は何がほしい。魔王が死んだところで、別の魔王が出てくるだけ。魔王が死んだところで、魔物がすべて死ぬわけではないんだ」

「知っている！ それくらい知っている」

「これ以上俺とお前がやりあう必要があるのか？」

（魔王様、アマシユリ様。ご連絡です）

ルーフオンと話している最中、ヴィンスから珍しくもテレパシーが入った。

（どうした）

（西の洞窟から、ドラゴンがそちらの国に向かって行きました。何か操られている様子。近くに魔物の姿もありました。何か企んでいる

る可能性があります。気をつけてください)

(西の…)

アマシユリも、きちんと聞き取れたみたいで、視界の端でうんとうなずいていた。

次にテレパシーを送ってきたのは、そのアマシユリだった。

(私の友からのご連絡です。その近くにいた魔物は、どうやらこの国の王とつながりがある様子。闘技場に向かってきています。嫌な予感がします。早く試合を終わらせてください)

(ええっそんな無茶な)

そもそも、王と魔物がつるんでいると。しかも、西の洞窟に住んでいるドラゴンは、割かし大人しいほうではあるが、もともと強い種族。一度怒らせると、敵味方関係なく潰しにかかる。

魔物や人間が扱える動物ではない。

「やりあう必要…？ あるさ…」

今の現状を理解していないルーフォンは、しっかりと構えた剣先を俺に向けてくる。

「先ほどの魔術。何かを省略した魔術に見えた。今までそのような魔術はあまり成功例がない。他にも持っているのだろう？ 見せてほしいものだ」

「つまり今は、勇者を関係なしに、俺とやりあいたいってことかよ」

「そういうことだ」

「そうか。但し今は時間がない…」

「は？」

「悪いが、今はお前をあまり相手にしていたくないのだ。すまない

が、負けを認めてはくれないか」

あまりにもひどい言いがかりだ。理由にもなっていないし、ただルーフォンを馬鹿にしているようにしか見えない。

ルーフォンの口が開く瞬間、場内にアナウンスがかかった。

『今の試合。シレーナ選手の勝利とみなします。もうすでに、ルーフォン選手は戦える状態ではございません。今回の目的は“死”の目的ではありません』

「なんだそりゃ……」

「許さないぞ！」

その闘技場側からのアナウンスに、俺やルーフォンだけではなく、周りの観客からも、かなりの非難を浴びていた。しかし、そこを大人しくさせたのは、意外にも不服そうな顔をしていたルーフォンだった。

剣を捨て、俺のほうを向いて座り、右足のひざを立て、その上に左手を乗せる。服従の姿。

「確かに、俺はもう戦える様子ではないみたいだ。負けを認めます。しかし、あなたの近くで戦いたい。是非シレーナ……いや、勇者様と同行させていただきたい」

ルーフォンの言葉に、場内の人々が静まり返った。もちろん俺も静まり返り、どうすればいいのかが分からなかった。

つまり、この時点で魔王兼勇者となったのだろう。

静まり返った場内は、一気に勝利した勇者への歓声と、潔いルーフォンへの素晴らしさで響きわたった。

「…いいよ。但し、俺と同行するとなったら、魔王への道は少し遠くなるぞ?」

「それでも構わん。非道なことを行つようでしたら、仲間から離脱させていただきますが」

「構わんよ」

そういつて俺はルーフォンに向けて手を差し出した。

驚く様子が嬉しかった。綺麗に整った顔の男が、表情を崩して驚くなんて、そう見れるものではない。ゆっくりと表情を戻し、ルーフォンは抵抗することなくそこに手を乗せ、ゆっくりと起き上った。

「ところで主催者。王よ。貴様は何を考えている」

今後の行動について、俺はその場で王がいる方へ向き、大声で怒鳴ってやった。

王は危険を避けるように作られた、特殊ガラスの向こう側で観戦していた。上から見下ろす姿。何かをたくらんでいるようにしか見えない。

そんな王が、ゆっくりと立ち上がり、マイクに向かって口を開いた。

「ほお。どのことかわからないが、勇者が決まり次第大きな祭りを行おうと思っていた」

そういつと、観客のほう gaze とざわめき、魔物の土地の方角に影が見える。

その影に入った観客や、その周りの人々がゆっくりと上を見上げた。

もちろん俺も見上げたし、ルーフォンも見上げていた。どうしてこんなものがここにいるのかという様子で。

現れたのは、大きな翼と大きな体。どんなものでもなぎ倒すような尻尾を持つ、西の洞窟に住んでいるドラゴンの一匹だった。

東西南北のドラゴンにあったことはあるが、場所によってちょっとした特徴が違う。一つに色。西のドラゴンは、全体的にオレンジっぽく黒い色。腹の部分が白く、その部分だけが無駄に目立つのが特徴だ。

そんなドラゴンが、背中に魔物を乗せて、闘技場の試合会場へと舞い降りた。

## 第6話

「戦闘態勢…」

「え？」

ぼそつとつぶやいた俺の言葉に、ルーフォンが反応した。

ボロボロだが、ルーフォンも戦えないわけではないだろう。しかし、あまり長時間戦わせるわけにはいかない。

魔力をここであまり使うわけにはいかない。という状況の中、ドラゴンと戦うには少々骨の折れる作業となる。そうになると、魔術に長けているルーフォンを生かしておいた方が、戦いやすい。

ルーフォンに背を向け、ドラゴンから手を出させないように、庇って見せる。

「どういうつもりだ！ 王！ 最近魔物と手を組んでいるそうではないか！」

「ほあ…。知っておったか」

「何だと…」

後ろでルーフォンが反応するのが分かった。

足元に落ちていた剣を、再度持ち直す。そんな体で抵抗するつもりだろうか。俺の考えからすると、俺がおびき寄せている間に魔術で放り飛ばしてほしかったのだが、そうもいかないのだろうか。

少なくとも、こんな鈍らな剣で戦うのは無謀すぎる。

「さあて、本当に勇者に向いているのかを見せてもらおうかとするか。これが今回のメインイベントだ。ドラゴンに負ける勇者なんて御免だろう？」

「なるほどな…。そんなことのために…」

怒り、魔力を使用しようとした瞬間、ドラゴンが大きな尻尾を振りまわし、観客席の一部に尻尾を振りおろし、見事に潰して見せる。そこから奇声や悲鳴などが響きわたる。

「なっ…罪もない人を殺すつもりか！」

「ほらっ…早くしないと死んじゃうよ？」

楽しむように、王はそう笑っていた。

こんな人間のもとで、魔王を殺そうとしたいのだろうかルーフォンは。

「ふざけんなよ…。わかったぜ、人間の王のすることはこんなことかよ。罪もない人を向き不向きを知るだけのために殺させるなんてな…アマシユリ！」

無事かどうかも知りたいため、そう呼ぶと、わかっていたのか待合所のほうから走ってくる。

高い位置にある観客のほうから飛び降りてくるものだと思ったが、さすがのアマシユリ、呼ばれるとわかっていたのだらう。

「はい」

「ルーフォンを安全な場所に。後、できるだけ多くの観客を逃がしてやること。あと、できれば王を逃げないように拘束しておいてほしいのだけど」

「え？ 囷になっておびき寄せ、その間にルーフォンに魔術で締め上げると思ってたのですが」

想像と違う命令をするため、つい首をかしげて聞いてしまう。

よく外に遊びに出ては先々で問題を起こすため、逃げ脚だけは得意となり、誰かと手を組む時は自主的に囷となる、囷作戦が大好きとなってしまう魔王のことだから、てっきり今回も魔術の強いルーフォンと戦うものだと思っていたようだ。

さすが、いろいろなところで情報を蓄えているだけあり、変装した俺の姿も、噂だけでもわかるだけがある。

「ああ、さすがアマシユリ。そうしようかと思ったけど、ちよつぴり今は誰も見てない状況で捻りつぶしたくなっただよね。それにここにあるの鈍らしいし」

「ふざけるな！ お前一人でどうにかなるものでもない。一人より二人のほうが良い。囷作戦なら大歓迎だ」

「ということですので、ま、まずいので観客逃がしてきますね」

魔王様。と言いつうになったアマシユリは、必死に言葉を換えて、観客のほうへと足を運んで行った。

振り下ろしていた尻尾がもう一度上がる。またどこかをつぶすつもりなのだろうか。力強く、先ほどとは逆の方向に尻尾をずらし、振り下ろす。

「まずい！」

ルーフォンがそう怒鳴ったが、尻尾は、観客の真上で止まった。その下にはアマシユリが、魔術を使っているふりで魔力を使い、両手を上げて持ち上げるように得意の拘束魔法で、ドラゴンの尻尾をこれ以上下へ落ちないように拘束する。

攻撃が達成できなかったことに気付いたドラゴンは、顔をアマシユリのほうへと向いた。その瞬間。伸びた首のほうに向かって、ルーフォンが炎の玉を投げつける。魔術だ。

いきなりの攻撃に、ドラゴンは再度こちらに向き直る。するとそ

ここには、先ほどまで立ちはだかっていた、子供の姿がないと一瞬視線が泳ぐ。その瞬間背中に乗っていた魔物が叫び、背から血を流して落ちていく。

アマシユリのほうにドラゴンが気を取られている瞬間、崩れた瓦礫を利用して飛び移り、ドラゴンの背に乗っている魔物を目指した。そのあとルーフォンに気を取られた瞬間に、魔物の頭をつかみ、魔術を使うふりをして魔物の耳に小声でこうつぶやいた。

「ごめんね…。魔王に逆らったお前が悪いんだからね」

そのまま手の平にためた魔力で頭を握りつぶした。

ドラゴンの背中を乗っ取ったかのように、堂々と座ってやると、操っていた主がいなくなったことにより、ドラゴンは暴れ出した。振り落とされないようにしつかり毛につかまり、頭のほうへと登っていく。

揺れるドラゴンの尻尾は、あちらこちらへ叩き落しているが、すでにそこには観客がいなく、建物被害だけ。すでに、ルーフォンがいることすらも忘れてパニックに陥っているドラゴンは、綺麗に唱えられたルーフォンの魔術によりやく気付く。

相当怒ったのだらう。結構長い魔術を吟いていた分、攻撃は派手だった。

ドラゴン一体入りそうな円が、地面に描かれる。その中はどす黒く、飲み込まれそうな雰囲気があった。しかし、そのどす黒さのところどころにある赤いもの。それが少し血に見えた。

翼を立て、飛び立とうとするドラゴンに、俺は呪文を呟いたふりをして、魔力で重力魔術に似た重みを、ドラゴンの背に乗せてやる。飛び立つに立てないドラゴンの足元には、血のように駆け巡る赤い筋が増え、脈打っているようにも見えた。ルーフォンはまだ呪文を唱えている。いったいなんの技を出してくるのか分からず、少しだけ俺はワクワク感を覚えた。

地面が少し浮き出た気がした。いや、血のように脈を打っていた部分から、血の槍が地面から突き出し、その円の中にあるものすべてを突抜かせた。

感心して見ている暇はなかった。大人しく背に乗っていると巻き込まれると思い、ドラゴンの巨体に突き刺さった瞬間、俺は背から飛び降り、ルーフォンのほうへと舞い降りた。

少しすると、その槍は消えていき、その代わり、ドラゴンから流れ落ちてくる血が、試合会場を濡らした。

いったんその場から避難し、王のいる間へと向かった。すると、行動が早かったアマシユリは護衛を気絶させ、王の両手の自由を奪い拘束し、地面に這わせていた。

「あ、シレーナ。お疲れー」

「アマシユリも」

それから闘技場に、他国から来ていた警備の者たちが現れ、王を引き取らせた。

人間の間では、亡くなってしまった者を葬儀し、土へ返していた。

「…なんか、こんな大ごとになると思わなかったなあ」

「ははっそうだね」

「しかし…王が魔物と手を組んでいるとは」

「まあ、手を組んでることは悪くないんだけど、組み方が悪かったね」

そんな中、俺らは宿をとり、ルーフオンの手当てを行っていた。もちろんアマシユリがだが。

いろいろと疲れ切ってしまっている俺は、眠ってしまいたい。眠ると言っても、コピーに行くというわけではない。コピーを作成し続けているというのに、魔力だの魔術だの体術だのを使い続け、溜まりに溜まった疲労を本当にとりたいのだ。

もちろん、ルーフオンだって休みたいだろうし、アマシユリだって、シェイルに似た男の手当てなんて御免だろう。

あの闘技場の中には、審査員として各国の王の使いが来ていた。今回の騒ぎをすぐに各国王に伝えたらしく、勇者となった証をきちんと取りたいということで、思ったよりも面倒な書類を差し出され、それにすべてサインを入れた。

正式に決まりましたという印を、各国の王から頂くことになっているが、書類上のすべての手配は、アマシユリに任せてある。

「はい。手当て終了」

「っていうか、お前治癒魔術とか使えねえのかよ」

「シレーナだって使えないだろう？（治癒魔法）」

「うるせえな苦手なんだよー。もう疲れた。アマシユリ寝ようぜ」

自分の寢床にくるまり、布団の片隅を上げ、アマシユリを中に招き入れる。

どうして一緒に…とぶつくさ文句を言いながらも、魔王の願いを聞き入れないといけない立場上、背中を掻きながら布団の中に入ってきた。

アマシユリを一緒のベッドに入れた理由としては、かなりの疲労

の中眠ってしまったと、自分にかけている魔法が解けてしまい、魔王としての姿が浮かび上がってしまう可能性があったためだ。起きるときは、だいたい布団をかぶっているし、ぐっすり眠ってしまいたいタイプの俺のとしては、朝が早いなんて御免。必死に起こしてくるアマシユリが、俺の変化に一刻も早く対処してほしいからだ。

次の日の朝、疲れた体は少し回復しており、まぶしい朝日がカーテンの隙間から射しこんでいた。

窓際のベッドを選んだ以上仕方がないのだが、右腕を布団からだし、左側にいる魔王でもあるシレーナを胸に抱きしめ、護るように眠っていたみたいだ。布団に包まっているシレーナは、どうせまだ夢の中なのだろう。

ゆっくりと這い出るように、欠伸をしながらベッドから降りる。すると、壁側に位置するベッドに眠っていたルーフォンが、俺の目覚めに気付いたみたいで、ゆっくりと体を動かしながら瞼を開けた。一瞬シエイルがいるのかと思った。

せっかくシエイルのいない魔王と一緒にいれると言ったのに、なんだかシエイルから離れた気がしない。

「起きたのか…」

「お前こそ」

「おはよう…」

「おはよう」

「まだそこにいるガキは寝てるのか？」

「ガキってシレーナのこと？ 寝てるよ。起こすのが大変なんだ」

もう一度布団に入り、潜っている魔王のもとに体を寄せる。

ゆっくりと窓側の布団をめくり、シレーナの姿を確認するが、その姿は赤黒い髪を光らせていた。もう一度布団をなおし、もぐらせておく。

シレーナの背中をこすりながら、耳元で「シレーナ」と呟く。

（起きてください魔王！ 姿が！）

「んあっ…？」

脳味噌に直接話しかけると、ようやく起きたのか、姿を変えることなく体を起こそうとした。

まずいと思い、上にかかっている布団に力を入れ、ベッドに再度戻してやり耳元で囁く。

「姿が…」

「ん？ ああ」

（ええっとシレーナ…シレーナ）

昨日の姿を必死に思い出しながら、ペンキで塗り替えるように姿を変えていく。

その姿は相変わらず手早く、綺麗だった。

少し髪をみださせ、ゆっくりと布団の中から這い出す。ボーっとした頭で周りを見まわすと、先日泊まった宿の景色だった。入口の方に目をやると、端にルーフォンの姿があった。どこか行っていたのだろうか。

「何？ 夜遊び？」

「朝の挨拶する前に唐突だな。飲み物買ってきたんだよ。ほらっ」

そう言つて、片手にたくさん持っていたペットボトルを、アマシユリのほうに向かつて放り投げる。受け取りそびれたペットボトルが、床やベッドに散乱する。

その様子を見ていたアマシユリが、頬を膨れさせながらルーフォンに向かつて怒鳴りつける。

「ちよつと買いきじやない!？」

「えっ? そこ?」

てつきり、ものを投げるなどか言つと思つていたのに、まさか、買いきじていたところに怒るとは。意外な言葉につい驚いて、アマシユリのほうを見てしまう。

ぶつくさ文句を言いながらも、散乱したペットボトルを物色し、お目当ての物を見つけて口に含んでいた。投げることに關しては問題ないのだろうか。

じつとアマシユリのほうを見ていると、視線に気づいたのかペットボトルを口から離し、またペットボトルを物色し始めた。次は何を見つけるのかと思つたら、甘いロイヤルミルクティだった。

「はい。甘いのが好きですよね」

「おつ、さすがアマシユリ」

「で? なんで見つめていたんですか?」

ペットボトルの固い蓋と戦い、力いっぱいまわして開け、口に含める。

朝は甘い飲み物が喉にいい。と、誰かが言っていた気がした。

「ん? いや、なんか俺の知らないアマシユリがいっぱいいるなつて」

「はあ? 僕は一人しかいないです」

（いや、そういうことじゃないんだけどなあ…）

こんなにも突っ込みがいのある奴だとは思わなかった。

仕えているのは長いが、実際一緒にいる時間自体はそんなに多くはない。だからこそ、知らないアマシユリの面があってもおかしくはないのだが、こんなにも面白いやつだとは思わなかった。

笑いをこらえている中、ルーフオンが口を開く。

「気になっっていることがあるんだが」

「ああ？　なんだよ」

「もしかして、シレーナのほうで立場が上なのか？」

いきなりな質問。それに、何処から出てくるのか分からないその質問に、アマシユリとともに首をかしげてしまう。

「どうしてだ？」

「乱暴だが、アマシユリはシレーナに少しだが敬語を使っている様子があるからな」

「あー、まあ、連れですから。先日の闘技場にだって、無駄に暴れないか見張りのためだったから」

「なんだアマシユリ。嫌だったのか？」

「嫌とかではないですが…。そうですね。シレーナのほうで立場が上です。上どころじゃない。上の中の上」

呆れたようにため息をつきながら、ペットボトルの淵に口をあて、喉を潤おす。

アマシユリにとって、答えにくい質問だ。

魔王様だからこそ、一番上の立場であって、こんな身近にいていいものではない。これがアマシユリの考えだ。

だれにも見つからないような位置にいて、護衛に守られ誰の味方もせず、気に食わない者たちを無残に殺す。そんな奴が魔王だと思っていたアマシユリの想像力もすごいが、のほほんと呑気に人間の土地に足を踏み入れている現実の魔王も魔王なのだろう。

しかも、「勇者になっちゃった。エヘッ」なんて、舌を出しながら言っただけでおかしくない性格をしている。

「そうか……。じゃあもう一つ聞いてもいいか？」

「なんだよ質問ばかりだな」

乱れた髪を直しながら、ルーフォンのほつを見ることなく、文句をぶつくさ言う。

「先日の戦い、途中で魔術を数個使っていたが、最後の魔術はなんだ」

「え？」

「あんな魔術は聞いたことも見たこともない」

ドラゴンに使用したルーフォンの魔術も初めてみたよ。

と、言いたいのは山々だが、今はそれよりもあの時見せた、水の魔法だろう。

ルーフォンが好んで使用する炎系があまり好きではない。だからこそ、水の魔術や魔法を必死に覚えた。あまり数多くはないが、魔法に関してならば、ほとんどの事ができると言っても過言ではないくらい、鍛え上げた。その結果がああ“偽魔術”。

いつかは聞かれるだろうと思っていたが、何の答も用意していない今、言葉が詰まってしまふ。

「あ……それは……。言っただろう？ 開発したって」

「そう簡単に開発なんかできないし、威力の割に詠唱時間が短い。

どういうことだ？ 是非教えてほしい」

「本当にあれは勘だったんだって。切羽詰まっていたし（言葉も詰まってるけど…）」

なんてごまかしは効かないのだろうか。

そんなに威力を上げたつもりはないのだが、魔術にしては強すぎただろうか。いろいろ考えているうちに、頭痛がしてくる。アマシユリにバトンタッチをしたかったが、人間の飲み物が気に入ったのか、いろいろなものを空けては会話も聞かずに、次のものを開けていた。

「…そうか。だが、ドラゴンと戦っているときも、最後の重力魔術、初歩的な魔術しか使えないと思っていたが、他の魔術を知っているのならば、どうして試合中使用しなかった。俺の時だけじゃない。他の試合だって、本気でやりあっていたじゃない」

「だって…。魔術で傷つけたらかわいそうだから…」

何とも言えない質問をされて、とっさに答えた言葉に、アマシユリは口に含まれていた飲み物をふきだした。

俺だって笑いたい。笑いこけたいのには山々だ。

だが、単純に「本気でやりあったら、やり合いではなく、一方的な殺戮になっちゃう」なんて言ってみる。不審がられるにきまつている。もしくは、「その一方的な殺戮となってもいいから、本気で俺と戦え」なんて、ルーフォンの場合言いそうだ。

「お前：結構バカなんだな」

「うるせっ」

「ぶあぁっはっはっ。もう駄目笑いが止まらない…」

呆れたルーフォンにプチっときた俺、笑いが止まらないアマシユ

り。

いやだと言つても、ルーフォンはついてくるだろうし、この三人で人間の土地を旅する事を考えると、だんだん“勇者”から身を引きたくなってきた。

## 第7話

「さあて。近くの国から様子を見に行きますか」

あの後、部屋に一国の使いの方が現れ、各国の王から印を頂いた勇者の証を受け取り、宿を後にした。

ドラゴンが暴れた闘技場のほうが心配だったが、行ったところで手伝えることはそうないだろうとルーフォンに怒られ、先の旅路へと足を進めた。

といっても、特別これといって目的地を考えていなかったから、国を出て、森をさまよう。

行く国で方向は決まるのだが、まだ最初の地点。行く場所なんかありすぎる。ということで、近い国から足を向けてみることにした。

天気は快晴、雲が現れることも、雨の様子を気にしなくてもいい。旅をするには良い天気だった。

しかし、天気と裏腹に、国と国の境目に位置する森の中では、魔物の気配が消えなかった。といっても、ルーフォン以外は魔物なのでそんなには気にしないのだが、殺気立っている魔物の気配だけではどうも気分がよくなれなかった。

人間には、あまり魔物の気配を感じ取ることができないと聞いていたが、殺気だけには反応したのだろう。先ほどからルーフォンが、いつでも剣を抜く気にいるかのように、右手を左側の腰に備えてある剣の柄を軽く握っていた。

「シレーナ…」

躊躇いがちに、俺の服の裾を軽くつかみながら、後ろに隠れるように弱々しい声を出した。

裾をつかんでいる手をつかみ、ゆっくりと握って落ち着かせてやる。

「アマシユリ、怖い？」

「怖い…わけじゃないけど、やっぱり慣れないんです。殺気とか、争いに」

魔物なのに。

あまり争い事が好きではないアマシユリは、自分は参戦しないため、見慣れてはいるものの、参戦することはなかった。魔物なのに珍しい気はするが、実際そこは心の持ちようと慣れた。

幼いころから、そういう状況に立ち会っていなかったから、対処の仕方が分からないのだろう。それに、情報屋ということからして魔物から護られる方が多い。自分を護る程度の魔法なら使えるが、傷をつけるほどの…というのが情報屋のほとんどだ。

「大丈夫。アマシユリは俺が護るよ」

「お役に立てず申し訳ないです…」

「気にするな。魔術に関しては、ルーフオンもいるしな」

「ふん」

何もできないただの子供。と、アマシユリのことを考えているかのような、鼻の笑い方だった。

友人を馬鹿にするな。と怒鳴ってやりたいのは山々なのだが、闘技場で卑怯なことに、魔法を使ったという罪悪感のため、その言葉を口にはできなかった。

もうそろそろルーフォンに対しても、この殺気だらけの空気にしても、苛立ちが隠せなくなり、魔物の気配がするほうに向かって、木を倒せるくらいの呪文を唱える。

力強い水の玉が、ある木の根元付近の幹にぶつかり、衝撃に耐えられなかった古びた木は、根のほうから崩れていく。

その木の枝に隠れていた魔物二匹が、倒れる木を蹴飛ばし、地に足をついた。

「短気な人間だなあ。もう少し楽しませてくれてもよかったんじゃないの？」

現れたのは、白に近いベージュ色の短い髪を、ツンツンに立たせて、タンクトップにジーンズという楽な服装をした魔物。黒い髪が肩付近まで伸ばされ、その辺の女をナンパしていそうなナルシスト系魔物。どちらも弱そうだが、アマシユリには十分の強敵に見えるのだろう。

本当に運だけで闘技場の敵を数名倒したのだろうと、運の強さに感心してしまう。

一応先ほどの街で武器の調達はしているから、短剣等のアマシユリが割と得意とする武器は持たせてある。この二匹の魔物程度だったら、アマシユリにも自分を護るくらいならできるだろう。そう信じ、につこりとほほ笑みながら、アマシユリの元から離れ、魔物のほうへと近寄っていく。

「安心しなよあ。俺が今から楽しませてあげるから」

飾り程度に所持している剣を抜き、二匹の魔物に向かって剣先を向けた。

基本的に剣や槍など、大きなものを武器として所持しない魔物だからこそ、相手は丸腰同然だ。しかし、その代わりと言わんばかり

に魔法を優位に使ってくるだろう。

先攻は俺に任せるつもりなのか、ルーフォンは剣を抜き、戦う準備をしているものの、アマシユリをかばうように背に回して俺と魔物の様子を眺めていた。

「そうかよ。それはありがたいことで」

ツンツン頭の魔物の右手に、魔力が溜まるのが分かる。そこを目掛けて、先ほど木に向けた基本水魔術を発動させる。ルーフォンさえいなければ、魔力を使つて捻りつぶしていたのだが、全てのものを見逃さないかのように後ろで見守られていれば、闘技場のようにこつそり魔力を使うこともできない。

邪魔した魔術の所為で、溜めた魔力を撒かれ、魔物の機嫌はあまりよろしくない方向へと向かつているようだ。

黒髪のほうへ気をまわすことは忘れない。二人を一気に魔術で相手をするのは疲れるが、今はそんなことを言ってもいられない。邪魔な剣をいったん鞘におさめる。

魔力を十分にためることができなかったツンツン頭のほうに身を接近させ、近距離で姿勢を低くし、左足を相手側に向けて右手を拳にし、右下から左上に向かうように腰をひねり、拳を相手の腹部に向かつて持ち上げるようにアップパーをかます。

くの字に曲がり、近付いた魔物の広く用意された額に向かつて、思いっきり頭突きを喰らわせる。

意識を飛ばしたのか、そのまま崩れる魔物の後ろから、黒髪が魔法を俺に向かつて使用してきた。

黒い矢のようなものが、頭や心臓、腹部を狙って数本向かつてきた。

もともと低めに態勢をとっていたせいで、しゃがんでもどれか一本には当たってしまう。

（魔法が使いたい！！）

口では言えないから、アマシユリやリベリオ、ヴィンスに向かってテレパシーを送った。

シエイルにまで送ると、使ってしまったと冷たく言われてしまいそうだったので避けたが。

あまりしたくはなかったのだが、右足に体重をかけ、地を蹴りつけ横に転がるように避ける。地に手をつき、自分の身を押し上げて再度足を地につけた。しかし、ゆっくりしている暇をも与えず、次から次へと使用してくる魔法に、だんだん苛立ちを覚えてくる。

「アマシユリ！」

「はい！」

（魔法を使うことを許すから、あの魔物を止めてくれ…）

（いいのですか？）

（お前だったら問題ないだろう）

「攻撃を仕組んできたあなたが悪いんですからね」

そう言って、アマシユリは両手を黒髪の魔物のほうへと向け、得意の拘束魔法で黒髪野郎の身体をきつく硬直させる。

「なっ…貴様魔物だったのか…どうして人間の味方に」

「事情がある故」

拘束された魔物は、アマシユリが魔物だということに気づき、どうにか抵抗してやろうと暴れ出すが、そう低級魔物にアマシユリの拘束魔法から逃げ出すことなんかできやしないだろう。

その隙に、黒髪野郎の目の前にジャンプし近寄ると、一度鞘に納

めた剣を抜き、首を綺麗に跳ね飛ばしてやった。

うるさかった殺気が、ようやく静まりかえり、緊張の糸が切れたアマシユリは、その場に崩れるように座り込んでしまった。

「無事か？ アマシユリ」

剣に付着した血を振り払い、鞘に納めてアマシユリのほうへと向かった。

何とかといわんばかりに、片手をあげて見せていた。

「…お前魔物…だったのか」

ルーフォンの存在を忘れていた。

抜いていた剣先を、座り込んでいるアマシユリの首元にあて、口を再度開く。

「答える」

「…そうだよ。魔物だよ…。だからなんだよ」

「なんだよだと!？」

「実際僕はルーフォンに対して攻撃を仕掛けたか？ 違うだろ？」

「ルーフォン。魔物を毛嫌うのはわかるが、俺の親友にまで手を出すとすると、俺はお前を殺さなければいけないのだが？」

アマシユリに魔法を許したのは俺だ。それに関して、アマシユリに手を出すようだったら、どんなにいいやつだろうが容赦なく殺さなければならぬ。

剣を抜かず、ルーフォンの目を見つめ、手を出すなど瞳だけで脅して見せる。

ルーフォンが魔物に対して、何らかの怒りを見せているのは知っている。だからこそ、魔物であるアマシユリを許せないのだろうが、

今の現状でアマシユリに手を下して罪があるのは、ルーフォンとなってしまう。それは、ルーフォンにだってわかってのことだろう。ゆっくりと剣を握る力が抜けてきているのに気づいた。諦めたかのようにいったん目をつむり、剣を鞘に納める。

「そうだな。今まで黙っていたのも、俺が魔物を毛嫌いしているっていうのを知っていたからだろうし、魔物が人間の街に堂々ということを知っている人が増えるのが困るからだろう」

「そんなとこ」

「しかし、聞かせて頂きたい。どうして人間であるシレーナと、魔物であるアマシユリが手を組んでいる？」

ルーフォンは、自分を落ち着かせるためにか、その場に座り込み胡坐をかいた。その自分の右ひざに右ひじを乗せ、手の平に顎を乗せた。相当考えているのだろう。

そう深く考えないでいただきたいのが本音なのだが、ルーフォンにとっては大事なところなのだろう。

「魔物に襲われているアマシユリを、俺が助けただけ」

「たったそれだけか？」

「たったそれだけでも、命の恩人だと感じるのです。魔物は、自分が慕う一番のものを知っている」

アマシユリは、俺の適当な嘘に乗ってくるように、そう口にした。確かに、魔物は自分が慕い、尊敬する者に対しては、従順になる。しかし、それは人間も同じだろう。だから、ルーフォンにだってわかるはずなのだ。

「だからアマシユリは、シレーナを立場が上だと言い、文句は言いながらも口調に馴れ馴れしさを感じないのか」

「そういうこと。だから僕はシレーナを護りたい。力にはなれない  
とは思うけど、今回みたいに敵を拘束するくらいだったら、僕には  
できる」

「…先ほどは悪かった。魔物はすべて敵だと決め込んでいたから、  
つい剣先を向けてしまった」

「わかってます。気にはしてない」

## 第8話

アマシユリが魔物だとばれたおかげで、少しは戦いやすくなった。いざとなったらアマシユリに堂々と拘束してもらえる分、次の街へと行く間の戦いは、だいぶん楽になっていた。しかし、他の人間の前ではあまり魔法は使えないだろう。

いいところでは追い出され、悪いところでは始末を考えるだろう。そのことをアマシユリに言わなくとも、一番わかっているとは思うのだが、少しだけ不便にさせてしまった。

一日で次の街に着くのは無理があつたのか、地図上ではまだ半分以上しか歩いていないという位置で、日が暮れてしまった。途中、魔物の襲撃があつたからこそ、余計に進むスピードが落ちてしまった。

さすがに、ルーフオンにも疲れが溜まつたのだろう。今日はもう休もうと俺が口にし、寢床を確保すると、一番に腰をおろしたのがルーフオンで、それで何よりも動きたくないかのように、準備した寢床に身を任せていた。

魔法が使えるということで、あまりアマシユリに気を取られなくなったルーフオンは、魔術や巧みな剣術で魔物と争っていた。基本的に、俺は囷となったり、ずるがしこい方法で魔物を潰し続け、楽しんでいたのでこそ、あまり疲労を感じてはいない。しかし、もうそろそろ城の状況を知るために、コピーと精神交換を行いたい。

だが、残念ながらアマシユリも久々に連続で魔法を使用したことにより、座り込んだ状況で、ウトウトし始めていた。そんな状況で、

見張りをさせるわけにはいかない。

ルーフォンのほうを見ると、今すぐに寝そうな雰囲気とまではいかないが、寝ようと思えばすぐに夢の中に入れるだろう。

「見張りは俺がするから寝てろよ」

アマシユリにそう囁くと、うんとうなずき、ゆっくりと寝袋の中に身をゆだねていた。

あやすようにポンポンと肩付近をなでてやる。いつもとんだか逆で、少しだけ嬉しかった。

「ルーフォンも疲れてるだろう？ 暫く寝てろよ」

「ああ、そうさせてもらおう。見張り、交代したくなったら起こせ」  
「ああ」

言われなくても。と言いたかったが、瞼を伏せたルーフォンは、浅いのだろうが、眠りの中へ入って行ってしまった。

ルーフォンが眠っていても、魔法は使えない。性格上、眠っているフリなんかしてそうだし、暴れている様子があつたら、すぐに目を開けるだろう。警戒心がそれなりにあるルーフォンにとって、少しでも気を抜いたりなんかできない。

暫くボーっとしていると、ルーフォンの寝床がゴソゴソ動きだした。

昨日のソフトなベッドとは違く、身体が痛くなってきて目が覚めたのだろう。

腰を軸に上半身の身起こし、首の裏を掻いている。いったんあた

りを見回して、右斜め後ろに位置する俺の姿をきちんととらえた。

「見張り、交代する」

「いや、まだいいよ。っていうか、今日はいいかも。なんか目が冴えて寝れそうにないや」

「そうか。でも横にくらいなっておけ。思っているよりも疲労があるはずだ。寝れなくても、目をつむっているだけで少しは違うぞ」

「…はいはい」

どうせいやだと言っても、文句を言ってくるのだろう。

疲れていないわけではない。お言葉に甘えて、アマシユリのすぐ隣に準備していた寝袋の中に、身をひそめた。

寝袋は便利だ。身体すべてを隠そうと思えばしまいこめるから。

少し気を抜いてしまつて変身が解けたとしても、事前に戻すことができる。

しかし、眠れない。

すぐ隣に起きているルーフォンが座っているという状況で、ぐっすりと眠ってしまうほうが難しい。きつと、アマシユリは俺が起きていると思つて睡眠に入ってしまったのだろうが、すぐ近くに起きているルーフォンがいることを考えたら、いつ寝込みを襲われるかわからない。

「ルー。お前はなんで魔物が嫌いなんだ？」

「…昔は嫌いじゃなかった」

「昔…は？」

「そう。昔はな。住んでいたところは、魔物の地から離れていたせいか、被害があまりなくてな、人間とは違う、別の生き物である魔物がこの世に存在する気がしなかったんだ。でも大人は子供に魔術を教え、身につけさせる。どんな時に必要なのかなんて、小さかった俺には分からなかった」

今は、小さい子供にまで魔術を教えるようになってきているのか。ある一族だったり、決心を持った者たちが修行を積み、魔術を習っていた時代とは少し変わってきているのだろう。

一般の民間までも、基礎の魔術は使えるように鍛えられているようだった。

「でもある日、ある魔物が俺の家族を襲ったんだ。いや、俺だけじゃない。町のみんなが襲われた」

奇襲だろう。

人が多く住むところを狙ったり、人が眠っているところを襲ったりするのが、魔物のやり方だった。それは、仲間の仇だったり、恨みだったり。一切の害もないところに、魔物がいきなり襲撃を向けるなんて思えなかった。

子供では分からなかった、大人の行動により、魔物を怒らせたのだろう。

「数の多い魔物を見たのは初めてで、どうすればいいかわからなかったんだ。父も母も、魔物の魔法によって潰された。その時が魔法を初めてみた瞬間だった。魔術しか見ていなかったから、あんなにも早く攻撃できるなんて思ってもいなかった」

「そっか…両親が」

「ああ。魔術が得意だった歳の離れた姉が、俺を魔物から見えないように術をかけてくれて、逃げようと森へ走ったのさ。でも、その時俺は知らなかったんだ。その、魔物に見えない術を、姉は自分自身にかけられるほど器用じゃなかったなんて」

年齢が離れていて、それで何より得意なものがある姿を見てしまうと、何でもできるんじゃないかと、子供は錯覚してしまう。それ

で安心しきっていたのだろう。

よく人間に見られる光景だった。

馬鹿な子供は、ただ大人がふざけて魔物のフリをしているものと、思い込む地域もあった。

ルーフォンも、いきなりの奇襲なのに姉が対処してくれたせいで、何でもできる姉だと勝手に思い込んでしまったのだろう。

「すぐに見つかった姉は、後ろから何かの魔法に刺されて……。これからどうすればいいのかとか、子供なんてそんなとき考えられないだろう？ 怖くなって声も出なくて。足を動かすこともできなかった。でも、術をかけた本人が死を迎えた時、残した術は時間はかかって、徐々に崩れてしまう。そんなこともわかんなくて、ただ姉の死体を両手で口をふさぎながら見降ろしてるしかできなかった俺を、魔物が気付いたんだ」

逃げろよ。

そう思ったが、今の話ではなく、子供の頃の話だ。

恐怖でどうすればいいのかわからない子供は、今まで世話してくれた人がいなくなった瞬間、道を失い、そのまま魔物に殺されてしまう。そんな光景はよく見かけてしまう。

「気付かれたとは思った。でも、一人残っていたって仕方がないし、足なんか震えて逃げられなかった。たぶん、何か襲撃する理由があったのかなんか知らない。でも、わけもわからない子供や大人まで殺す魔物の気持ちかわからなかった。だから魔物を嫌った。憎んだ。それから行く先々で、魔物に襲われたという話を聞くと、怒りは収まらなかった。でもどうしてだろうな、アマシユリが魔物だと知ったはずなのに、アマシユリをあまり憎く思えない」

「それは、アマシユリがお前に何もしいからだろう？ それより、お前はどうして生きていられた？ 動けなかったのだろう？」

そこが気になる。

足が震えてその場から逃げられないというのに、どうしてその時魔物に襲われず、今ここに生きてたくましく育っているのだろう。

質問に、暫く答えようとはしないルーフォン。言いくいのだろ  
うかと思い、言いくいのならと諦めようとした時、ゆっくりと口  
を開いた。

「助けが来たんだ。一人の男の子が」

「男の子？」

襲撃をされていて、あまり魔物と接点がない街に、他の男の子が  
無事でいる気がしなかったし、無事でいたとしても、他人を助けら  
れるほど、余裕がある子供がいたのだろうか。

話が気になり、寝床から身を起こし、上半身だけを外に出して月  
の光を浴びるように、月を見上げているルーフォンの後頭部を見つ  
めた。

「ああ。そのころの俺と同じくらい、子供のくせして安定した表情  
をしていた。魔物を目の前にしているというのに、怖気づかなかっ  
た。あまりにもこわくて、その男の子がどうやって魔物を退散さ  
せたのかまでは覚えてないが、気がつけば魔物がいなくて、目の前  
にその男の子が座って、気がつくのを待っていた」

「へえ…。そいつは今？」

「知らない。俺の手を引いて、大きな街に連れていかれて、孤児院  
に預けられた。その孤児院の子なのかと思ったけど、安心して泣い  
ている間に姿を消していた」

「じゃあそれから会ってないのか？」

「いや、たまに出かけると、人目の付かない位置で見かけては一緒  
に遊んだ」

「そいつの名は…？」

聞いてどうする。

そう思ったが、このエピソードをどこかで聞いた気がする。しかし、何処で聞いたのかも、本当にこれだったのかもあまり思いだせないのだが、少なくとも似たような内容を知っている。

魔物に襲われた子供。

それを追い払うことができた。

尚且つ安全なところまで送っていく。

ときどき様子を見るに…。

見に？ しかし、ルーフオンが言うには、見かけた。と言っている。

「名前か？ 忘れたくない。ヴィンスという名だ」

「…ヴィンス…」

思いだした。

一時期、子供の姿をして人間の土地で過ごしたことがあると言っていて、興味がわいた俺は、よく人間の土地であったことを、庭の手入れの休憩中、ヴィンスに聞いていた。

その中の一つに、珍しく楽しげに話す内容があった。それがこれだった。

怖いくせに、逃げようとしなくて、ただ立ち尽くしている子供がいた。それを助けてやって、安全なところに送って行った。そのあとは、こっそり様子を見に行ったり、話し相手になってやったりしていた。と。

その立ちつくしている子供が、ルーフオンだったのだろう。

「んー…なに？ 寝ないんですか…？」

声に気付いたのか、もぞもぞとアマシユリの寝袋が動き、顔がもそつと出てきた。

「あぁっ起こしたか？」

「まー。っていうか、ヴィンスがどうかしましたか？」

「…ヴィンスを知っているのか」

「…あ」

丁度ヴィンスという単語が聞こえていたのだろう。内容まではわからなくて、つい知り合いのような言い方をしてしまった。

魔物だということがばれていたとしても、ヴィンスが魔物だということ自体、ルーフオンは知らないだろう。

「アマシユリが、旅をしているときによく会ってたんだよな。アマシユリから聞いてて、耳に残ってたんだ」

「お前も…ヴィンスと会っていたのか」

「あぁ。本当時々だったけど…」

適当な嘘に、アマシユリも不自然なく乗ってきた。

しかし、魔物に助けられたとルーフオンが知ったら、どうするのだろうか。一見魔物だとわかる魔物と、人間と見た目が変わらない者がいる。城にいるものはほとんど人間と見た目があまり変わらない者たちばかりだ。

助けられていて、慕っているのであれば、別に魔物だろうが良いだろう。逆に、ヴィンスも魔物だと伝え、魔物すべてが悪いやつばかりというわけではないことを、味わわせてみるのもいいかもしれない。

「ルーは魔物か人間かわかるか？」

「一目見て魔物だとわかる容姿のやつ以外はわからん。アマシユリ

みたいなのは気づけない」

ということは、ヴィンスを見ても、魔物だと言われない限り、人間だと思いつけるつもりなのだろう。

だったら…。

「じゃあ、ヴィンスが魔物だったらどうするさ？」

「別に。ヴィンスは命の恩人だ。どういう状況かは知らないが、アマシユリでいうお前のような存在に当たる。恨んだりはいしない」

「そう」

「じゃあ僕の口から言わせてもらおうよ？ ヴィンスは魔物だよ」

「…そうか」

一言だけ。

そのたった一言だけでも、ほんの少しは傷ついているのがわかる。嫌っていた魔物に助けられた。あまり喜ばしいことには感じられない。ただ、俺としては、仲が悪くなるよりは、停滞。もしくは良くなるほうがいいに決まっている。

何か思いついたのか、近くにあった自分の荷物から、ある輝く物を取り出した。

ガラスのような、宝石のような石が付いているネックレスだ。それを今にでも寝てしまいそうなアマシユリの首にかけてやる。

「礼だ」

「なんの？」

「ヴィンスの話。不思議だと思っていたんだ。小さい子供が、魔物を追い払えるはずがないと、心のどこかではわかっていて、どこかでこの人も魔物なんじゃないかとは思ってた。でも、人間だって信じていたかった。現実を見せてくれた礼だ。それは魔術や魔法の威力を増大する宝石が入ってる。少しは役に立つだろう」

「いいのか？」

「よくないなら渡さない」

「ありがとう」

冷たいやつだと思っていたからこそ、こういうほんの小さな優しさがうれしくなる。照れたのか、ルーフォンのほうを見るのをやめ、再度寝袋の中に潜り込むアマシユリ。

少し赤く染まった頬を、アマシユリで見られるとは思わなかった。そういうのも、冷たくかわしそうな気がしていたから。

「ん？ まてよ」

「なんだ」

「宝石が何だつて？」

「入ってる」

「そうじゃなくて、その宝石はどんな役割してるんだって聞いてんの」

「魔術や魔法の威力が増すって…もしかして知らなかったのか？」

「はじめて知った…。アマシユリにだけずるい！」

「わかったわかった。次の街で選ぶの手伝ってやるよ」

「約束だぞ！」

## 第9話

「シレーナ。知らなかったの？」

「誰も教えてくれなかっただろう」

「じゃあなんで…」

「ん？」

「いや」

次の日、目が覚めて次の街へ足を進めていると、夜中に話していた宝石の話になった。

魔王である俺は、既に知っているものだと思っていたのだろう。呆れたような顔をした後、何かを思い出したかのように、アマシュリは何かを言いかけたが、何も気づいていない様子の俺を見た後、口を閉ざしてしまった。

シェイルがそのようなものを持っていたのに。と言いたかったのだろうか。

シェイルなら持っていて教えてくれなさそうだし、あり得る。

（そういえば、宝石といえば…）

宝石。ではないと思うが、父から譲り受けたネックレスも、同じようなものなのだろうか。

「そういえば、アマシュリなら知っているか？ 人魚の涙」

「あ、うん。噂には…」

「人魚の涙？ 何だ？」

はじめて聞いた言葉に、俺は首をかしげながらルーフォンを見る。ちらりとアマシユリのほうを見ると、少しだけ気まずそうにしている。話していたから聞いたのだが、聞いてはいけないものだったのだろうか？ それとも、ただ馬鹿にされるぞという忠告だったのか。

「まあ、そんなこつたろうとは思ったよ。宝石の中でも最上級の物だ。身につけているだけで、強力な力を得るって」

「すつげえっ！　じゃあ、ほんの小さな魔術でも、威力がつええつてこと？」

「そーいうこと。ただし、扱うのが難しいっていうのと、そう簡単には見つけないって話」

「へえ… どのくらいとれろんだ！？」

「人魚が死に際に流す涙がそうなんだが、人魚自体本当にいるのかも危つい上、争いを好まない癖に、人間よりも魔物に懐きやすいから、魔物の領域に位置する。っていう言い伝え。宝石がほしいがために魔物の土地に行く勇氣のある奴がいらないからこそ、貴重で言い伝えにしかないってわけ。噂では、魔王が持っているという話もあるからこそ、ただの言い伝えなんじゃないかってあきらめてるけどな」

「魔王が…」

噂だとしても、魔王が持っている。

それでなおかつ貴重。

手に入れたら莫大の力を得る。

一度だけ不思議に思ったことがある。魔王になる際に、魔物が狙ったもの。それは俺が所持している、父からの形見。これさえ手に入れば、強い力を得るからと、狙ってくる魔物がいたとしてもおかしくはない。

どうして形見がそんなにほしがるのか不思議になっていたが、これが“人魚の涙”といわれているものであれば、辻褄が合う。

それに、噂だとしても魔王が持っているとなれば、これくらいしかない。

黙り込んでしまった俺に、アマシユリはテレパシーを送ってきた。

（魔王…？ どうなされました？）

（…アマシユリ。もしかして、俺が持つてるこの形見って…）

（…）

（アマシユリ！ 知ってるんだろう？）

（そうです。俗に言う“人魚の涙”です）

これが。魔王の証。

見つかってはいけない。

噂というものは、先入観にもなる。

俺が持っていたら、魔王だと疑われかねない。もしくは、結局噂は噂。こんなガキが持つていて、“人魚の涙”と知らずだとすれば、見つからなくてもおかしくはない。どちらかだろう。

（アマシユリ、俺ってもしかして）

（…王？）

（俺って…すげえっ？）

（は？ まあ、持つてる時点で貴重ですからね）

（使いこなせれば最強じゃん！ 魔王殺せんじゃん！？）

（いや、シレーナ。だんだん勇者化してきてますけど、魔王はあなたですからね！？ 自分を殺すことなんて、人魚の涙がなくても簡単でしょうが。何を言い出すんですか）

（だから、魔王を適当な魔物に仕立て上げて、俺が魔王さつさと殺せば、みんなが納得するんじゃないかって。それで、魔王を殺したから、魔王の座は俺が頂く。それでもって、共存してみましょ。な

んて言ってみる。なんか、認められた気が…)

(馬鹿ですか…)

(ひどっ！)

「おい」

「あっ？」

アマシユリと会話テレパシーをしていると、ルーフォンが、不思議そうな顔で見ている。

「いきなり黙り込んで、何を考えてる」

「いやー。その“人魚の涙”さえ手に入れられれば、魔王簡単に殺せそうだなって」

嘘は言っていない。

手に入れている。という現状を隠しただけであって、この旅の最終目的は“魔王討伐”なのだから、そういう思考になったっておかしくないだろう。

「その“人魚の涙”が魔王所持疑惑あるんだって」

「奪えばいい。もしくは、それ一個しかないわけじゃねえだろ？ 別個の物を見つければいい」

「簡単に言っな…」

（魔王。ご連絡です）

今日も魔物を数匹潰しながらも、先へと進み、日が真上まで来ていた。丁度昼ごろだろう。少しおなかがすいたなと思いつながら、ポーっと歩いていると、いきなりシェイルから通信が入った。  
テレバシー

一瞬足が止まりかけたが、気にせず足は進める。

（どうした？）

（ヴィンスが感じたのですが、遠くの方から魔物が数匹城へ向かってきてます）

（へえ。なに？ 危険な気でも感じた？）

（はい。戦闘態勢に入っているみたいだと。魔王。城にお戻り願います）

（えー…精神だけでもいい？）

（構いません）

ただ、何かの報告だけかと思っていたが、敵意を感じてしまえば、シェイルは戦闘に入るだろう。ということは、ポーっとしているコピーだけでは、いろいろ不便だということだ。

数匹と言っていたが、はつきりと何匹か気になるところだ。

足をすつと止め、子供が歩くのに疲れたかのようにしゃがみこみ、振り向いたアマシユリに上目づかいで見つめる。

「どうかしましたか？」

「眠い…疲れた。もう歩きたくない」

「だからちゃんと寝ておけといっただろう」

「寝たもん。ちょっとだけ」

頬をふくらまし、ルーフォンの冷たい一言に目を伏せる。

拗ねたように、地面に人差し指で8の字を書き続ける。そのウザったい雰囲気、アマシユリが先にため息をつく。

「じゃあ、少し休みますか。ずっと歩きっぱなしでしたし」

すぐ近くの木に寄りかかり、座るアマシユリ。

仕方がないかと、ルーフォンもアマシユリの隣の木に立ったまま寄りかかる。

やったと顔を輝かせながら、アマシユリの隣に座り、膝の上に頭を乗せて横になる。

「ちょっと甘えすぎですよ」

「いいからいいから」

（すまない。魔王の城に敵意をもった魔物が数匹近付いてきてるみたいなんだ）

（えっ……。でも、シエイルだけでも十分じゃ？）

（言っただけでなかったんだが、魔王の間に俺のコピーを作っておいたんだ）

（じゃあ、そちらに精神を持っていくつもりで？）

（そういうこと。収まるまで向こうに精神飛ばしてるから、俺の警護よろしく）

（早めに帰ってきてくださいよ）

（まかせろ）



## 第10話

前に、闘技場でも抜け殻のように眠ってしまったことがある。

ただ疲れて眠っただけなのかと思ったが、今もまた、無防備に眠ってしまったところを見ると、もしかしたら前回も、精神を向こうに持って行っていたのかもしれない。

あの時は、さすがに騒げば起きるだろうと思っていたが、今回は騒いだところで、起きる起きないの問題ではないとわかってしまった。向こうも危ない状態になっているとなれば、こちらの本体に傷をつけるわけにはいかない。

しかも、前みたいに魔物がいるわけでもなく、人間同士の戦いで、それでなおかつ選手権みたいなものだったからこそ、控え室にいる分にはあまり危険がなかったようなものだ。しかし、今ここは魔物がウジャウジャいるような状況だ。見つかったら戦闘態勢に入るのは間違いない。

シレーナ…魔王がこちらに戻るまで、魔物が現れなければいいのだが。

「アマシユリ。そいつはいつもこうワガママなのか」

「え？ うん。そうだね。いつもわがままでみんなを振りまわしてたな」

柔らかいシレーナの髪を、そっと優しくなでてやる。

口を開かなければ、可愛いものだ。しかし、口を開くとワガママだったり、喧嘩だったりを始め出してしまう。それでも魔王の側から離れない俺やリベリオ、シェイル達は、ワガママじゃない面の魔王も知っている。

姿かたちが魔王と離れているシレーナでも、性格は同じだ。子供っぽい性格をしているからこそ、扱い方が簡単だ。喜ぶことをしてやれば、わがままも少なくなる。

「みんな？　ほかに仲間がいるのか？」

「うん。勇者とかに興味がないし、魔王討伐にも興味がないやつらがね。勇者になるって言った時も、みんなまた面倒なことをって顔をするんだ」

「それでもお前はついてきたのか」

「まあね。何かあったら嫌だし」

「もしかして、唐突なわがままに付いていけなくなつて他の奴は来なかったのか？」

「ううん。興味がなくて言っただろう？　シレーナのことはずごく心配してると思うけど、意思がないやつが勇者の近くにいても仕方がないしね」

そもそもみんな魔物だし。

と心の中で笑いながらも、うつすらとほほ笑み、瞼を閉じたシレーナの顔を見つめる。

実を言うと、魔王の父を数回見たことがある。誰とも比にならない強さを持っており、不用意に近づくことも許されなかった。しかし、無邪気な子供は、そんな迫力も知らないのか、気にせず足元に寄ってくる。

なんて命知らずな子なのだろう。

その時はそう思ったが、何度か観察していてわかった。

その最強の魔物が護りたがっているものが、その子供なんだと。だから力を持っている。その子に対しては、優しくほほ笑む姿も数回見れた。うらやましかった。あんなにも強い魔物の近くにいられるなんて、どういう対象なのかと。

時間がたつにつれて徐々にわかっていく。

あの魔物の子供なのだろうと。

しかし、ある日いつものように観察に出向くと、何があったのか魔物の死体がいつもよりも積み重なり、子供の泣き声が聞こえてきた。

何があったのかと近づいてみると、子供を腕に抱えた状態で、その最強と謳われた魔物が血だらけに傷ついていた。

誰の攻撃でとかではなく、積み重なった疲労と傷のせいだろう。魔物の足元には、数千匹の魔物がいる。こんなにもいつぱんに相手にしたのだろう。疲れて当たり前だし、全ての攻撃をかわすことなど難しい。いつかはこうなってしまう。そうはわかったとしても、悲しかった。

まだ息はあるみたいだが、治癒魔法を使用できるほど体力があるようには思えなかった。

飛び出して、助けてやりたい気持ちはいっぱいだったが、治癒魔法を使えない俺は、ただ見ていることしかできなかった。

じっと見ていると、子供がピタリと泣くのをやめた。

首にかかっていたネックレスを、そっと子供の首にまわしてやる。その時、身体が一切動かなかった。持っていたそのネックレス。

（ウソ…。人魚の涙…？）

遠目であまりよくは見えなかったが、人間の土地に入って宝石の書物を読んでいた際に、貴重なものとして記されていた写真に、“人魚の涙”と載っていた。

すごくきれいで、他とは見間違えないほど覚えていた。記憶力に自信はある。あれが、手に入るのは困難で、言い伝えのようになってしまった宝石。

強かった理由が分かった。それがすべてではないのだろうが、元

が強かったために、相当な魔力を所持できたのだろう。

そのネックレスから手を離すと、その魔物は息を引き取ったように見える。

子供も、必死に揺らしたりしてみるのが、起きる様子もない。

大きな声で泣き叫んでいる。仕方がない。護ってくれていた人が亡くなってしまったのだから。しかし、あの子の母はどうしているのだろうか。

今まで見たことがない。もしかしたら、もうすでに亡くなってしまったのかもしれない。あの子はどうするのだろう。

小さい子供が、両親を失くし単独で行動している姿はよく見かける。むしろ、それが魔物の中では普通の領域になってしまっている。いつ親が死ぬかわからない。いつ自分が死ぬかわからない。いちいち泣いてはられないだろう。でも、あの親子だけは、しばらく見ていたというのもあってか、涙が出てきてしまった。

「おい…」

「えっ？」

「泣いてる」

いきなりルーフオンが話しかけてきたと思えば、唐突な内容だった。

耳を澄ましてみても誰かが泣いている様子はない。鳥もいないのか、鳥の鳴き声も聞こえない。

「…誰が？」

そう聞くと、あきれたような顔で指差してきた。

「僕…？」

ソツと目元に指をかけてみると、いつの間にか思い出して泣いていたようで、涙が指に触れた。

まさか、他人の死で二度もなくとは思わなかった。しかも同じ魔物。あまりにもおかしくって、つい笑ってしまった。

「ははっ。また泣いちゃった」

「また？」

「うん。ちよつとね。思い出しちゃって」

「思いだした？ そいつとの出会いか？」

「そうだね…。シレーナは僕を助けた時が初めてのような事を言ったけど、本当は一方的に僕はシレーナのことを知ってたんだよ」

あの後、何度か様子を見に子供のところに足を運んでいた。

元気かどうかはわからないが、とにかく生きてはいた。

じつと座って、口を開くこともせず、どこか一点を見つめていたり、木の枝を折り続けていたり、暇そうな日常を過ごしていた。

父と遊ぶのが楽しかったのだろう。だからこそ、一人遊びは知らないし、友達もいない。友達になろうかと足を運ぼうと思ったことは何度かあった。でもどうやって話しかければいいかがわからなかった。

それからしばらくして、子供は成長はしていた。しかし、毎日毎日暇そうで。

目をかけられた魔物を潰す力を持っていたおかげで、自分の身を守ることに苦労はしていないようだった。暫くしてから“人魚の涙”の所持がばれてしまい、大勢の魔物に狙われた。しかし、いとも簡単に潰す姿を見て、恐ろしくなった。

遠巻きに見ていたシエイルに俺は気付いていたし、シエイルも俺に気付いていた。争いが収まりかけた時、シエイルはようやく動きを見せた。

こいつは強い。

わかっていた。子供が危険な目にあうんじゃないかと思ったが、手をかけることはなかった。

その時、その子供は魔王となった。

もう大丈夫なんだ。一人じゃないんだとわかり、それ以降その子供。魔王を見に行くことはなかった。だからこそ、魔王の声は覚えていたし、たくましくなった姿を数回見たとき、ホッとした。

まさか、こんな側にいられるとは思わなかったが。

「一方的に？」

「うん。一方的だったね。話しかけることはなかったし、その時シレーナは一人じゃなかった」

「その時？ 他にも仲間がいるんだろう？」

「それは全然後の話。俺と出会った後だからね」

シエイルに俺。ヴィンス、リベリオ。その他もろもろ。

大勢での行動があまり好きではないのだろう。

シエイルの希望で警備等に仕える者はいるが、魔王から特別会に行ったりなどはなかったみたいだ。

「強い人と一緒にいたんだよシレーナは」

「へえ。なに？ 魔物としてお前はシレーナを狙ってたのか？」

「ううん。観察。別に人間嫌いじゃないしね俺」

「そうか。その強い人今は？」

「死んじゃった…。強い人ってお父さんみたいなんだけど、大勢の魔物に襲撃にあってね。ひどいよね。子供を持った一人の大人に、魔物が大勢寄ってたかったんだよ？ ルーフォンとシレーナは似てるのかもね」

「俺のように誰かが助けたのか？」

「…ううん。助けたのはお父さん。何とか魔物を除去することはできたんだけど、重傷で…」

「助けてやらなかったのか？」

「多すぎた。それに、俺は魔物だろう？」

「そうか……」

「なのに数年後俺が助けられて。馬鹿みたいだね。あの時見殺しにしちゃったのに」

「……」

本当勝手だ。

いきなり俺の前に現れた魔物が、魔王の声をしているなんて。

冗談半分で、魔王でしょう？ と聞くとあっさり答えだし、その上城にまで招いてくれた。

眠っていなくても、魔王は無防備すぎる。

城でシエイルにもう一度会った時、魔王は気付いていなかったみたいだけど、珍しくシエイルが驚いている顔を見せていた。

覚えているとは思わなかった。

あのときしか視線は合わせてなかったし。

それに、助けてくれたというのは、魔王の嘘ではない。

魔王が話しかけてくれるまで、魔物から逃げていた身なのだ。

気に食わない魔物に情報を提供してほしいと言われ、大ウソをついたのがばれた時だった。殺されないように逃げ回り、ようやく落ち着いたというときに魔王と会った。助かったと、心の奥底で安堵した。

## 第11話

「どうしたんだよこれ」

精神をコピーに移すと、そこは魔王の間であることは間違えないのだが、俺の目の前に位置する壁が、相当破壊されていて、修復中のようだった。

あまりにも驚いてそう一言漏らすと、シェイルから大きなため息がこぼれた。

「向こうでは相当戦いを楽しんでいたようで…?」

「あ…。もしかして魔術使ってた?」

コピーに気が回らなくなると、一緒にコピーと魔術を使ってしまいかもしれないと言ったのは俺なのだが、すっかりそのこと自体忘れていた。

確かにドラゴンの時といい、街への移動中といい、相当戦っていたから忘れてしまったようだ。

「で? 魔物の様子はどうなんだ?」

「入口で魔物が争っています。この一室に入っては来ていませんが」

「行くぞ」

「は？」

「暴りたい」

椅子から降り、いつも羽織っていた、懐かしい黒のコートに手を伸ばした。

長い通路を歩いていると、リベリオが入口の方を見ながら壁に寄りかかっていた。

「こんなところでボーっとしてると食われるぞ」

「あ、魔王」

ようやく気付いたように、俺の方を振り向くと、にっこりとほほ笑んで近づいてくる。

戦いよりも料理に集中するリベリオが、争い時に調理場から出てきているなんて珍しかった。お疲れさまと、タイミング良く争いが終わるのを見計らっておやつを持ってくるため、籠っていたというのに。

「おやつは作らないのか？」

「何を作ろうかなと悩みながら。それに、珍しく魔物の量が多いので、お手伝いしようか迷っていたところです」

「そうか。料理人の腕を疲れさせるほど馬鹿じゃねえよ。ちよつくら暴れてくるから、おやつよろしく」

「はい」

いつものように、にっこりとほほ笑んで、いつもの調理場へと楽しそうに足を進めていた。

料理にしか興味のないリベリオが、争いに気を取られていることなんか珍しかった。だからこそ、深く理由を聞こうと思ったが、あ

あもすぐに調理場に向かうなんて思わなかった。渋ったら、一緒に連れて行こうと思ったのだが、その必要もなさそうだ。タイミングを計っていたのか、向かっていた先からヴィンスが現れる。

争いが終わったのだろうか。

庭が荒らされるのを嫌がるヴィンスは、魔物が近付いてくると、今回のようにシェイルが俺に連絡が入る。そして、積極的に争いに混ざっているのだが。

「魔王様。お戻りですか」

「おう。様子はどうだ」

「それが、魔王を倒す。とかではなく、単に争いたい魔物たちのように」

「はあ？ 何それ。つまんねえ」

「つまらなくはないですよ。争いたいのであればお相手してあげますよ。魔王が目的じゃなくてよかったです」

右後ろにいたシェイルが、冷たくほほ笑みそう言った。

魔王が目的の魔物はそれなりにいるが、今回のように、ただ単に争いたくて、魔王の城に集まる輩もいる。

シェイルの手により強く育てられた魔物は、戦うのにはちょうどいい強さなのだろう。

「シェイルを相手にした魔物がかわいそうで涙が出てくる」

「魔王…。それは笑って言う言葉じゃありませんよ」

ヴィンスとシェイルを左右に連れた状態で、争いが始まっている門のほうへと足を進めた。

そう簡単に壊れるような素材を使っていないはずなのに、門は崩壊し、大勢の魔物が押し寄せていた。

城のほうに結界を張り、低級魔物はいれないように警備の魔物がしているが、中級魔物は軽々と中へ入ってきている。

待ち構えていた警備の者が相手をしているが、そう簡単に潰れる魔物でもなかった。

大きな扉が開かれ、シェイルとヴィンスが姿を現すと、城の魔物は肩をびくつかせ、襲いかかってくる魔物から距離を置いた。

すぐに片付けなかったことに、後で叱られるのだろうと想像してしまったみたいだ。すぐに始末しなかったとき、シェイルは相当怒る。死体が出ることはないが、それなりに罰を下すからかわいそうでならない。

こっそりヴィンスに頼んで治癒させているが、そのこともシェイルはお見通しだ。

「おお。いいねえ。やりがいがありそうだ」

そう大声で笑ってやり、警備の者を魔物から引かせる。

「ヴィンス。怪我した者の手当てを。シェイルは警備の者をまとめ  
ておいて」

「はい」

「魔王。私に戦わせないおつもりで？」

ヴィンスは言うことを聞くように、すぐに重傷を負った者から治癒を始めているが、シェイルは戦わせないことに少しだけ意見があるようだ。

しかし、俺が暴れると、そこらへんに警備がいては巻き込んでしまっただけと言うのに、たまには暴れさせてくれる気がないのだから。

「シェイル。あまり俺に命令しすぎると、お前も一緒に殺すぞ…？」

最近まともに暴れていないことからイライラしていた俺は、目だけでシェイルを睨みつける。

別に、シェイルを殺そうと思えば殺せると思う。シェイルに任せているのは俺のコピーであって、本体ではない。そのため、本体に精神を取られている隙に殺されようが、別にかまいはしないし、この状況で俺に傷をつけたところでただのコピーだ。シェイルはそれを忘れてはいないはずだろう。

睨みつける時間は長くはなかった。

すぐにしゃがみ、服従を示すように頭を下げた。

「すぐに警備の者を引かせます」

動く前に視線を敵に回し、どれくらいの数かを目だけで数える。

数匹と連絡は入っていたが、そんなかわいいものではない。四百はいるだろう。

攻撃の手は止めているが、しっかりと魔王である俺を睨み、いつでも戦える準備をしているみたいだ。

（この殺気…気持ちが良い）

ルーフオンの近くでは、こんなに殺気があるかと魔力を使うことができない。しかし、魔王としてこの場に立っている今、我慢していた魔力を開放し放題だ。

手始めに、右手と左手の人差指と中指の先に魔力を溜め、ボーリングの球を投げるように、下から“無”の魔法弾を、前衛にいる魔物の足を狙って数弾投げ込む。

それがスタートの合図となったかのように、動けなくなった魔物

の後ろから、数十匹の魔物が俺を目掛けて向かってくる。その後ろからは、炎の魔法弾を撃ち込んでくるが、しゃがみ、向かってくる魔物の後ろ付近に水壁を作り、炎弾を防ぐ。えんだん

向かってきていた魔物は、しゃがんでいる俺に遠慮なく切り込むが、身軽さで器用に避け、隙について魔法で爪を伸ばし、避けたついでに首や腹部を切り込んだ。

血が飛び、上着や髪に浴びてしまう。

なつかしかった。

飛ぶ首、飛ぶ上体、飛ぶ血飛沫。

負けじとやってくる魔物や魔法を、意図も簡単にひねりつぶし、得意の水魔法や無魔法を使い続ける。

城の魔物は、ただ見守ることしかできない。

下手に加勢に入ると、巻き込まれ、死を迎えるしかないだろう。

まだまだ奥に控えていた魔物たちは、舞うように身を動かす魔王に切り込まれた、血の塊にしか見えなくなってきた味方の魔物を見ると、刃向かおうとする気すら失せてきたのか、逃げ帰る者が数匹いた。

別にかまわない。逃げたければ逃げればいい。

自分の命を扱うのは勝手だ。

刃向かってきた奴を潰せればそれでいい。自業自得だ。

敵意を向けない奴を殺す気など更々ないから。

逃げ帰る魔物も少しずつ増えるが、飽きずに向かってくる魔物も、何処からかわいて出てくる。

「まだやるのか…一掃してやるよ！」

腕を振り、近くにいた魔物を振り飛ばし、動かない隙に“無”の魔法弾を作るため、両手を真上に上げ、大きく黒い魔法弾を作り

出す。その間に、数匹の魔物が向かって来たが、一軒家が二軒入るくらいの大きさの魔法弾は、すぐに作ることが出来た。

魔物が俺に触れる前に、その魔法弾を目の前に放りだした。

「なんだ…？」

俺とルーフォンは、大きな地響きと、何か大きなものが崩れるような大きな音に反応し、聞こえてきた方へと顔を向けた。  
その方向は。

「魔物の土地…？」

「…魔物が暴れでもしたのか？ でも今の地響きって…」

方角のせいもあって、つい目を見開いてしまう。

魔物が暴れているのだらうと、ため息をついたルーフォンも、さすがに驚いている様子の俺に気づいたみたいだ。

ゆっくりとルーフォンのほうを見ると、どうしたと言わんばかりの顔だ。

「あの方角…」

「なんだ？ 何かがあるのか？」

「あの方角と位置的に…」

「だからなんだ」

「魔王の城…」

「あの位置が…？」

魔王に何かがあつたのだろうか。

実際コピーなど作れない俺は、精神が入ったコピーが死んでしまつたら、その精神がどうなるのかとか。怪我をしたらどうなるのかとか。本当はどうなるのかとか。そういう事情を知らない。

もし魔王に何かがあつたのなら、駆けつけなければいけないはずなのだが、魔王の本体が今足元にある限り、下手に動くわけにはいかない。

別に魔王に何かがあつたわけではないのかもしれない。魔王が、大暴れして大きな魔法を使っただけかもしれない。でも、暴れるほど怒らせるようなことがあつたのだろうか。

相当怒らせない限り、大きな魔法は使わないはずだ。もしかしたら、魔法が使えない状態が続いていたせいで、魔力をコントロールできていないのかもしれない。

いろいろ考えても、やはり答えは見つからなかった。

（ヴィンス！ 魔王は！？）

（アマシユリか？ 無事だよ。今のは魔王の攻撃だ。争いの前にシエイルが少し怒らせたから、余計にイライラしてるんだろう）

（シエイルが…？ 魔王が無事ならいいんだ…）

（何かあつたらすぐ連絡を入れる）

（お願い）



## 第12話

大きな音と響き渡った地響きにより、砂煙が舞い上がった。

そのせいで見えなくなった現状に、城の魔物たちに緊張が走った。魔王の心配ではない。どのくらいの魔物が死して、どのくらいの魔物が生き残ったのか。そして、魔王の自我は健在か。

極稀にだが、自らの魔力に耐えきれず、暴れた拍子で魔力に乗っ取られ、自我を失って暴れ続ける魔物がいる。魔力が強ければ強いほど、起きる現象だ。他には、宝石に乗っ取られるケースもある。自分の魔力では抑えられない宝石を使用し、自ら命を絶ったり、宝石の魔力に乗っ取られたり。

どうして城の魔物がそんな心配をするのかは、王が“人魚の涙”を所持しているからだろう。

コントロール不能になった人魚の涙を抑えられるほど強い魔物は、ヴィンスやシェイル、リベリオしか止められそうな魔物はいないだろう。しかし、この3匹でも、止められるかどうかの確証はない。

砂煙の中に、1匹の影。

魔王だ。

呆然と立ち尽くすように、両手を下げ、ただまっすぐに立っている。

乗っ取られたか否か。

近くにいたシェイルを見ても、それを恐れるように砂煙の奥を見つめていた。

治癒魔法をやめ、魔王のほうに目を戻す。

「ゲホッ……」

魔王が咳込む声が聞こえた。

数回咳込み、左手が上がリ、空気を流すように振り払った。その流れに従うように、砂煙は徐々に消え去っていく。ゆっくりと足が動き、徐々にこちらへ進んでくる。

「ゲフォゲフォ……す、砂っ……」

乗っ取られるようなことにはならなかったみたいで、城の魔物全員が安堵の息を漏らした。

シェイルも、肩に力が抜け、ため息のようなものを吐き出していた。

生きていた。とか、乗っ取られていなかった。とかの安心ではないのだろう。自分も死せずよかったと安心していいのだ。

よく喧嘩をしているのは見かけるが、あのように魔王がシェイルを睨みつけることがなかった。もともと、シェイルが魔王の傍にいたがっていると言うのもあり、最終的にはシェイルが身を引いていた。だから大きな喧嘩にはならなかったのだろうが、今回はさすがにシェイルも身の危険を感じたのだろう。

砂煙が舞った元を見ると、そこには作り上げていたあの大きな円の中に消えたかのように、地面が丸く削り取られていた。そこにいたはずの魔物の姿もなく、円に入りきらなかった魔物の上体のみや、下半身のみの死体が端々に転がっていた。

そこにあつたものが消滅したのだろう。

恐ろしき威力。

このような状況を見てしまうと、俺やシェイルはともかく、警備の魔物や低級魔物は逃げ腰となってしまう。

（俺も魔王を怒らすのだけはやめておこう）

するつもりではないが、たまに魔王らしくない面に甘えてしま  
いそうになるからこそ、余計に。

今のところは、まだ庭師とさせていたでいるものの、周りか  
らは治癒専門にといわれる。しかし、魔王はしたいことをすればい  
い。というスタンスだ。だからこそ、庭をいじらせてはいもらって  
いるが、魔王が医師専門とさせるのならば、文句を言わず従おう。  
そう今誓う。

「グインスー…目がチカチカする…。目が痛い…」  
「砂埃のせいでしょう。診せてください」

近づいてきた魔王に向かい、立ち止まると、言われた通り目をつ  
むって顎を上げて上を向く。

ゆっくりと目を開くと、砂が目に入ったのか、涙がちらりと見え  
る。

「少し我慢しててくださいね」

殺傷能力ゼロの水を手の平に魔力で集めると、魔王の目の前に合  
わせ、ゆっくりと水の中に目の部分を埋めていく。

「ゆっくりと瞬きしてください」

「うー……。俺もう下が砂の場所で今のしない…」

「アスファルトならやるのですか？」

「うん…するからね」

「でもその下は結局砂なので同じ事になると思いますが…」

「じゃあ地面に向かってやらない」

「もしくは至近距離でやらなければいいのでは？」

「あ！ それいい！ そうする」

今の会話で、あまり深く考えずに魔法を出したのが丸わかりだ。まあ、後先考えずに戦うのはいつものことなのだが、なんとなくあの魔法弾を作っている最中に、こうなるだろうなとは、薄々感じていた。

そつと水を目から離してやり、空気に触れさせる。

「まだジャリジャリしますか？」

「んー…。ちよつと」

まだ砂が残っているのだろう。

新しく水を作り、再度目に触れる。同じことを数回繰り返すと、次は口の中にも入ってて気持ち悪いと言いだし、同じく口の中も洗った。

それと同時に、顔に付着した敵の血を洗ってやり、綺麗な顔に戻して見せる。

「ヴィンス髪も…」

「いいですけど、服の下も砂でジャリジャリしてませんか？ お風呂に入った方が早いかと」

「そーする。っていうか、もうそろそろ戻らなきゃ。ヴィンスやっておいて？」

「はい。仰せのままに」

といつても、身の回りのことは俺の仕事じゃないんだけど。

だいたいそういうわがままは、いつもシェイルに言っていたから、今回もそうなのだろうと思ったのに、名指しで俺に命令してきた。その珍しさに、ゆっくりとシェイルを見るが、悔しそうに腕を組ん

で立っていた。

先ほど王を怒らせたから、自分がやりますと口を開けないのだろう。

どうしてかまでは分からないが、シェイルに異常なまで仕えようとする。しかし、他に命令してしまったのであれば、やるにやれないのだろう。

「そういえば、ヴィンス」

魔王の間への通路で、黙っていた魔王が口を開いた。

「はい？」

「ルーフォンという男を知っているか」

「ルーフォン…存じております」

「どこであつた？」

「襲われていた人間の名です。地名までは覚えておりませんが、はずれの孤児に連れて行き、暫くは様子を見に通ったことはあります」

「前に話してくれた少年か？」

「はい」

唐突な話ではあるが、何か理由があるのだろう。

確かに、昔人間の子供を助けたことがある。それを魔王にお話したことはある。しかし、どうして子供の名まで覚えていたのだろうか。話した本人ですら、名前を忘れかけていたというのに。

「今そいつ俺と行動している」

「そうですか」

「感謝してたよ」

「魔物だと知らないからだ」と

「あ、すまない。ついポロリとヴィンスが魔物だって言ってしまっ

た」

「構いません」

あの子供が、魔王と。

ということとは、魔王討伐隊に参加しているということか。

でも、魔物だと知れば、感謝の気持ちなど現れない者だと思ったが、魔物だと承知で感謝していたということか。どういふ子供に成長したのか見てみたい。

人間であることは間違いないから、もう年齢的には子供ではないのだろう。

「変だよな。アマシユリやヴィンスが魔物だと知ってても、アマシユリを最初は警戒していたが、ひどく言わなかったり、ヴィンスに感謝の気持ちは変わらないって言ったりするんだぜ？ 魔物嫌いだって本人言ってるのに」

「たくましく育っておりましたか？」

「たくましいのかな？ でも頼りがいはあるかも。相当強いぜ。魔術も素晴らしいさ。外見少しシエイル似で、シエイルから離れたたつていうのに離れた気がしねえ。剣術もいい方だと思う。シエイルと一度戦っているところを見てみたい」

「魔王様。それはシエイルの一方的な惨殺になってしまふのでは？」

「まあ、シエイルが勝つのは目に見えているが、戦いがいはあると思うぜ。俺もついつい魔術のフリして魔法つかっちゃった」

なんて笑う。先ほどのシエイルへの苛立ちは収まっているようだ。シエイルもそれに気付いたのか、ホッとした様子を見せていた。

「魔王様が魔物だということとは？」

「ばれてねえと思うよ」

「それはよかったです」

「でも、いつかはバラしてもいいかなって思ってる。本当に魔王を殺したいようだったら、相手にしてやってもいいと思う。ヴィンスが助けたやつだし、殺したくはねえけど、あいつの気が晴れるなら戦いくらいはな」

「そんなっ…。もし手を出してくるようでしたら…」

「もちろん手を出してくるようだったらな。でも思っただ。俺を殺しても、魔物が全滅するわけじゃないだろ？ だから、魔王を殺すとかじゃなくて、共存。もしくは、一切お互いに干渉し合わず、壁を作っちゃった方がいいと思っただ」

「壁。ですか」

「そう。たぶん、共存は、魔物はいいかも知れんが抵抗する人間が多いと思っただ。だって、どう考えても人間が不利すぎる。それにもし俺を殺して魔王の座があいたとしたら、他の魔物が魔王となるだろう？ それをつづけたって意味がない。それに、俺の前にはシエイルがいるし。シエイルを相手にした後には魔王の俺の相手をする元気があるかどうかだろう？ それに、もし暗殺が何かでシエイルと争わずに殺せたとしても、魔物の候補的に言わせてみれば、次魔王の座はシエイルになるだろう？ つまり、俺より手ごわい魔王になるぞってこと」

「そんなことありません！ 暗殺なんてさせませんし、魔王は魔王様の座です。私なんかよりもお強いでしょうに」

「じゃあしいわ！ あんな殺し方するような奴に言われたかないわ…。そう思っただろ？ ヴィンス。あんな残酷な殺し方をする奴はそうおらん」

「はい」

「ヴィンス！」

そのあと、精神は魔王本体の元へ戻り、シエイルに人払いをさせ、その間に魔王の体を綺麗にしてやった。

その時ふと思ったのだが、今の姿はコピー。コピーにも飾り程度の“人魚の涙”を着用しているものだと思ったが、コピーの魔王にそれはなかった。さすがに、“人魚の涙”を複製することまではできなかったのだろう。

今までの力はその宝石によって増幅されたものだろうと思っていたが、着用していないというのに先ほどの威力。

（何と恐ろしいお方…）

一生敵には回りたくない存在だ。

### 第13話

「んー…」

「あ、シレーナ起きた？」

「さっきの地響きで起きないお前もどうかと思うが…」

「んあ？」

何のこと？　と言わんばかりに、俺は目をこすりながら起き上る。  
先ほどの砂にまみれたような気持ち悪さが無い。

案外別の体で戦うのも悪くないなと思いながら、ずっと横になっ  
ていた体を伸ばす。

「あーよく寝た（つか、寧ろ疲れたけど）」

「さて。次進むか」

木に寄りかかっていたルーフオンは、木から離れて歩き出した。  
それについて行くように、後ろからアマシユリとともに歩き出す。

（先ほどの何があったんですか？）

（いや、パアツと潰したくてちょこっただけ大きな魔法を使っただ  
けだよ）

（ではお怪我はないのですね？）

（まあね。あ、あとヴィンスが魔物だって伝えちゃったって伝えて  
おいた）

（はい）

暫く歩いていると、またもや魔物に囲まれた。

しかし普通の魔物ではない。何やら、逃げてきたかのような息の切らせ方だった。しかも、魔物の領域のほうから現れたようだ。

街に近づいてきているのか、うつすら街のほうから人間の気配が一人二人くらいの気配がする。

「街付近はいいなあ。少人数の人間がよく引つかかる」

ということは、大人数の人間がいる場所にはあまり寄りつかないタイプの魔物だ。低級魔物というのはわかったが、なんだかどこかで見たような顔だった。

数は20匹。少々大目かもしれない。

「さっきは暴れなかったからなあ。ようやく思いきって暴れられる」

数匹笑いながらそう言っているが、どこかで争いがあつたのだろうか。その時に、人間の手により追ひ払われた口だろうか。

しかし、さっき暴れたと言えば、魔王のほうに戻った時、数匹逃げていたような。

（そんでこんな顔してるやつもいたかも…）

（魔王様？）

（あ、ごめんテレパシーしてた？）

考えることに夢中になりすぎていたのか、ついアマシユリにテレパシーを送っていたみたいだった。

先ほどの争い時に、数匹逃げてしまった魔物がいて、その時の魔

物の顔にそっくりだという話を見ると、じゃああまりの恐ろしさに逃げてきたはいいけど、足が止まらなくてここまで飛んできたんじゃないですか？ という話になった。

飛んでくるのであれば、このくらいの魔物であればこのくらいの時間帯に現れても仕方がない。

戦いが終わってから、それなりに時間は過ぎている。

挑発するかのよう、魔物のリーダー格に向かって口を開いた。

「なに？ 人間に追い払われでもしたのか？」

「ちつげえよ。人間如きに追い払われるかよ！」

「じゃあ何か？ 魔物に追い払われたのか？ 魔物が？ そして弱い人間に手を下そうって？ ひつどおい」

馬鹿にするように、魔物に向かってそう笑ってやると、アマシュリのほうを見ていた魔物が、何かに気づいたように、俺の言葉を無視して口を開き始めた。

「…貴様！ 魔王の城に仕える情報魔！」

『え…？』

アマシュリのことを知っていたのだろう。

しかし、情報魔というのは知っていてもおかしくはないと思う。しかし、魔王に仕えるものということまで知っている奴は、そう多くはない。

城の警備か、城の中のもの。ただし、情報魔はアマシュリ以外にもいる。もしかしたら何処からか情報が漏れ、その情報を別の情報魔によって流されたのだろう。

あまりにも唐突で、つい二人で首をかしげてしまった。

「誤魔化されないぞ！ 緑色の髪で、子供の容姿。魔王の城に入っ

ていくのをよく見てる。しかも、情報魔だということも調べ上げた。まさかこんな所であえるとはな…さっきの復讐ができそうだ。しかも弱いときたらとくに」

いいことを思いついたと言わんばかりに、ニヤリと口元を上げ、手を伸ばして近づいてくる。

つつい背にアマシユリを移動させ、その魔物の手に近寄らせないようにしてしまう。

アマシユリが魔物だということは知っているルーフォンでも、魔王の城に入り浸っているとすれば、話が変わってきてしまうかもしれない。チラリと様子を見てみると、何を考えているのか分からないような表情をしている。

ルーフォンに戦わせるか、アマシユリをルーフォンに任せて俺が戦うか。しかし、無事に護ってくれるかが分からない。

魔王を倒したいという気持ちがあるルーフォンにとっては、魔王の城に入ることが許されているアマシユリも、魔王と縁があるということだ。手を出さないと言い切れない。

「少人数の人間に寄って集ってこの人数とは、さすが魔物。ひどすぎやしないだろうか？」

聞き覚えのない声に、魔物も俺たちも、声の主を探してしまう。

あたりを見回してみると、街のほうの木の陰から、白いローブを着ている男の人が現れた。年齢は、ルーフォンくらいだろうか。黒に近い茶髪で、黒い瞳。手には手の平サイズの宝石が先についた口ツドを持っている。

（魔王！ 魔導師です）

（魔導師…って？）

（魔術を専門に使用する者です）

（強いのか？）

（剣術等では弱いですが、その辺の魔術を使う人間よりは手ごわい  
です。ロッドを利用して、小さな魔術でも強い威力を発揮するこ  
とができます）

（つまり面倒な人間ってことか？）

（はい）

アマシユリが情報をたくさん持っていてよかった。

面倒な人間っぽい雰囲気はあったが、能力の面でも面倒な奴だと  
は思わなかった。

しかし、今は少しかだけ味方してくれそうな雰囲気だ。

「ひどい？ ひどくないことをしても、人間は魔物を悪者扱いする  
んだろ？ だったら、非道なことを行っても当たり前だろうが！  
」  
「知ってるか？ そういうのを“開き直り”っていうんだぜ？」

またもや挑発するように、ベーっと舌を出して、子供のように喧  
嘩を売る。

「お主たちも襲われたくないのであったら、そう喧嘩腰になるもの  
ではないぞ」

（見た目に似合わず爺さんじみたしゃべり方だな…こいつ嫌い）

魔導師の言葉に、何かの闘争心が芽生えてきた。

魔物を殺す前に魔導師を殺してやろうかという気持ちになったが、  
今ここで暴れてしまうのはまずい。今ばれるには面倒な敵だ。

「まあいい。どうせ4体しかないんだ。すぐに殺してやるよ」

戦闘態勢に入った魔物たちは、魔導師を狙うもの、俺らを狙うもので二分割した。

武器を使用してくるものはルーフォンが相手をし、直接攻撃してくるものは、俺やアマシユリが相手にする。魔導師がいると言うことで、あまり大きく暴れないアマシユリは、必死に敵の攻撃をあまり俺やルーフォンから離れないように、ちょこまか避け続ける。

魔導師のほうは、結界やら魔術やらを細かく利用しているみたいで、加勢の必要はなさそうだ。

数匹動けなくさせると、身体に何かが反応した。

肌に細い糸のような物が撒きつき、ピリツと電流が走っているような何かが。それに気付いた瞬間、周りの魔物とアマシユリは、縄で縛りあげられたかのように、脇と両足を合わせ、倒れこむ。

抵抗するように、身体の周りに魔力を流し、その糸らしき拘束から逃れる。

少しだけ、アマシユリが使う拘束魔法に似ていた。

「ふう。小賢しい魔物は縛り上げると静かじゃ。しかし、お主も縛られたということは、魔物か？　なぜ人間と行動を？」

「アマシユリに何したんだ？」

魔導師が不思議そうにアマシユリのほうを見ているところ、ルーフォンがアマシユリに近づき、そっと触れてみる。

俺も近づき、糸か何かがあるのかを、アマシユリの体で調べてみる。

これも魔術なのだろう。

「そのガキではない。ここ付近にいる魔物に、動けなくなるように拘束魔術を使っただけだぞ。まさかその者まで魔物だとはな」

だからか。

すぐに気付いて解いたのは正解だったみたいだ。

たぶん、この魔物たちみたいに縛り上げられるほど、弱くはないが、あの電流は少しだけ危険性があつた。タイミングが悪ければ、魔導師に俺も魔物だと気付かれたらろう。

「アマシユリ…平気か？」

「う…ん？ いたい…痛いよ！」

そつと縛られているところに触れると、小さく電流が走る。

「痛いだろうな。電流で神経を狂わせてる。低級魔物には一番よく効く。便利じゃ」

「アマシユリは敵じゃない！ 離してやつてもらえないか？」

「離してしまうと他の魔物も逃がしてしまうが？」

「一体だけ解くことはできないのか！？」

「そこまで器用じゃない」

降参というように、両手をあげて見せる。

殺してしまおうかと思つたが、今はアマシユリを助けることに集中しなければならぬ。俺と同じように魔力で切れればいいのだが。

「アマシユリ…。いいか、魔力を身にまとうのをイメージして…」

「う…無理…だよ、俺そんなに、魔力ないって……」

（大丈夫。イメージだけしておいて。俺の魔力できるから、自分で切ってるふりだけでも）

「無理じゃぞ。そう簡単に切れるものではない」

無理をするなどいわんばかりに、魔導師は怒鳴りつける。

一切その言葉を気にすることなく、アマシユリの背中をなでてやる。電流が走り、すごく痛いのが、人間には効かないみたいで、ルーフォンが触れていても何も気にしてはいないようだった。

そっと触れている手に魔力を集め、一本一本切るように魔力を注ぐ。

唸るアマシユリも、自分の魔力でどうにかしようと頑張っているようだった。

「大丈夫…。アマシユリ…」

何度か背をなでてやり、アマシユリの体に傷を作らないように、そっと呪縛から解いてやった。

ようやくまともに息ができるようで、自由となった身体を動かしながら、荒い息をゆっくり落ち着かせてやる。

「何と…」

今まで解けたやつを見たことがなかったのだろう。  
驚いたように、一步魔導師の足が引いた。

「さあ行こうか。ルー。アマシユリをおぶれるか？」

「ああ」

しゃがんだルーフォンの背にアマシユリを乗せてやり、しっかりと首に腕を回させる。

持ち上げたルーフォンとともに、次の街を目指して足を進める。

「ちよつとまで、魔物と行動するつもりか？」

その言葉に、俺の脚が止まる。

ルーフオンも、ゆっくりと足をとめ、魔導師のほうを振り向いた。

「別に、お前が魔物と行動するわけじゃない。俺がアマシユリと行動したいんだ。俺は差別なんかしない。差別するのは、いいやつか悪いやつかだけだ。今のお前は俺にとって、“悪いやつ”だ」

それだけを伝えると、再度街に向かって足を進めた。  
街までもう少しだ。

「街に着いたら、宿を先に探そう」

「ああ」

## 第14話

「シレーナ。ごめんなさい…俺が弱いせいで…」

「何言ってるんだよ。アマシユリは悪くねえだろ？」

「でも…」

「いいから気にしないの。宿でゆっくり休んでなよ。俺はちょっと街見てくる。ルー、アマシユリを頼んだよ」

宿をすぐに見つけ、一室を借りてアマシユリをベッドに横にさせた。

アマシユリは謝り続けるのだが、実際アマシユリは悪くない。魔導師に手を出そうとしたわけでもないし、暴言を吐いたわけでもない。ただ敵から避けていただけ。なのに、勝手に発動した魔術にかかってしまい、被害を被ってしまったているのだから、あの魔導師が悪い。

いや、あの魔導師も良かれと思ってやっているのだが、謝ることをしなかった。本当は、あの魔導師が謝るのが普通だろうに。

街の様子を見てみようと、アマシユリを一人にするわけにはいかず、ルーフォンについてもらおうとする。

「駄目ですシレーナ。シレーナに何かあったらどうするんですか！」

出て行くこうとする俺に、アマシユリは必死に呼びとめる。

「じゃあ、アマシユリに何かあったらどうするんだよ」

「あ…でもそれは…」

「はあ。じゃあこうすればいい。とりあえず今日は宿でお前も休め。そして、明日三人で街を徘徊。それでいいだろう？ 今日急いで何かをしないといけないうけでもないだろう？」

「…わかったそうしよう」

ルーフオンの提案に、俺は踵を返してアマシユリのもとに近寄った。

なんだか負けたような気がするのは何故だろうか。

実際、落ち着いてみると、アマシユリとルーフオンを二人にしてみるのは危ないかもしれない。アマシユリはテレパシーで俺を呼べはするが、すぐに駆け付けられるかどうかはわからない。ルーフオンがアマシユリを狙わないとは限らない。まだそこまで安心できる存在でもない。

それを考えると、今日は三人一緒にいたほうが安全だ。

ルーフオンの提案ということが癪に障るが、安全第一で進んだ方が身のためもあるだろう。

術は解けても、辛そうなアマシユリの柔らかい緑髪を、そつと優しく撫で続けた。

「ヴィンスを呼ぼうか…」

「し、シレーナ？」

「ヴィンスの居場所が分かるのか！？」

ヴィンスの名を出した瞬間、言っていることなのかとアマシユリが反応し、居場所が気になるルーフオンが反応した。

治癒もできるし、恩師には会えるし、一石二鳥だと思ったのだが、やはり魔物を堂々と人間の地に呼ぶのはいけないのだろうか。

「わかるよ。だっていつでも、アマシユリが呼んでくれればだけど」

「呼ぶ？」

「俺も詳しくは知らないけど、魔物は魔物同士であれば、遠くにいても連絡が取れるんだってさ」

「テレパシーってやつか？」

「みたいだよ。便利だよな」

愛用してますが。

一応人間はできないはずというのを前提で、テレパシーの事を言うが、アマシユリはそんなにうまくはないと口にする。

（ヴィンスー）

（はい）

（ヴィンス、ルーフォンに会いたくないか？）

（会いたくないわけではないですが…）

（ちょっとさ、アマシユリを治癒してほしいっていうのもあって、もしヴィンスがルーフォンに会いたいなら、丁度良いんじゃないかなって）

（アマシユリが。わかりました）

（あ、人間の土地だし…来たくないならいいけど）

（…いえ。そういうわけではありません。以前の子供の姿でそちらに向かいます）

ヴィンスと連絡を取り、魔物姿は知る者ぞ知る状態になっているため、以前ルーフォンと会った時のような子供の姿になるのだろう。ヴィンスの子供の姿という想像はつかなく、ちょっと。いや、結構楽しみだった。

アマシユリにも、テレパシーでヴィンスを呼んだことを伝え、アマシユリが呼んだことにしておいてと口裏は合わせておいた。そのいきなりな事に、アマシユリがぶつくさ文句をテレパシーで伝えてきたが、はいはいとにつこり笑顔で流してやる。

いつものことだもんなと、諦めているようにため息をついたとき、  
少しだけ嬉しくなった。

アマシユリがこうやって臥せている様子を見ていられるなんて、  
貴重かもしれない。

少しづらかったとしても、強気で立っていそうな気がしていたから。

但し、あの魔導師。味方につければ便利かもしれない。ただ、あの術をそう何度も使われると、アマシユリがづらい。何か対策を考えておかなければ、敵だろうと味方だろうと面倒なことになる。

それに、あの魔術を使えるのが、あの魔導師だけというわけでもないのだろう。

暫く考えていると、部屋のドアにノックが鳴った。

誰かと、ルーフォンが戸に近づき、覗き窓を使った。すると、大事な人でもいたのか、いきなり戸を開いた。

何事かと、アマシユリと俺はお客のほうを見る。そこには、紙袋を持った、黒髪の少年が驚いたような顔でこちらを見ていた。

「ヴィンス…」

そうルーフォンが口にして、ようやくその姿がルーフォンと対面していた、子供のヴィンスだ。

あまりにも可愛くて、ついてプツと吹き出してしまう。

普段は、キリッとした瞳の身長の高い男だと言うのに、八歳くらいの子供になってしまっているのだ。

「大きくなったなルーフォン。昔は身長が変わらなかったのに」

ルーフォンは、ヴィンスを中に入れ、戸をしっかりと閉める。

上着を脱ぎ、適当に椅子に引っ掛けては、俺の隣に立ってアマシ

ユリの様子を見ていた。

（あ、そういえば俺、シレーナね）

「ヴィンスは治癒魔法が得意なんだ。だから呼んだ」

「そうか…」

再開の挨拶もまともにできていないというのに、来て早々アマシユリの診断に入ってしまうヴィンスに、少しだけルーフォンは寂しさを感じているようだった。

席を交代し、出来るだけアマシユリに近い場所にしてやる。

胸元に手を乗せ、ゆっくりと魔法でアマシユリの体を見ていく。

それと同時に、内部から魔法で治癒を行っていく。外から見ている分には、ただ胸元に手を置いているようにしか見えないというのに、あれで結構な治癒を行ってくれる。信頼しているのだ。

暇になってしまった俺は、ヴィンスの上着をハンガーにかけ、そつとクローゼットにしまつてやる。

「あ、すみませんシレーナ様」

「いいよ。っていうか様つけるなよ」

いつも“魔王様”と呼んでいるからこそ、魔王と呼べない分シレーナでも様をつけてしまうのだろう。

また敬語だと言わんばかりに、ルーフォンは不思議そうな顔で俺を見る。

一体二人にとってどんな存在なんだ。そう考えているのだろう。

「どう？ アマシユリ」

「うん…。すごい楽になったよ…。ごめんヴィンス。走らせちゃっただろう？」

「いえ。思ったより遠くなかったのだから」  
「そうか。ありがとう。ところでヴィンス、可愛くなったな」

必死に笑いをこらえているのが分かってしまったのだろう、ため息をつきたいような顔でじっと俺を見ている。

わかつている。ヴィンスの大人バージョンは、いろんな魔物に姿がばれていて可能性がある。それに、もしかしたら人間も知っている可能性があるからこそ、その姿だって言うのは聞いている。でも、あの身長が高くて、かっこいい男が、肩付近まであるちょっと長めの黒髪で、垂れ目がちな丸い目。

似ても似つかない。

確かに、身長と特徴を変えてしまったほうが、ばれないというのはわかつている。ヴィンスは名前自体は知れ渡っていないため、人間の土地でもヴィンスと呼んでも良いみたいだ。

「そういえば、前に女の子と間違えられました」  
「ええっそれはちょっと無理があるんじゃない」

そう言いながら、アマシユリと俺は笑っていた。  
上着をかけていた椅子の足元に、紙袋がある。確かヴィンスが持ってきていたのだが、これは何かと袋の中をちらつとのぞいてみる。

「あっ」

「そういえば、渡されました。是非シレーナ様につて」

「やったあゝあいつのケーキ!？」

「はい」

「らっきー」

紙袋から箱ケースを取り出し、それをテーブルの上に置く。  
皿まではないのが気に食わないが、そこは仕方がない。

リベリオのケーキだ。

おやつを作っておいてくれと言ったきり、食べずにこちらに帰ってきてしまったから、相当拗ねただろう。だから、丁度ヴィンスが出ると言ったことで、渡したのだろう。きっと無理やりだ。想像がつく。

リベリオのすることだから、大きいホールかなと思ったが、ショートケーキだった。

中にはモンブランもある。モンブランが好きな俺は、他のケーキよりも先にモンブランを箱から取り出す。

「ほらっルーも選べって」

「甘ったるいのあんまり好きじゃないんだが…」

「まじうまいんだって」

渋い顔をしながらも、ゆっくりと箱の中をのぞいてみた。

何が良いかと暫く覗いていたが、ようやく箱の中に手を入れ、取り出したのが、無難なイチゴショートケーキ。あまり食べ物を冒険しないタイプだと、一瞬でわかった。

「ヴィンス、アマシユリのほうはどう？」

「術が少しかかっていたので、それを外しただけです。他は問題なさそうですが、暫くは横になっていたほうが良いと思います」

「んー。じゃあ、明日はルーと街を歩いてくるよ。さっきの魔導師と顔合わせしたら、アマシユリが気まずいだろうし、ヴィンス明日何か用事あるのか？」

「いいえ。ありませんが」

「じゃあ、アマシユリとお留守番お願いしていいかな？」

「ええっ。構いません」

ルーフォンには、街で宝石を選んでくれるという約束をしたし、

ヴィンスをアマシユリに任せれるとなれば、ルーフォンとともに行動しても支障はない。それに、もしあの魔導師と出会ってしまった場合、アマシユリがいると、魔物がいるぞと騒がれかねない。

害がなくとも魔物が街にいたとばれるのは、さすがにまずいだろう。追いつかれるだけならまだしも、攻撃態勢に人間が入らないとは限らない。

「じゃ、そういうことで。ヴィンスもここに泊って行けよ」

「ありがとうございます。ではソファをお借りします」

あたりを見回し、ベッドが二つしかないことに疑問を感じているヴィンスは、ソファを選択した。

三人で部屋はとつても、結局俺はアマシユリと寝るつもりだったから、二人部屋でいいと受付に申し出た。その方が、金額も浮くという考え方で。

「ソファ？ ルーか俺と寝るか？」

「そんなっお構いなく……」

「でも風邪ひくぞ。駄目だ。選択しろ！ 命令だ。俺、アマシユリ、ルーフォン。さあ、この中からお好きなものを選べ！」

魔王命令は有効に使いました。

なんだか、人間でいう修学旅行の、最初の夜のような気分で、ちょっただけ楽しかった。

魔王の城にいたら、こんなこと楽しめないし、リベリオやヴィンスと一緒に寝たいと言いついたら、シェイルがうるさい。

何かあったらどうするんだと、ガミガミ言われてしまう。それに大人しくしたがってしまふ俺もどうかと思うのだが、なんとなく逆らえない自分がいた。だからこそ、シェイルの目が離れているときくらいは、好きなように人を振りまわしたい。

「…わかりました。ではルーフォンと」

今、何かアマシユリと通信テレパシーをしていた気がする。

するにはちょうどいい間だった。何を相談し合ったのかが気になる、ヴィンスにテレパシーを送る。

（今何をアマシユリと会話した？）

（…はい。聞こえていなかったですよ…？　なぜわかったのです？）

（なんとなくそんな気がした）

（…。私が魔王様となると、アマシユリがルーフォンと一緒にのですよね？　それはアマシユリがいやだと。で、アマシユリと私でしたら、魔王様がルーフォンと一緒にになる。それは危険です。では、消去法でルーフォンとがいいかと）

（そう。わかったよ。てっきり俺が嫌いなのかと…）

（そんな滅相もない！）

（はははっありがとう）

## 第15話

「仲が良いんだな」

「え？」

ルーフォンとともに、街を徘徊する。

旅路で必要そうなものを、ルーフォンの指示のもと買い求め、いろいろな雑貨店に出向いては、いろいろ説明を受けつつ、必要そうなものを袋に詰めていく。そんな最中、ルーフォンが口を開いたセリフが今の言葉だった。

何のことかと、見上げながらも首をかしげる。

「ヴィンスと」

「まあね」

「あと、姿が可愛くなったって言ってたけど」

「ああ。あいつは元の姿だと、魔物の中では知る人ぞ知る魔物だからな。ああやって姿を変えて人間の土地に足を踏み入れてるんだ。そうする魔物はその辺にいると思うぞ」

この街もそうなのだが、たまに見かける人間の中には、魔物の姿も少しだが見かけられた。

一見わからないのだが、レベルが低い魔物は、魔物という“臭い”までは消せないみたいだ。ただし、人間にまぎれる魔物は、別に人間を殺めようと思うものはない。ただ、買い求めているものが人間のところでしか手に入らない場合だったり、人間の中に良いやつを見つけて仲良くなっていたり。

魔物すべてが悪いやつというわけではないのだ。

「アマシユリも元の姿があるのか？」

「んーどうだろうな。会ったときからあの姿だったし」

「そうか」

ヴィンスと会えてあまりうれしくないのだろうか。

扉のところであつた時は、すぐうれしそうに開けていたのだが、魔物なんだと目の前で表された時、今までヴィンスを思っていた気持ちが変わってしまったのだろうか。

人間だし、魔物嫌いというのもあつて、当たり前なのかもしれないが、戦闘に入らなくて良かったとは思ふ。

初めてルーフオンにあつた時なんか、魔物はすべて敵。という感じを出してたから、アマシユリが魔物だとばれないようにはしていたものの、アマシユリが魔物だとばれ、助けてくれた恩人も魔物だと知り。それでも、手をかけようとは思ひのは、最初よりは何かが変わってきてくれた証拠なのだと思うていた。

しかし、人間の土地で買い物をするとなれば金がかかると思っていた俺は、勇者だとわかるバッチを渡されていたおかげで、それを目にした店の人たちは、表示価格よりも下げてくれたり、物によっては無料で提供してくれたりするところもあった。

今のところ買い物には影響がないものの、外れで会った魔導師に会ってしまったないかが不安になる。

「そういえば、俺に合う宝石探してくれるって言ったよな」

「ああそうだったな」

宝石店にさしかかり、夜中に行った約束の事を口にする。

きちんと覚えていたのか、あきれたようにほほ笑んで店の中へと入っていく。

中は一つ一つの備品がきれいにしており、建物のつくりが、一見茶色をイメージさせられる。

商品である宝石は、いろいろな形をしていて、一般の人が触れないように、鍵がかかっているガラスのショーケース内に納められていた。

中には、魔導師がロッドに使用していたような、手の平サイズの宝石も売っているようだ。

「大きければ大きいほどいいのか？」

「そういうわけではない。自分に合ったものでなければ、意味をなさないからな」

「ふうん。合う合わないってわかるもんなのか？」

「まあ、使ってみたり触れてみてだけだな」

要は見た目では分からないということか。

確かに、“人魚の涙”といわれている、このネックレスも大きいわけではないし、手の平サイズなんて物でもない。言うならば、ペットボトルのキャップくらいの大ささだ。それが言い伝えになるほど素晴らしいものならば、大きさなどあてにできないというのは納得できる。

但し、所持しているのに別にこれといって増大されている気もしないのだが。

「でも、ショーケースに入ってて触れねえよ？」

「これは一応盗まれないようにだよ」

「どれをお取りになりますか？」

あきれるように言うルーフォンは、何か目ぼしいものを見つけたのか、店員を呼んで鍵を開けてもらった。何かを話し、指定して取り出してもらうと、触ってみると俺に渡してくる。

渡されたものは、透き通った、白に近いピンクを輝かせる小さなガラス石だった。

光に当ててみたりするが、特別何かを感じたりはしない。  
あまり良いのかどうかよくわからず、首をかしげてしまう。

「それはローズクォーツといわれてるものだ」

「ふうーん…」

「あんまりか。何かパツと見て引かれるものはないか？」

落とさないように、その宝石を店員に戻すと、あつたところへと戻し、ショーケースの中にしまっていた。

まだ見るとわかつているからか、鍵を閉める様子はなかった。  
ルーフオンが何かを考えながら宝石を見つめている。何を考えればいいのかはわからないが、俺も何か引かれるものがないか探してみる。

「んー…」

適当に歩きながら、いろいろな色をした宝石に目を通す。

特別パツとするものがない。それはきつと宝石店ならどこでもそうなのだろう。

最後の列を歩いていると、何かこれ見よがしに光っている石があった。気になりその場に足を止めてみる。

ケース越しに見ていても、店の光を反射させ、その宝石だけが光っている。しかも、他に同じものがあると言うのに、ある入れ物の中に入っている、ちょっと奥まった部分にあつて、端しか見えない宝石。その一個がどうもきになる。

「ルー。これ」

「どれだ？」

店員さんも、開けていたところに鍵を閉め、ルーフォンの後ろについてきた。

指をさしていたところのカギを開け、入れ物を取り出してくれる。

「その中にある、二個くらい下に埋まつてるやつ」  
「これですか？」

言われ通り、二個くらい下の物をとったが、その隣のものだった。今崩れたやつと言い、その付近のものを数個取り出し、どれかを示す。それを手にして見ると、その宝石から何かが流れてくる。

先ほどのローズクォーツと言うもののように、丸みがあまりなく、位置により濃い紫と薄い紫が入っている、薄く角ばっているものだった。八角あり、縦に長いもの。

「クンツアルトか」

「くん…なに？」

「クンツアルト。他の宝石みたいに裸体でアクセサリーにはしない宝石だ。何かに入れて、日光や熱から避けなければいけないものだ。その石にこだわってたみたいだが」

「うん。なんかこれが一番光ってみえた。それになんか、触れた時…」

「じゃあそれだな。だいたい宝石の見つけ方がわかっただろ？ 同じ宝石でも、人によって合う合わないが違ったりする。効果はあまり変わらないが、合うものを選んだものが最適だ」

ルーフォンは、いろいろ説明してくれたが、半分理解できずに会計を終わらせていた。

クンツアルトに合う入れ物も一緒に買ってくれたみたいだ。

茶色い革製の紐で、宝石は、その間にある、特性ガラスの中に埋

め込まれた。その革紐を首に巻き、後ろできつく縛ってくれる。その時、“人魚の涙”のチェーンは、服の下に入っていて丁度見えなかったみたいで、何も言われなかった。

宝石が入っている特性ガラスは、日光から宝石を護ってくれるみたいで、強い衝撃にも耐えられるみたいだ。

しかし、この宝石を身につけてからというもの、なんだか具合がよろしくない。たぶん、ずっと変身の魔法を使用し続け、疲労がたまってきたいるのだろう。胸元がなんだか苦しいのだ。

心臓を何かに握りしめられているかのように。

そんな時、目の前に見覚えのあるローブ姿の男が立っていた。

「おや？ お主たちはあのときの」

「げっ…。なんでお前がここにいるんだよ」

「ここに宿をとっていてな。もう一人の子供はどうした」

「宿で休んでるよ。お前の所為だ！」

あの魔導師だ。

最悪な奴の再開に、ムカムカしていた苛立ちをその魔導師にぶつけてやる。

しかも、見た目が子供っぽいからと、アマシユリを子供扱いする口調にも腹が立つ。お前は口調が爺さんっぽいんだよ。そう怒鳴りつけてやりたかったが、今ここで争いになるのは面倒だということ、必死に怒りをこらえた。

「…お主…！ 勇者であつたか」

驚いて目をまん丸にしている。

ざまあみやがれ。と思ったが、どうして今頃気付くのだろうと思いついてみると、旅中は上着を羽織っていて、バッチが見えなかったからだろう。だから魔物も、勇者がどのつという会話にならなか

ったのだろつ。

バッチの威力は宝石よりも強いのではないのだろうか、だんだん宝石よりもバッチを意識する。

「勇者であつたよ。だからなんだ」

「何故勇者が…」

魔物と一緒にいたんだ。

そう言いたいのだろうか、あまりの驚きにその先の言葉が発せられない。

いや、発せられないのではなく、発することを許されないのだろつ。俺はにつこりとほほ笑みながら、その先の言葉を楽しみにした。声を出したくても出せない。

魚のように、口をパクパクしている。

当たり前だ。サイレント魔法でしゃべれなくしてやっている。今後もそれを口にされると面倒ということ、『勇者の連れに魔物がいる』という事実をしゃべろうとすると、サイレントにかかり、文字や他の行動により事実を伝えようとすると、動けなくなるという呪縛魔法をかけてやる。これは、俺が死するか解除するかのはずれかが行われない限り、治ることはない。

「勇者がどうかしたのか？」

いきなりしゃべらなくなったことにルーフォンが、眉間にしわを寄せ、怪訝そうに冷たい口調で聞く。

どうしたんだろうねと、一切関与していないように、ルーフォンに向かって俺も呟き、二人で目を合わせて首をかしげた。

「悪いけど仲間が待つてるし、俺ら行くからね？」

ため息をつきながら、その魔導師の隣を二人で横切ろうとしたその時、いきなり魔導師は俺の腕をつかみ、キッと睨みつけてくる。

「お主、我に何をした」

（だから見た目と違って口調が爺さんっぽいってば）

笑いをこらえながらも、怪訝な表情をして腕を振り払う。

「何のことが分からないけど、自分の症状を人の所為にするのはよくないよ」

あきれるようにため息をつきながらも、ルーフオンの腕を引つ張り先へと足を進めようとした。が、それも簡単にはさせてくれない。背を向けた瞬間、いきなり固い何かで背中を殴りつけられる。不意をくらった俺は、そのまま前に倒れこんでしまうのをルーフオンに支えられ、何とか立ち直りすぐに振り向いてみると、持っていたロッドが振り下ろされている。そのロッドで殴りつけたのだらう。

「なっ何をするんだ！」

「うるさい！ お主こそ我に何を！」

「何のことは知らんが、いきなり殴りつけるなんて卑怯じゃないのか？ しかもわけのわからない言いがかりをつけて…」

ようやくルーフオンがそう言い返し、喧嘩腰になった。

今まで黙っていた理由を聞きたいが、穏便に済ますには、あのまま退散したほうが良いと思ってはいたのだらう。

背中を痛めた俺を引かせ、一歩前へ出る。

「言いがかりなどではない！ あのガキの事をしゃべろうとしたら声が出んのじゃ！」

「出てるじゃないか。わけのわからないことを……。すまない誰か警備の者を呼んでくれないか？」

街の人にルーフオンはそうお願いし、勇者のご同行の者ということで、近くにいた人が、数人その場から立ち去った。数度うなずいていたから、呼んできてくれるのだろう。

有り難い。

「なっ！ 我が悪者か！」

「どう考えてもそうにしか考えられないが？ こちらは何もしていないというのに、いきなり殴りつけておいてそちらが被害者か？ ばかばかしい」

「ふん！ 今に見ておれ！」

そう言つて、警備の者が来る前にその場から退散してしまった。いつその事つかまってしまえばいいのにと思いながらも、後から来た警備に、どのようなことがあったのかを説明した。見学していた人たちの証言のおかげで、よりこちらが被害者だったというのが分かった。

だが、実際のところ、あの魔法をかけたのはこちらなのだから、こちらが悪者へと足を一步踏み込んでいるようなものだ。

先ほどあったことを、戻った後ヴィンスとアマシユリに話すと、ヴィンスは始末しに行こうとし出すわ、アマシユリは謝りだすわで、二人を鎮めるのにルーフオンと俺は必死になってしまった。

二人がこんなにもしゃべりだすとはさすがに思わず、怒っていた気持ちすらルーフオンと俺には消えてしまった。

しかし具合が悪い。

きつと疲れているからだと自分にいい聞かせ、ルーフォンたちには言わなかったが、ベッドに横になった瞬間、まだ寝るつもりまではなかったものの、そのまま夢の中へと入ってしまった。

## 第16話

「…ここは…？」

目が覚めると、荒れた大地が目の前に広がっていた。

街や森は燃え尽き、黒く焦げて瓦礫の山と化していた。そして、燃え尽きた木のかげら。まだ奥の方で火が燃え広がっているのか、遠くから炎の音がする。そんな場所に、俺はただ呆然と立ち竦み、何もない大地を見つめていた。

転がっていたガラスの破片に目をやると、映っていた自分の姿は魔王の黒赤の髪と瞳。返り血を浴びたかのように、頬や首、服に血が付いていた。

自分の手を広げ、目の前に上げてみると、そこには血塗れちまみの手。自分の血ではないことはわかっていた。

傷を負った痛みもないし、殴られた痛みもない。あるのは、使い慣れた魔力の開放感のみ。

口にしなくとも分かった。この惨状は、俺の仕業だと。胸元が少しムカムカする。

ソツと胸元に手を触れてみると、そこには固い石のようなものがあつた。

自ら輝き、存在を示すかのように。それは、紫色の角ばったガラス石。いつだったかに、誰かが俺に渡してきた気がする。渡した？

いや、買ったのか。記憶があまり定かではない。

何年生きて、何年暴れたのか。

覚えていない。しかし、どうしてだろうか。自分が魔王だったと  
いうことだけは覚えている。

何処で、どうして、どういう風に。そこまでは思い出せない。

でも、今みたいに一人ではなかった気がする。

「そこにいるのは…誰だ」

記憶のどこかにいる、わからない影。

一人や二人ではない。三人四人と、次々にいろいろな形をした影  
が現れてくる。しかし、特徴をつかんではいると思うのだが、顔も  
色も姿も声も名前も。何一つ思い出せない。

手を伸ばし、掴もうとしても、その影は離れていく一方で。

足を動かした瞬間、何かに蹴躓き、手について前に転んでしまっ  
ると、そこには瓦礫やガラスなどはなく、柔らかいものに手を  
ついてしまったみたいだ。

なんだろうかと身体を起こし、蹴躓いたものや、手についてしま  
ったものをじっくり見ると、黒く塗りつぶされたような人型の物が  
転がっていた。

いろいろな形をしているものの、顔も色も姿もはつきりとわから  
ない。

頭の中で描かれた影のような者たちが、たくさん転んでいた。

思い出さなくてもわかる。これは、

「俺が…殺した…？」

誰にいわれなくても、誰に聞かなくても、思い出そうとしなくて  
もそれはわかった。身体が感じた。身体が覚えていた。いつその事、  
それすら忘れてしまえばよかったのに。

視界に光り輝くものが見える。

先ほどの紫のガラス石だ。

自分はここにいると言わんばかりに光り輝き、自分を示す。

全てはこの石の所為だ。何もかも、この石の所為だ。石さえなければ。しかし、その奥でもう一つ光っているものがあつた。

### 人魚の涙

身体に埋め込まれていた、もう一つの宝石を取り出してみる。

なにもないときは、水色に見えていたものも、今は薄緑に光り、何かを癒そうとしている。いや、違う。

その光で、何か小さいものを映し出す。

顔も姿もはつきりとはしないが、髪の毛の長い、毛先に向かってカールが入っている髪質。しかし形は異様だった。

上体は女性の形だと言うのに、足は二本ではなく、一つにまとめられるように、太いものから徐々に細くなっていく。足元がどうなっているかまでははつきり見えない。しかし、はつきり見えないから、二本に見えないだけなのだろうか。

しかし、どうしてだろうか。

「俺…この人を知ってる…」

人なのかどうかはわからないが、どこかで覚えがある。

なんて呼ばれていたかも、どういう表情をした人なのかも、どういう立場の人かも知らない。ただ、この姿を見ると、何故だか心は落ち着いた。そして、この人の名前にはこの名がふさわしい。

「シレーナ…」

そう呟くと、その女は反応したかのように、少し上を向き、俺の

ほうを見た気がした。そして、ゆっくりとほほ笑んでいる。

はつきりとは見えないし、わからないが、そんな雰囲気がある。  
こんな果ててしまったような世界だと言っのに、この女性をみて  
いるとホッと安心した。

『シアナ』

どこかで誰かが誰かを呼んでいる。

あたりを見回してみるが、その太く、懐かしい響きをした声の主  
は見当たらなかった。

「シアナ…？ 誰だろう？ あ、もしかして君がシアナっていう名  
前だったのか？ ごめん…勝手にシレーナとか言っちゃった」

名前を間違えられると、さすがに怒るだろうなと思っていた。先  
ほども、別に笑っているのではなくて、怒ってしまった感じだった  
のだろうか。

そう謝ると、その女性は、首を左右に数回振り、ゆっくりと片手  
を俺の方に向け、人差し指を出してきた。

「俺が…シアナ？」

そういうと、首を縦に振り、そうだと言ってきているようだった。  
次は俺が首を横に振る番だった。

「違うよ。俺の名前はシアナじゃない…俺は…おれ…は…」

覚えてない。

自分の名前なんか覚えてない。ただ、覚えているのは魔王と呼ば  
れ続けていたことだけ。

何処からか響きわたる。

魔王と。魔王様と、大勢の声が耳の奥に響き渡らせる。

「違う…！ 違う！ 俺が思いたいたいのとはそんなことじゃない！  
俺が思いたいたいの俺自身だ」

ネックレスを持っていないほうの手で自分の頭を抱える。  
つい、ネックレスを持つ手にも力が入り、その浮かび上がっていた小さい女性までも、驚いたようにびくついてしまった。

「あ…ごめん。驚いたよね。ごめんね。痛かったよね」

力を抜き、何度もその女性に謝り続ける。その間も、耳鳴りのように響きわたる、大勢の声は消えやしなかった。

魔王だと言って、俺を苦しめるもの達。

魔王になんか、別になりたくてなったわけじゃないと思う。心が  
そう言っている。記憶なんかなくなっただけ、それくらいわかる。

「俺は欲しかったんだ。ただそれだけだったんだ」

そついうと、女性は何がと言わんばかりに首をかしげていた。

「一緒にいてくれる奴が…欲しかったんだ。護り護られる存在が。  
友達が…平和が…」

争いが嫌いだった気がする。

争いに楽しみを覚えていた反面、苛立ちを覚えていた気がする。  
殺して何の意味があるのか。殺すほど、俺は偉いものなのか。

“魔王”というだけで、何もしていない。偉くなんかない。

周りが勝手に強いものだと思っただけで、勘違いしていた気がする。

「強くなんかない。力だつて心だつて強くなんかない…」

ずっと傍にいて、叱ってくれたやつがいた気がする。  
でも、なんだか違う。呆れていたようにも感じられる。

“魔王らしく”

そう、言われ続けていた気もした。

強いだけじゃ王にはなれない。完璧な王などいない。

「だつて…。魔王を希望したわけじゃないのに…。魔王らしくって  
なんだよつて。わがまま言つてた気はするけど、わがまま言えば魔  
王なのかよ。人を使えば魔王なのかよ！ 大人しく座っていれば魔  
王なのか？ 違うだろう…。俺じゃない。魔王なんて」

もつと他に強いものがいたはずだ。

なのにどうして、俺を選んだのだろうか。

魔王の証はなんだ。

「俺は誰だ。俺はなんだ！？ 勝手に魔王に祭り上げたくせに、人  
間とやり合つなつて命令も聞かないし！ そんなの魔王らしくない  
なんて言つし！」

口が記憶よりも先走っていた。

そんな命令をしていたのだろうか。どうやって？ 誰に？ どう  
して？

思い出せないけれど、口は知っていた。だから止めることはしな  
い。

「魔王は弱音を吐いちゃいけないんだ…。わかってる。でも、俺だって泣きたいときはある。俺だって、悔しいことを口にしたいときだってある…。なのに、言うてはいけないうて圧力をかけられてる気がするんだ…。頑張ってるのに泣きたいのに…」

今の俺でなければ、頬に何かが伝っていた気がする。  
涙。

そんなもの、遠の昔に枯れ果ててしまった。

「泣いたらいけない…？ どうして…。魔王らしくってなんだよ。どうやったら魔王らしくなれるんだよ。人間を潰せばいいのか？ 逆らうものをすべて殺し尽くせばいいのか？ そんなことをして誰が幸せになるっていうんだよ…。戦い合ってたって、気分は晴れるが、結果は変わりはないんだ…。死人が増えるだけ。そんなの嫌だよ…」

自分は魔物だ。

そんな感情になるなんておかしい。でも、この感情は昔から持っていた気がする。

表面上では、争い事が大好きなように表していても、本当は好きじゃない。できれば争わずに終わらせたいし、魔法を使わずに一生を過ごせたら幸せなんだろうなって思ってきていた。

でも、出来るわけがなかった。

争いは必ずやってきていた。戦いたくなくても、自分の身を守るためだったら、止むを得ず争った。そのたびに、どこかが傷ついていた。でも、それを表には出せなかった。

「許されなかった。辛いつて思っていて、それを表情には出しちゃいけないって言われてる気がしたんだ…。誰かの冷たい瞳を知っている。いつも俺を呆れた瞳で見るんだ。じゃあ、お前が魔王にな

れよって言ってやりたかった。お前らが魔王をすればいいじゃんって」

苦しかった。

もうこれ以上しゃべりたくなかった。

女性を見ると、両手を下ろし、じつと俺のほうを見つめてきていた。

「でも、辛いときもこのネックレスを見たら落ち着くんだ。励ましてくれるみたいで、ホツとするんだ。今まで一緒にいてくれてありがとうな」

そうにつこりほほ笑むと、顔の筋肉がひきつった。

なんだかここ数年、心からほほ笑んでいなかったような気がする。

「ははっ。俺、笑えたんだ」

そういうと、その女性もにつこりとほほ笑んでくれた気がする。今回は本当だ。笑っている。

笑っている何かの姿を見るのも、すごく久しぶりな気がした。

でも、今状況にだけは耐えきれなかった。

耐えることができずに、胸元からこみあげてくる何かを吐き出すように、叫び続けた。

「う…… うああああああっ！」



## 第17話

「あっ……………」

自分の悲鳴で目が覚めた。  
熱い。

でも、見慣れた景色。  
とった宿の天井。

（夢…）

「シレーナ…？」

心配そうな瞳で上から見下ろすアマシユリの顔。その逆側には、  
子供ヴィンスの姿。

唸っていたのだろうか。額に冷たいものが乗っている。

なんだろうかと手を伸ばしてみると、視界に自分の手の平が入る。  
綺麗な手だ。

血に汚れず、肌色の手の平がある。

「…あ…」

ホッとした。

本当に夢だったのだと。

額に触れると、そこには濡れたタオルがあった。冷たく。

「二日間」

「え？」

視界には入っていないが、少し遠い位置でルーフォンの声が聞こえた。

何が二日間なのかと、つい聞き返してしまう。

「<sup>うな</sup>魔されてた期間だ」

「二日…間も？」

「はい。熱が出て、辛そうでした」

（魔王様。聞こえますか？）

（え？ アマシユリか？ ああ、聞こえる）

（良かった…。魔されているとき、何度もこちらで呼び出したのですが、返事がなかったのです…）

気付けば、ギュツと俺の手をアマシユリが握りしめていた。

温かい。自分が冷えているのかはわからないが、アマシユリの手がすごく温かく感じられた。

「すまない…心配をかけたか」

「無事であればいいのですが…」

そう言ってくれるヴィンスも、相当心配してくれていたみたいだ。目の下にクマができている。

手を伸ばし、アマシユリの頬に触れてみる。

温かい。

ゆっくり起き上ろうとすると、いきなりヴィンスに止められる。

「まだ起きてはいけません」

「もう…大丈夫」

「ダメです。熱が一向に下がる様子を見せないんです。私の治癒魔法が一切効かない。何が悪いのかが診えないのです。何か変わった物を食べたり、触れたりしませんでしたか？」

「シレーナ。拾い食いでもしたの！？」

ヴィンスの言葉に驚いたように、アマシユリが大きな声を出した。どうなんだと言わんばかりに、アマシユリがルーフオンのいる方向に向いていた。

「いや、俺が見ている間で拾い食いをしている様子はなかったが……」

「変わった物……？ 宝石なら買ったけど」

「これですよね？」

胸元に転がっていた宝石にヴィンスが触れ、そつと持ち上げてみた。

何の変哲もなさそうだと言わんばかりに、不思議そうに見つめてはいるが、俺にとってその宝石は不気味だった。最初は綺麗だと思ったが、先ほどの夢といい、曰く付きのものを入手してしまったのだろうか。

「それ……。買った時から具合悪い」

思い返してみれば、それを身につけた瞬間、具合が悪くなり始めてはいた。

ただの疲労だと思い込んでいた俺は、重大なものを見逃していたようだ。

それを聞いたヴィンスは、そのネックレスを奪い取り、ルーフオンに渡す。身から離れた瞬間、先ほどから感じていた重みが消えうせ、身が軽くなった気がする。

「… 楽になった。少しだけ」  
「極稀なのですが」

すごく気まずそうにヴィンスが口を開き始めた。

「本当に稀なのですが、宝石が身体に合わなく、拒否反応が出る者がいるそうです」

「… 拒否反応？ それはどういうのだ？」

ルーフオンが立ち上がったのだろうか、椅子を引く音がした。この男にも知らないことがあるのかと、少しだけ優位に立った気がした。

「それは個別なもので、これといったものはないのですが、熱を出したり魔される事が多いです。運が良ければ、宝石が触れた部分に痒みが現れるだけです」

「… じゃあ、シレーナがそうだったこと？」

「残念だが」

今まで宝石だと思って触れたことがないからこそ、自分自身のこととが分からなかったが、アレルギーのような形で現れるとは思わなかった。

しかし、アマシユリもヴィンスも心なしか不思議そうな顔をしていた。言いたいことはわかる。同じ理由で、俺も不思議になっているからだ。

小さいころから所持し、身体の中に埋め込むことまで行っている、“人魚の涙” に関してはどうなのだろうか。

拒否反応がこんなにもその宝石で出たということは、小さいころからその苦しみを味わっていてもおかしくはない。

しかし、今までこんなことはなかったはずだ。

元々存在自体怪しまれていた“人魚の涙”だ。  
例外があっても、おかしくはないだろう。

良くはなつたと言つたものの、熱はまだまだ下がる様子がないらしく、数日間外出禁止、ベッドから出ることを禁止と、不自由な生活を送ってしまった。

気を失つてからの俺の姿は、一瞬魔王になりかけたものの、反射的にヴィンスが上から塗るように魔法をかけ、変化とはまた別個の魔法をかけてくれていたみたいだ。そんな器用なことができるのが、ヴィンスの能力なのだろう。

回復するまで魔法の使用を禁止され、変化もヴィンスの手により、塗り替えてもらっていた。

何から何まで申し訳ない。

ただ、熱で魘されたり、苦しい思いをするなんて初めてで、死ぬんじゃないかと思つたが、数日たった今、すっかりもと通りとなつた。

「病気で臥せてくれてれば、静かで楽だつたのになあ」

「なんだとルー！ 失礼な！」

ため息をつきながら、勿体ないと言わんばかりにルーフォンが口にする。

今、ヴィンスが魔物の土地に戻るということで、街の外れまで見送りに来ていた。

臥せている間、ヴィンスとルーフォンで今までのこととか、あの後のこととかをいろいろ話していたみたいで、少しだけ楽しそうだ

つたのを覚えている。魔られていてあまりはつきりとまでは覚えていないが。

「じゃあ私はこれで。また何かありましたらすぐ呼びください」

「ああ。ありがとうな」

「ヴィンスも気をつけて」

ヴィンスが見えなくなるまで、俺は手を振ってやった。

今はまだ平和だ。無駄な争いはない。これが続けばいいのに。そう口にしたいくても、言葉にすることができなかった。

ヴィンスと別れた後、この街のお偉いさんとお話をした。

特別これといったことは話さなかったが、魔物の土地に面した街ということ、被害の多さは数えきれそうもなかった。ただ、固まって魔物が現れることが少ないおかげで、警備の者と、所属している魔導師や魔術者の手により、他の街や村より亡くなっている人の数は多くはないとのことだった。

ただ、数日前に行われた闘技場にて、この街が所属となっている国の王が罰せられ、他の王がたつまでは、少しの油断もできないとのことだった。

新たに現れた王が、悪い方向に行くかいい方向に行くか。王の判断次第で、ここの警備体勢が変わってしまう可能性もあるとのことだった。

ある程度話が終わると、その建物から出ていく。

結界が張られ、魔物がそう簡単には入れないようになっていたため、外で待機しているアマシユリと合流し、この街を後にした。

次の街へ向かおうと街から出ると、何やら騒がしかった。

固まって魔物が現れることは少ないと言っていたものの、まったくいわけではないのだろう。

警備の者と、爺さんっぽい口調をしていたあの魔導師が、数匹の魔物と対峙していた。

暫く様子を見てみると、話の内容から、暴れたがっている魔物が人間を襲っていたようだ。それを見かけた警備の者が止め、言い争いになっていたようだ。まだ戦闘態勢に入っていないことにホツとし、ゆつくりと俺らはその者たちに近づいていく。

「俺らは言い争いなんか興味がないんだ。人間を襲わせてくれないなら、お前らが楽しませてくれよ」

魔物は大人しくしているのに飽きたのか、足元にあった石ころを警備の一人に向かって投げる。

しかし、それだけではなかった。その投げた石ころに魔法をかけ、熱い炎を作り出していた。見逃さなかった魔導師は、反射的にその警備の人間を、魔術で守らせる。それがスタートのようだ。

警備の者たちも、武器をしっかりと持ち直し、魔物に刃を向けていた。

しかし、警備と戦わせてしまうと、また魔物がこの街を狙ってくると思い、勇者の俺だったら、俺の身を狙ってくるだろうと考え、警備と魔物が衝突する前に、魔物に手を出してしまえばいいのではないかと結論を出した。そのあとは早かった。

ルーフオンやアマシユリには何も言わず、魔物に駆け出し脇腹目指してドロップキックを喰らわせてやった。

いきなりの突入に、警備の者の足が止まった。

命中した魔物たちは、ドミノ倒しのように、数人一緒に転げ落ちた。

「ストライック！　ってかあっ！」

上着を脱ぎ、誰からもわかるように、勇者のバッチをこれ見よがしに見せつけた。

すると、警備の者も気づいたようで、驚いていた。

「き、貴様あつ何者だ！」

「勇者様だ問題はあるか！」

「ゆ、勇者だと…」

転げ落ちた魔物が隣り聞くから答えたところ、何処から声を出したのか、力んだあまり、声が裏返っているようだ。

「そうですよつと。死にたいのであれば、わたくしがお相手いたしますが？」

「…上等だこらあっ！　捻りつぶしてやる」

怒りのまま手の平に集めた魔力の塊、炎弾を数弾俺に撃ち込んでくる。

「げっ……」

病み上がりなだけだと思いつつも、臥せている際にルーフオンに教わった水魔術を頭の中に掻き上げる。

手を前に出し、目の前に水の結界を張り、その炎弾を吸収する。

街の方にも投げられたら大変だと思い、まず警備の者と魔導師。そして、街のほうに結界を張るため、自分が無防備になっているのを承知で長い呪文を口にする。

もちろん、その間を利用して攻撃してこようとする魔物はいる者の、ルーフオンの剣の舞により、無残にも切り落とされる。一度かけた魔術は、そう簡単に外れることはない。発動された街への水の結界も、数年は保ちそうだが。しかし、攻撃される量によりそれは変わる。

攻撃され続ければ、保つものも保たなくなるが、その度に街の魔術者や魔導師が上から結界を張りなおしてくれればいいだけだ。難しいことでもないだろう。

「ふう、こんなもんか？」

「上出来です」

「やった」

発動したことを確認し、ルーフオンに見せると、初めて使った魔術にしてはいいものだったのだろう。一応ということで、ルーフオンも二重の結界をかけてくれた。

他に魔物がいないかとみてみると、全てルーフオンが相手にしてしまったみたいで、向かってくる魔物はすでに消えていた。

「ありがとうございます。勇者様方」

「恩にきります」

そう警備の者が言ってきたはくれるが、たった一人だけ気に食わない表情でこちらを見ている者がいた。

あのローブ姿の魔導師だった。

「何故だ。何故お前は我らを助けた」

「ウンヒュ！ 何を言う！」

魔導師の名前はウンヒュというみたいだ。その男の言葉に、警備の者が叱りつけているが、気に食わないのは仕方がないものだ。

とくに、アマシユリのほうを睨みつけ、かけた魔法の所為でアマシユリのことをしゃべれない悔しさも、苛立ちとして入っているのだろう。少しだけ申し訳ないことをしてしまったかもしれないが、自分たちの身を守る方法としては、こうすることしかできなかった。

「襲われてたら助けるだろう。でも、もしそれがあなたたちからかけた喧嘩でしたら、手を貸すつもりはなかったです。ただ、魔物が手をかけようとしていたから助けた。それだけです。それに、下手をすると街の者まで巻き込んでしまう。それは不本意でしょう？」

アマシユリが、冷たくそう言い放つ。

本心はあまりそう思っていないのだろうが、普段の魔王。俺ならこういっただろうと考えながらしゃべってくれているのだろう。黙り込んでいた俺の代わりに、アマシユリが伝えてくれた。

すると、納得したのかどうかはわからないが、何か引掛かる表情のまま、黙り込んでしまった。

暫く考え込むように黙り込んでいた後、いきなり魔導師は口を開いて、俺やルーフォン、アマシユリを驚かせた。



## 第18話

「すごい。俺、初めてみたかも」

先ほどから俺、魔王であるシレーナは心の中での笑いが止まらない。

笑いこけたりまではさすがにしないが、笑ってしまいたくなるのを我慢していた。

「まあな。俺もだ」

「僕もです」

敵視していた魔導師が、いきなり言ってきた一言とは、

『口先ではそういうことは言えるじゃろ！ だから我も連れて行け！  
良い勇者かどうかを見極めてやるわ』

その一言があまりにも面白くて、ついつい了承してしまった。

ルーフオンもアマシユリも、俺が良いならといていたが、今となつてみれば面白い。

良い勇者かどうかなんて、すぐわかるわけでもないのを見越して、同行しよう言う。しかも、アマシユリを魔物だと知った上で、言っているのだから余計におかしい。

しかし、この魔導師…ユンヒュが行った、魔物のみを拘束できるあの魔術。あれの対処を考えなければならぬ。いちいち発動されていたら、アマシユリの身が持たない。

「なにがじゃ」

「いやいやこつちの話。それよりさ、初めて会ったときにしてたあの魔術、どうにかなんねえの？」

「拘束術か？」

「そーそれ。便利なんだから、応用するようにアマシユリにはかかんないようにできないのかよ」

「出来ん」

そう言い切るユンヒュに、アマシユリがぶうつと頬を膨らませながら、大きな声で文句を言う。

「だから嫌いなんだよね魔術。器用なこと一切出来ない」

「ふん。まともな魔法も使えんガキにいわれたかないわ」

「少なくともお前よりは生きてるもん！」

見た目が幼く見えるアマシユリや俺でも、1000年は生きている。アマシユリは、俺よりも生きているから、人間からしてみればかなりのお爺さんだ。

魔物は寿命がないと言われている。ただ、ある一定の年齢で容姿の成長が止まってしまうのは、魔力に応じた耐性が必要という原理みたいだ。だから、お爺さんっぽい姿の者はいない。シェイルやヴ

インス、リベリオくらいの年齢が標準くらいだろう。もう少し老けた魔物もいるが、それは戦いや疲労からだろうと言われている。

逆に、身長の高い俺やアマシユリは、魔力や筋力よりも、軽い身のこなしや素早さに長けていると言われている。しかし、“俺”という異例があるため、単にそういう遺伝なのだろうとも言われている。

「しかし、お主らは魔王対策はしておるのか？」

「魔王対策？」

次の街への森を歩きながらも、だらだらと会話を続ける。

呆れたように言うユニヒュは、何のことかさっぱりと言わんばかりに首をかしげる俺とアマシユリに、再度呆れたため息をついた。

「お主ら… もしやあまり魔王の情報がないのか？」

「それはどういうことだ？」

話にならんと言わんばかりに呆れるユニヒュに、ようやくルーフオンが口を開いた。

ルーフオンなら何とか会話になるだろうと思ったのが、ユニヒュは知っている情報を口にする。

「魔王の側近としている魔物を倒さない限り、魔王への道は開けないと言われるくらい強い魔物が傍にいて、魔王を護ってるって話じゃ」

「そいつの容姿は？」

「そうじゃな。見た目の年齢は、我やお主… ルーフオンとそう変わらないだろう。言うなら少し高めかの？ 金髪で長髪。青い瞳がより冷たくその男を見せるのじゃ。一度姿を見たことがあるが、相当強いぞ」

「会ったことがあるのか」

「魔王よりも出現率が多い。魔王はなかなか城から姿を出さないと  
言われているしな」

「じゃあ容姿を知る者は少ないのか？」

「いや、そういうわけではない。実際、我も目にしたことがある」

反射的に俺とアマシユリは、その言葉に反応してしまう。

魔物が、『魔王を見たことがある』といっても、年に数回顔を出しているのだから、知っていてもおかしくはない。しかし、人間が魔王の姿を知っていることなどないと思っていた。いや、いたとしても、ほんの少数。魔王の姿で人間の土地を歩いたことがないから、知らないくて当たり前だ。

あまり気にしないかのように、歩く方向のみ見つめ続けた。

「魔王を…どんな姿だ！」

「そうじゃの…。いうなら、アマシユリよりも少し高めの身長。赤と黒の髪で、赤黒の瞳。人間の間では紫を通り越して、最も不吉な色合いといわれている色だ」

「ついでに言うと、魔物の間じゃあ最も美しき色合いって言われているよ」

楽しそうにユンヒュの説明にアマシユリが口をはさむ。

あまり二人は、気にする様子もなく話が先に進み、その姿がアマシユリには気に食わなかったみたいで、先を歩いていた俺の元まで足を進めては、あいつ嫌いと言っていた。

「…強そうか？」

「見た目では何とも言えぬ。寧ろ、見た目で言うならそんなに怖くない。むしろ可愛いくらいだ。でも、あの側近が恐ろしくてな。あんなにも凶悪な魔物を側近としているくらいだ。相当な者なのだろう」

う」

「そこはあくまでも想像の域か」

「そうということじゃ」

想像しなくても、目の前にその本人がいる。

言いたくて言いたくて仕方がなかったが、必死にその感情を押しとどめる。

言ってしまうえば全てがパア。

それにまだルーフォンと争いたくはない。アマシユリも、文句を言いに来た様子ではあったものの、下手に口走らないように視線を送ってくる。口止めのために来たのだろう。今になってわかったが、そんなにも信用されていないのか。

日ごろの行いが悪かったのかもしれない。

適当に理由をつけては城から抜け出し、人間の土地へ行ったり、その帰りに暴れてきたりで、シェイルも相当苦勞をしていたみたいだ。

日が暮れ、ユンヒュとルーフォンは仲良くなったのか、寢床の準備をするまで魔王の話やら、魔物の被害の話やら、集中して話してこんでいた。

疲れた、休む、寝る！ と怒鳴らなかつたら、寝ずに話し続けていたのではないのだろうか。

仲間が増えたことと、ヴェインスの様子とシェイルの様子。城の状

態を知るためにも、そろそろコピーのほうに意識を移したい。しかし、新たにユニヒュという謎な男とともに行動することで、意識を飛ばしてしまってもいいものなのかが不安になった。

いろいろ考えながらも寝袋を広げていると、アマシユリがそれに気付いたのか、寝袋をぎゅっと近づけてくる。

「今日は一緒に寝ませんか？ シレーナもそういう気分でしょう？ そんなに疲れていないから、見張りをしますよ」

ほかの二人に聞こえないように、ぼそぼそと小声でそういう。魔物もそんなに出なかったし、出たら出たで魔王の話をしながらも、ルーフォンとユニヒュが戦闘をし切っていたようなものだ。きつと、魔物のことよりも、魔王のほうに興味があったのだろう。さつさと潰し、先へと進もうとしていた。

先頭を歩いていたはずの俺らは、気付けば後ろを歩いていたりなんかして。

「すまないな」

「いいえ」

見張りをするというルーフォンと、先に寝てしまったユニヒュを置いて、俺はアマシユリに見守られながら、精神を飛ばした。

## 第19話

目を開けると、破壊されかけていた壁はすでに直っており、見慣れている一室だった。

近くには、一匹の感じ慣れた魔物が、壁に寄りかかりながらも目を伏せている気配がした。少し動くと、空気の流れが変わったからか、その魔物は目をぱちつと開き、壁から背を離す。そして、動いたのが俺だとわかり、ホツとしていた。

警戒心だけは怠らない。だからこそ、こうして任せていられるのだが、少し動いただけでわかるだなんて思わなかった。暫く寝ていないのだろう。クマができていたり、眠そうな表情をしているわけではないが、今の現状そうとしか思えない。

寝ていたとしても、碌ろくな睡眠ではないのだろう。いつか体を壊してしまわないか、不安になってしまう。

勇者となるため城を出る前からだって、寝室で寝ていても、その扉の前で立ち、不逞な輩が入ってこないかを、警戒していたような気がする。あまり気にせず夢に入ってしまうから、今となっては不憫でならない。

確かにあまり警戒心が強いほうではない俺でも、いざ襲われそうになったら起きる自信はある。それはこの魔物。シェイルにもわかっているはずだろう。

「戻られましたか魔王」

「シェイル。暫く寝ていないんだろ？　ちゃんと寝室で寝ろよ」

「いえ。魔王に何かあったら…」

「別にこれコピーだし……。それに、いざ俺の本体が近くにいるときに、倒れられても面倒だろうが。馬鹿者。いいから寝てしまえ」  
「しかし、せつかく魔王とお話ができると言うのに」

今までだって、いやというほど話はしてきていただろうに。

ただここ数日。いや、宝石により、苦しんでいた日付を含めると、それなりに日付は経っているものの、城を抜け出しているときも、このくらいの日数を離れていたと思う。

日にちを数えていると、扉に数回ノックが入る。

シェイルが向かい、一匹くらいしか通れない広さに開け、誰が来客かを確認すると、知っている者なのか扉をきちんと開けてやった。するとその奥から、人間の土地で見つけ出したのだろうメイド服に雑巾が掛けられ、モップの先が入っているバケツを片手に、楽しそうな表情で入ってくる女。

「おっシュンリンじゃないか」

「あら魔王様。お目覚めでしたか」

シュンリン。それは、懐いているこの城の掃除係だった。

リベリオに負けないほど変な女だ。

肩ほどしかないストレートっぽい髪が、毛先のみ内側にはねるようにカールしている。それがセットなのかどうかまでは判明できていない。ちよつときつめに見えるツリ目だが、薄い唇がどうしてか冷たく見えるはずなのに、優しげに見える。細い首筋に、メイド服そこからちらりと見える胸は、大きすぎず小さすぎず。綺麗な肌。露出は多くなく少なくなく。ほどほどにある露出具合が、そそられる。

しかし変人。

メイド服を調達しに、人間の土地へ足を踏み入れる。確かにそこは人の好みであり自由なのだが、どうしてわざわざメイド服なのだ

ろうか。普通に動きやすい恰好にすればいいのに、メイド服を心より愛するところが、玉に瑕。そこが変人だと言われる一つの原因だった。

「目覚めた目覚めた。これからどこ掃除行くの？ 手伝う手伝う」

「ご機嫌ですね。何かいいことでも御有りですか？」

「ナイナイ。無いから探しに行きがてら、シェイルの休憩。というわけで俺は席を外す。戻ってきたら寝込み襲うから、寝室でぐっすり寝てろよ」

「寝込み襲われるのは勘弁を。しかしどこに向かわれるおつもりですか？」

「それはシュンリン次第！ 何かあったらシュンリンに護ってもらうからいいよ。寝てろ」

ほぼ命令するように、シェイルに睡眠時間を提供する。

反対したがる様子のシェイルを放置し、シュンリンとともにその場を離れた。

向かった先は、いったん一室を離れ、調理場のほうへ進んだ後、調理場を抜け、今にでも崩れそうな、滅多に使用しない階段のほうへと足を進めた。滅多に使用しないというのに、シュンリンの手によりきれいにされた手すりや床。壁や天井は、なかなか住みやすい環境が整っていた。

光が通らないところにも行くシュンリンは、電撃魔法が得意で、その電流を手のひらに集めて光代わりに使用する。足元に気を付けながらも階段を下り、奥へと進んでいく。

城から抜け出す際によく使用する通路だが、それ以外に使用しないため、あまり深いところまで知らなかった。しかし、隅から隅へときれいにしたがるシュンリンは、城の中で一番道には詳しい。

この城は、魔王と認識された時に、いい建物があるとシェイルが言い、連れてこられた建物だった。その時は、もう少し古臭くて、今にでも崩れそうなくらいボロだったのを、いろいろな魔物の手により、新築された。

そのため、もともと何に使用されていたのかも、だれが使用していたのかもわからない。だからこそ、あまり使用しないでいる部屋は、本当開くことがなかった。しかし、好奇心の旺盛なシュンリンは、気にすることなく部屋を解放し、掃除し、使えるように美しく仕立てた。実際、リベリオが愛用している調理場だって、シュンリンが初の扉を開き、綺麗に使えるようにしたのだ。

いまだ開かれていない扉はある。今回は、新たに扉を開けるため動いているとのことだった。

しかし、どうしてこんな深夜にやるのか。その理由はわからないものの、城のみんなは開かれる部屋のためにはと、その疑問は、夜行性だから。と思いこもうとしていた。

「へえ。こんなところに扉なんてあったんだ」

「はい。もうここは開かれております」

「へ？ そうなの？ じゃあ別の扉に行かないの？」

「そのためにはここを通る必要があります」

「へえっなんでなんで？」

「それは今からわかります」

シュンリンも楽しいのだろう、につこりとほほ笑みながらも、足元に注意を向けながら、その扉を開き、進んでいく。そこは、暗く、シュンリンの光がない限り一步も足を踏み入れにくい道だった。

しかも、ほぼ一方通行。

足元にだけ注意を払っていれば問題はない。しかし、いきなりシュンリンの高さに変化が起きる。

「この先下りの階段です。足元お気をつけ願います」  
「はい」

一段下がった時の変化だったのか。

いきなりシュンリンの身長が、縮んだのかと思ってしまった。

しかし、ここは一階。ということは、この城には地下があったのだ。

日が一切入らないからなのか、どこかに隙間があるからなのか、空気の流れと気温が変わった。少し冷え込む感じた。

下るにつれて、その冷え込みが少しずつ気になりだし、まだ下がるのだろうかとゆっくりシュンリンについていくと、ようやく平らな所へとたどり着いた。

すると、ホテルの廊下のように、柔らかいじゅうたんが引かれ、二人くらいしか並べない広さの通路。その左右には、交互に扉が付いていた。しかし、そのような扉に触れることなく、シュンリンは先へと足を進めていく。光を失わないように、周りが気にはなるものの、しっかりと行っていた。

廊下の壁には、古そうな絵画なども飾られ、途中には、花を生けてない花瓶が転々としていた。

何故こんなところにこんな空間があるのだろうか。少し歩くと、そのまま前と、右へと分かれ道になる。迷うことなくシュンリンは右に進んでいく。

何処へ向かうのかと、少し歩くと、突き当たりにぶつかる。左右に曲がる場所があるが、そこを迷わず左に向かう。すると、再び階段への扉がある。

再度階段を下り、途中で折り返すように左へ二度曲がり、また階段を下りていく。

また絨毯の上をまっすぐ歩くと、また右がまっすぐか。すると、次はまっすぐ進んでいき、突き当りの扉で足を止めた。

「ここです」

「…と、遠かったね」

「はい」

こんなにも地下が続くとは思わなかった。

しかし、他の扉を開いていないからわからないが、なんだか以前数人の何者かがここを利用していたのだろう。使っていた建物が何かの現象により、埋もれてしまった。そんな光景だ。

お目当ての扉をシュンリンが開く。

今まで見てきた扉とは違う。

魔王の間の扉のように、特殊な飾りがされており、しっかりとした取っ手。重く、力強く引かなければあかない扉。

ゆっくりと開かされながら舞ってくるのは、使ってこなかった証といわんばかりの埃だった。

あまりものひどさに、つい息を止め、数十歩下がってしまう。

扉の足元に何か鉄のようなものを挟み、扉が閉まらないように固定する。すると、ゆっくりと手元の電気を大きくし、その中を出来るだけ奥まで見えるように光らせる。

数度うなずき、こちらに振り向く。

「魔王様。せっかくですし、少しお手伝い願いたいのですが」

「ん？ 何すればいい？」

「水魔法が得意でしたよね？」

「うん」

「床一面を濡らす程度に、水を撒いていただけませんか？」

「？ うん。いいよ」

手を前に出し、手の平に魔力を溜めて水をイメージする。

一度、喉が渴いてこの水で喉を潤おせないか、実験をしたことが

ある。が、あれはやるものではない。

まずいとかではない。

味自体は普通の水なのだが、そのあと数分もしないうちにお腹を壊した。

魔力で作った水は、普通の水とは違うらしく、もう少し早めに知リたかったが、実験した方法が方法だけに、一生魔法で作った水なんか、口にしないと誓った。

溜まった魔水は、手から流れ落ち、ゆっくりと床へ落ちていく。足元は通路と同じ絨毯だと思っていたから撥ねないものだと思ったが、この部屋は違っていたみたいだ。

魔王の間のように、下はフローリング。水はしっかりと撥ね、靴に触れた。ゆっくりと流れを作りながら床一面を薄い水で濡らしていると、シュンリンはバケツの中に入っていたモップの柄を掴んで取り出し、地面にモップをたたきつける。そして、ゆっくりと擦り始めた。

「そういえば、バケツ持ってきたならそれに水汲んでくればよかったんじゃない？」

「いえ。それでは足りません。もちろん、魔王が来ていただけないのでしたら、そうするつもりでしたが」

「でもこんなに水いる？」

「はい。埃が多いところは、歩くだけで舞うので、水があればそんなに舞いあがらず、それで何より床を磨きやすくなります」

「ふうん」

良くわからないが、とりあえず水があった方が良さそうだ。

少し待つと、俺が入れるためにと、磨いた道を作り出してくれた。それに、水を床一面に流させたのは、シュンリンの電気を、足元の水に流されるためでもあったみたいだ。一応道を作ってくれるときに、その部分だけは電気を流さないようにしてくれたが、周りの

明かりだけで十分足元は照らされていた。

道を作っているときに見つけた椅子も、きちんと磨かれていた。そこに座ってくださいと言わんばかりに、そこに向かわせるような道も出来上がっていた。

この一室は、図書室のようだった。

奥の方までは暗く、どのくらいの広さなのかは認識できていないが、天井まであるんじゃないかと思われる大きな本棚に、ぎっしりと本が詰められている。

壁に並ばれている方の本棚の一か所に目が行く。その中でも、遠目で暗さのこともありあまり良く見えないが、何か惹かれる本があった。

シュンリンを呼び、そこまでの道を作ってもらい、その本を取り出した。

本も本で埃がかぶっており、掴んだ瞬間、埃が舞った。シュンリンが手を出すのでそれを渡すと、持ってきた他の道具により、その本は先ほどよりも綺麗になっていた。

昔は読まれ続けられていたのだろうか。

最初の表紙を開くと、角や側面に値する部分が、少し切れていた、折れている部分が多々あった。

「魔法と魔力…か」

魔物にとっては初歩的な内容が記載されているのだろうか。

カバー題名から感じ取った言葉はそれだった。しかし目次を開き、読むことなく、最初のページへと開いていく。すると、教科書のように文字だらけというわけではなかった。

字よりも何かの図や、印に見える。その下には、獣のような姿をした何かがあった。

もう一度表紙を見ると、確かに『魔法と魔力』と書かれている。表紙の次のページを開くと、普通であれば題名が再度書かれてい

る。しかし、そこに書かれている字は、また別のものだった。

「これは……」

## 第20話

「おい」

「ん？」

「もうそいつ…シレーナは寝たのか？」

「うん」

見張りをしていたルーフォンが、小声で俺に話しかけて来たのは、  
ユンヒュからルーフォンが交代し暫くしてからだった。

薄ら起きていたのに気づいていたのだろう。シレーナを護るよう  
に、ユンヒュやルーフォンのほうに背を向け、しっかりと見つめて  
いる中、俺の背中に寄りかかるようにルーフォンが座っている。

何か気になることがあるのだろう。しかも、ずっと考え込んでい  
たような何かを。

「お前、魔王に仕えているのか」

「……やっぱり聞こえてたよね」

「まああんだだけ大声を出されれば」

溜息のようなものを吐く。

すっかり忘れていたが、街に着く前に遭遇した魔物が魔王の城に仕える情報魔というのを、しっかりと暴露されてしまったのだ。いままでにもいうタイミングがあったというのに、なかなか言っていないから、忘れてしまったか、よく聞き取れていなかったのだろうと勝手に思い込み、同時に忘れてしまっていた。

魔王に仕える者として、敵意を見せるつもりだろうか。しかし、弱いというのをしっかりと知っているはずだ。別に改めて戦闘態勢に入らせる必要などなかっただろう。

「で？ 何が言いたいんだ？」

「勇者のことでも、魔王に告げ口しているのか？」

「最初に言っておくけどシレーナは、魔王に仕える魔物だというのは知っているよ。あと、質問の答えだけど、してるよ。そのこともシレーナは知っている」

「知って？ 知ってて一緒に居させているのか？」

「言ってるだろう。別にシレーナは魔王を潰すことだけが目的じゃない。もちろん、理不尽な理由で魔王を潰すつもりなら、いつだって敵に回るよ」

しかし、シレーナは魔王で、魔王はシレーナだ。刃向かうも何もない。

でも、このまま魔王の元までシレーナが向かわなければならぬ状況にあった場合、どうするつもりなのだろうか。

きつと、魔王のことだから一切考えていないのだろうか、今後こんなダラダラ街を歩き続けるわけにはいかない。勇者となったのであれば、人間は魔王に向かってくれるものだと思っているし、そのために各国から税金で勇者の諸経費は賄われている分、避け続けるわけにはいかない。

税金で賄われていること自体知らないだろうが、元々贅沢をする性格じゃないから、特別言っではないのだが。

「どういづつもりだ？」

「そのままの意味だよ。敵でもあり、味方でもある」

「本当、性格が変わるよな」

「え？」

「シレーナと俺の前」

「当たり前だろう。シレーナは大切なんだ」

「それは表面上でか？」

ルーフォンの前と魔王の前で違うのは当たり前だ。

魔王だろうがシレーナだろうが、人間が思っているほど魔王は、凶悪な性格をしているわけではないというのに、“魔王”という名前だけで、勝手に悪者だと思っっている。人間は魔王に会おうとはしない。会おうとしていたとしても、敵意むき出しで、話し合うだなんて思考は一切ない。

長い間、魔王の観察を続けた。その所為で入り込んだ感情は、抜けることなんかなかったし、抜くつもりもなかった。

表面上で慕えるものだったら、最初からそうしていたし、もしそうだとしたら、こんなところまで付いてや来なかった。それに、束縛されるのが嫌だと最初に伝えた時点で、あの返事が来ること自体人間が考えているような“魔王”である限り、ありえないだろう。

「そう思うか？ 表面上だけで、ここまで危険承知の旅についてくるとでも？」

「魔王の言うことは絶対じゃないのか」

「そう思い込んでいるのは人間だけ。人間だって、国王の言うことが全てじゃないだろう？ それと同じ」

「じゃあ何故そんなにシレーナに執着する？ それは魔王への反抗にならないのか」

「反抗？ なぜ？ 魔王もシレーナに執着しているのを知っている。

言っておくけど、魔王は人間が言うような魔物じゃないよ。会ってみたい？」

「…そう簡単に会えるものではないだろう」

「そうだね」

簡単に会えるわけがない。

それにシレーナが一緒だとすると、コピーはそう簡単に動かせるものではないという。そんな状態の魔王に会わせるわけにはいかない。

こんな話をしていると、魔物の土地の森から二匹の魔物の気配がする。しかも、よく知っている気配だ。何故こんなところに。しかも、どうして…。

身を起こし、魔物の土地側にいるルーフォンの前に出て、その気配に集中する。護るためにも、ルーフォンを背にした。

眠い目も、すっかりこの気配で覚めてしまった。

「どうした」

「シッ…」

声を出すルーフォンに、人差し指を自分の唇にあて、黙っておけとジェスチャーで表す。

今の状況が理解できず、とりあえずユンヒュが大人しく寝ていることを祈る。

なんて言っただって、何度もシレーナに向かってテレパシーを送っているというのに、一切返事が来る様子はない。むしろ、気付いているというのに、わざと反応しないかのような感覚だ。

警戒していることに気付いたルーフォンは、姿勢を低くし、寝ているシレーナを護ってくれるみたいだ。しかし、その握っている剣でシレーナを、反射的に殺さなければいいのだが。

じっと待っていると、その気配は迷うことなくこちらに向かって

きている。だからこそ余計にわからない。ついには、森のほうから草や枝を踏み、折れる音が二匹分聞こえてくる。向こうも、気配を消すつもりも隠れるつもりも、離れるつもりもないみたいだ。

森の中からゆっくりと見える影。その姿がしっかりと、月の光を浴びた時、ただでさえ反射する金髪の長髪が目立つ。その反面、片方の黒髪は、しっかりと影にはいりこんでいる。

はつきり姿かたちが認識できるくらい目の前まで来ると、時間が止まったかのように動けなかった。しかし、このままの体勢でいるわけにはいかない。

ゆっくりとしゃがみ、闘技場でルーフオンがシレーナに見せたように、左ひざを地面につけ、右ひざを立ててその上に左手を乗せ、頭を下ろす。

「その姿は…」

後ろにいたルーフオンも気づいたのだろう。

堂々とした姿と、金髪で長髪。

ユンヒュから伝えられていた魔王の側近。それに俺の体勢から、目の前にいる子供の姿をした魔物は魔王だと。気付いてしまった。剣に手を乗せ、いつでも引ける準備をしている。戦闘態勢に入ってしまった。それを横目で確認した後、再度魔王のほうを見る。すると、ため息をついて上着の中に手をつ込み、何かを取り出してきた。それは、古びた一冊の太い本だった。タイトルはうつすらとしか見えないが、『魔法と魔力』と書かれていた。

城に精神を持っていったのはいいのだが、気になる本を見つけてしまった。しかし、それをずっと城に置いておきたくないか、旅をしている最中にも読みたかったのか、本を直々に持ってきた。ということだろう。

他の者に持っていかせたくなかった。もしくは魔王の姿できちんとルーフオンを見ておきたかったか。どちらかだろう。

（いや、後者だろう）

少しあきれながらも、その本をしつかりと受け取る。すると、ちらりとシレーナの姿を目だけで見ては、もう一度こちらを向く。

「責任もってお渡しさせていただきます」

言つと、うんと縦に首を振ってゆっくりとうなずき、一歩下がっては、こちらに背をむけ森へ向かって歩き出した。

少し間をおいて、冷たい瞳をこちらに向けていたシェイルも、ゆつくりと魔王の後ろをついて行った。やはり口を開かなかったか。今口を開いたら、声質でばれると思ったのだろう。

気配が遠ざかり、気にならなくなるくらいになると、ホツと肩の力が抜け、その場に座り込んでしまう。後ろからルーフォンが近付いてきて、優しく肩に手を乗せてきた。

「今のが…魔王」

「ああ。なんか、いきなりのことではびっくりしたけど…。本当いきなりなんだもんなあ。会えてよかったね魔王に」

勇者だと気づかずに魔物の土地で暴れるために、城から出たときだつて、名目は俺に会うつもりだったみたいだし、シェイルから連絡が入った時は、驚かせるつもりだったのだろうと思った。

でもどうして今回は一切の連絡をしてこなかったのだろう。いきなりなのはいいけれど、顔を合わせてからでもテレパシーに反応してくれたっていいだろうに。それとも、何かに操られているとか…。

（それはないな。うん。きっと）

あつてほしくないという願望の元、ゆっくりと立ち上がり、シレーナの寝袋の中にその本を詰める。

そして、再度ルーフォンの方に振り向くと、ジッと魔王が消えた森のほうへ顔を向けていた。もう一度会いたいのだろうか。それとも、想像していない姿だったのだろうか。

「あれが魔王。想像とは…」

「違うだろう？」

「ああ。違いすぎる。殺意がもつとあるものだと思つてた…」

「本を渡しに來ただけだもん。無駄な争いを嫌うからね。したとしても、敵味方関係なく、理不尽な方には味方にならない」

「…どっかの誰かに似てるな」

そうため息をついて、ようやく肩の力を抜いていた。

わかつたのだろう。

魔王とシレーナが、似ているということに。

「だから魔王はシレーナを敵視しない。敵だと認識してないよ。ほらっシレーナいい加減起きください」

「ん…」

すっかり向こうに入り浸りかけてしまった魔王の本体に触れ、頬を優しく撫でてやる。タイミングが良かったのか、ゆっくりとこちらに意識が戻りかけてきていた。体温もしっかりと戻り、瞼もピクリと反応していた。

先ほどのことをフォローするかのよう、ごめんねと可愛くテレパシーを送ってくれるものだから、怒るに怒れなくなってしまった。何度かシレーナの名を呼び、しっかりと目を覚まさせる。

目を擦りながら身体を起こすシレーナは、胸元にあった本に気付き手を伸ばす。

「これ…」

「たった今魔王様がいらしまして、シレーナにそれを」

「あー。来たの…。ん？ ルーフォン起きてたのか。じゃあ魔王を見たのか？」

「…ああ。お前らは知り合いなのか？」

「知り合いというか悪友というか、親友というか」  
「は？」

## 第21話

### 旅の再開。

魔王の隠れていた無駄な器用が現れた。

でこぼこ道を歩きながら、本を読む。しかも、きちんと転びそうな石や小枝、ちよつとしたへこみなどに気をつけているところが、何かムカツとくる。たしかに、転ばれて“本体”に怪我をされては困る。だからありがたいにはありがたいだが、その器用さを利用して、なんかもつとこう、魔王の姿でありながら、シレーナの身体をきちんと動かし、しゃべって対応してくれるくらいのことをしてほしかった。

しかし、一体何を讀んでいるのだろうか。

“魔法と魔力”とか書いてあったが、魔法が苦手な魔物が読まれる本だ。相当古いし、幼いころに読んだことはあるが、本当に基礎的なものが書かれていた。手に入れようと思えば、簡単に手に入る代物だと言うのに、どうしてわざわざ魔王直々に持ってきたのだろうか。ヴィンスに持たせてくるなり、俺を呼びつけたりすればいいというのに。しかも、あんなにも真剣に読み耽っているなんて。

（おかしい）

そうとしか思えなかった。

俺の隣を歩いているルーフォンでさえ、怪訝な表情でシレーナの後ろ姿をのぞいていた。さらに後ろにいるユニヒュは、いろんな意味で不思議そうに歩いていた。

きつと、ルーフォンとユニヒュが共通して感じているのは、どうして人間であるシレーナがそんな本を讀んでいるのか。しかし、ルーフォンはもしかしたら今後魔物に対しての対策か何かを打つため

だろう。と、いい方向に考えてはくれるだろうが、ユンヒュの視線が痛い。

向けられているところが俺のほうではないのがよかったと思えるところか。

再度シレーナが持っている本を見る。何ページ残っているのか。先ほどから速いペースでページをめくっていたから、もうそろそろ終わるかなと想像していた。その想像通り、残りが数ページしかない。

「あいつ、読書家だったのか」

「いや、読書が一番嫌いだった気がするんだけど…」

呆れたようにルーフォンが口にする言葉に、嘘をつくことなくため息交じりに答えて見せた。

だろうなと言わんばかりにルーフォンがため息をつき、シレーナから視線を外した。そして向かった視線は魔物の土地の方向だった。いま俺達が歩いているのは、魔物の土地に面している部分の街から回るみたいで、歩く道も、できるだけ魔物の土地沿いを歩く。そのため、魔物に遭遇する回数が多い。が、遭遇したところでシレーナは立ち止りはするものの、手を出す様子がなかった。

その代わりと言わんばかりに、ルーフォンや俺がフォローしてはいるものの、敵の攻撃をよけることしかしなかった。最初はそんなシレーナに文句を言っただけだったが、何を言っても「あーわかった」としか言わない。興味がそちらに向かっているのだろう。しかし、あと数ページ。あと数ページ分我慢すればいい。

怒りを我慢しながらも、そつと目をつむる。

今のところ魔物の気配がしない。いや、なんだか先ほどから魔物の気配がどこからもしなくなっていた。するのはシレーナのかすかな魔物の気配のみ。もうそろそろ街に着くのだろうか。

街によっては、強い魔導師達が結界を張り、そう簡単に入らせな

いようにしている街もあるという。

ただし、技術が必要となるため、あまり普及していないのが現実だ。だからこそ、魔物の被害にあう街が多い一方だった。

実際今、俺はルーフォンの隣で歩いているところからして、結界が張られている様子がない。少しの結界でも、低級魔物である俺が反応し、歩くのがつらくなる。結界によっては、一切足を踏み入ることができない。

今後そのような結界が張られている街に行くことになったら、シレーナは俺を置いていくつもりだろうか。シレーナ。いや、魔王はそこらの結界に左右されるような低級魔物ではない。自称中級魔物とよくシレーナは笑いながら言っているが、低級魔物である俺からしてみれば、上級だろうとおもう。シェイルもそう言っていた。本を閉じる音がした。

ようやく読み終わったのだろう。足を止め、両手で本を挟んで何かを考えている。

「読み終わったのですか？」

「ああ」

「ところで、どうしてそんなものを読んでいたのです？」

「はい」

前を見たままのシレーナを、覗き込むように見ているというのに、視線は一向にこちらを向きそうになかった。手渡された本の表紙は、やはり“魔法と魔力”という魔法が苦手な魔物用の書物だった。

この本にだけ特別なことを書かれている物なのかと、適当にページを開いてみると、一瞬手が止まった。そして、後ろにいる人間二人に見られないうちに、ボタンと両手で本を閉じる。

「これ……」

二人には聞こえないような小さな声で、つい、驚いてしまう。何から聞けばいいのか分からず、シレーナのほうを見上げる。ずっとこの書物を、覚えるかのように見ていたのか。一体。

（一体…何をお考えなのです…？ 魔王）

「お主が勇者か」

あれ以降、ほぼ放心状態に近かったアマシユリに本のことは何も言わず、次の街へとたどり着いた。

街には低級魔物が寄りつきにくい結界が軽く魔術でかけられており、アマシユリはその具合の悪さに耐えかね、宿をとってベッドに横にさせた。

一人にしておくこともできず、ルーフオンとユニヒュどちらを置いておくか聞くと、どちらでもいいと言われてしまった。ユニヒュといえるのもいやだし、ルーフオンといえるのもいやだ。何かあっては困ると思う、アマシユリが許せる。もしくは、安心するような人間。もしくは魔物を仲間にしておいた方が、今後役に立つだろうと、いろいろ考えながらも、国王の元へと足を運んだ。

この街は、唯一魔物の土地と面しているというのに、一国の王が

立てられている珍しい街だ。だからこその他の街よりも人口が多いし、魔術に長けている者たちが多いらしい。

区画に分けて、魔術師や魔導師と呼ばれるものが結界を張っていて、他の魔物の土地に面した街よりは安全な街だと言う話だ。

やはり、区画によって人が違うため、結界の張り具合が違う。魔導師が行っている区画は、住宅が建ち並ぶ区画と、国王が活動する場所。魔術師が行う場所は、露店や商店街だ。なので、アマシユリは一番結界が薄い、商店街に面する宿をとった。

「はい」

「話は使いの者から聞いていたし、写真も見たが、本当に幼い。しかしあの闘技場にて優勝したとなれば、それ相応の能力はあるのだろっ」

（要は認めたくないってことかよ。まあ、闘技場もルー以外そんなに強くなかったしな）

国王とアポイントメント：アポをとっていないということで、暫く会議室のようなところで待たされた。

どんな風貌をしているのか気にはなったが、見張りみたいな男が扉の所に二人立っていたから、そんな話もできず、ただ黙々と座り続けていた。

王宮だからこその金だらけの家具や壁。

今座っている椅子だって、背もたれが長く、肘掛けなんか、肘を乗せていてもいたくならないように、クッションのきいた赤い布に金の線が入っているような柄。背もたれも、赤と金で“龍”をイメージさせられるような図柄だ。

金がチ力チ力する。

王宮に入ってから感想は、そればかりだった。

しかも、王宮だからこそ魔術で張られた対魔物の結界は、結構身体にくる。

低級魔物ではないと言い切れるが、そんなに上級な魔物でもない俺にとつて、結構な体力の消耗だ。そんな中で数十分も待たされた拳句、いきなり“幼い”なんて言われたら腹も立つ。

「剣術はそんなに得意ではありませんが、ルーフオンがそれらを補ってくれます」

「では、魔術ではその魔導師が？ それじゃあ君が勇者よりも、周りの仲間が勇者つばいのじゃ意味がないのでは」

ハッハッハッと、わざとらしい笑いを口にしていた。

そう。別にそれでいい。弱い勇者で全然問題ない。最初の印象は、それくらいで十分だ。

「はい。体術には長けている自信はあるものの、それだけでは到底魔王にはかえません。なので、魔物を集中的に狙うのは最初から考えてもいません」

「…ほお。じゃあ何のための勇者だ？ 我らは魔王を討伐していただきたいのだが」

「ではお聞きますが、魔王を討伐したとしても、魔物の全てが抹消するわけではない」

「わかっておる」

体格のいいおっさん風な国王は、野太い声でそう返事をしてくれる。イライラしている様子から、そんなこと遠の昔に知っておるわ。と言わんばかりの口調だった。

「魔王を倒したところで、別の魔物が魔王となるだけ。イタチゴツ

コです。ならば、魔王と同盟を結び、争いを徐々に失くしていく方が確実かと」

「バカバカしい。魔王と同盟を結ぶことなんか無理にきまっとろうが」

「それは誰かが行った現実でしょうか？」

「行わなくとも目に見えておる」

「目に見えていたとしても、行って失敗した事例がない。行おうともしなかった。違いますか？」

最初は城の皆が言う“魔王らしく”を実現するため、各地を回って有力者を潰しにかかるうと思っていた。

嘘ではない。ただし、闘技場でルーフオンと戦った際に行われた、一国の王が魔物と手を組み、無意味な殺戮を楽しもうと思っていた姿を見てわかった。

人間だって、殺しを楽しもうとしている。

なのに、魔物を悪い者扱いしているのは、どうも腑に落ちなかった。

子供みたいな反論に、所詮子供と呆れた様子を見せる。しかし、この一室の外から人が走ってくる音がした。相当急いでいる様子で確実に近づいてきていた。何事かといひ扉の方に目を向けると、重い扉にノックが入る。

扉の前に立っていた男二人のうち片方が、扉を開け、何事かと話を聞いていた。

何を伝えているのかまではわからないが、聞いた一人が驚いた様子を見せ、怪訝そうな表情をしている国王の元へと寄り、耳元で何かをささやく。きつと、こちらに聞こえないようにという意味なのだろうが、その頑張りには馬鹿な国王によって意味を失くした。

「なんだと！ 魔物が忍びこんでいると！」

その言葉に、ルーフォンと俺が反応する。ユンヒュはユンヒュで眉間にしわを寄せ、何かを考えているようだった。

何を考えているのかと不思議には思ったものの、今それに触れることはできない。

「忍びこんでいるというのは王宮に…でしょうか？」

口を開いたのは俺だ。

魔物が何処に忍び込んだのが気になる。忍びこむと言うのだから、王宮に。というのが一番最初に頭に浮かびあがった。

「いえ…。この街のどこかに…」

扉の近くに待機していた、ノックをした最初の報告者が、申し訳なさそうに口にした。

この街のどこかに。つまり、アマシユリか俺の可能性が高い。もしくは他に魔物が現れたか。どちらかといえば、後者の方があるがたいのだが。

「その区画の防衛長を呼んで来い！」

「はっ」

乱暴に国王は命令し、報告者はすぐにその場を離れた。

できれば俺も離れたかった。もうそろそろこの結界内にいるのは限界に近いし、アマシユリのことにも気になる。確かに、どの付近で魔物が現れた様子なのかを知りたいのは本音。でも、無理をする必要はない。

葛藤しながらも、その場に立ち止まったまま口を開く。

「ユニヒュ。魔術で作成した結界は、魔物が侵入したか分かるものか？」

「いえ。壊された場合は気付きますが、侵入した場合には気づかぬ」「じゃあ、どうして魔物が入ったことがわかった？」

「それを先ほどから考えておるのじゃ。しかしわからん。魔法で作りに上げた結界やバリアの場合は、わかるという話も聞いたことがあるが魔術でとなると……。最初に見せた拘束魔術にしても、捕まえたという感覚がわかるわけではない。実際に拘束されているものを見て、あれは魔物だとわかるのであって」

ユニヒュがどれだけの魔導師なのかまではわからないが、最初に見せた拘束魔術を持ってしても、魔物だと言うことが感じられないのだろう。

何せ、魔術は身から発しているものではない。魔力で作り上げられた魔法というのは、手を伸ばして触れたものが分かるような感覚と同じだが、言葉で作りに上げられた魔術は、口から息を吐いて、その先にある物に当たったかどうかは、身体では分からない。

それと同じ原理なのだろう。

ではどうして今の報告者はわかったのか。

ぶつくさとか何を言っている国王の近くで、ただ黙って考え込んでいた。

そう待たずと、国王が呼んだその地区の防衛長と呼ばれる者が現れた。その瞬間、この謎がようやく解けた気がした。

「国王。申し訳ございません、魔物が侵入してしまったようです。兵を総動員し、探し出しております」

「どこにおるのかからんのか！」

「申し訳ございません。そこまでは……」

口ごもるその男は、冷たい男に見られがちな細い目。その中には赤い瞳が見え隠れしていた。髪の毛は長くはなく、動くのに邪魔にならない程度の長さ。前のほうは耳のかけ、後ろ髪はそのまま後ろに流すように、整えられていた。

細い身体に、身長は高いスマートフォンよりも、若干高めに見える。パツと見たところでは、普通の人間にしか見えない。しかし、この男は紛れもなく俺やアマシユリと同じ、魔物だ。

つまり、魔術ではなく魔法で一画を護っていたということか。

人間と魔物が同盟を組めるわけがないという国王が、大事な街の一画でも、防衛長という名を魔物に与える者なのだろうか。もしそうだとすれば、もう少し話に積極的だった気もするのだが。

しかし、この魔物は人間の姿に化けている。それくらいはわかる。低級魔物に気づかれなくらいの能力しかなさそうだ。

「すぐに見つけ出し殺してしまえ！ 魔物は一匹たりとも許すな！」  
「御意」

魔物である以上、この場にいるのは辛いだろう。その命令を待っていたかのように返事をし、すぐにその場を離れようとしていた。見ているだけなんてできず、つい身体が動いてしまう。

「私たちも行くぞ。黙って見ておれん」  
「ああ」

黙って見ていたスマートフォンもようやく口を開き、その防衛長を追い、その一室を出て行った。

小走りに進む防衛長は迷うことなく廊下を進み、王宮を出ようとする。しかし、出る前に話しておきたいことがある。後ろにいるスマートフォンに、少し距離を置いて歩いてくれと伝え、すぐに防衛長の右斜め後ろを確保する。

そして、その者にしか聞こえない声でソツと呟く。

「あんなに魔物嫌いな国王が所属する防衛団にどうして。しかも長だなんて大したものだな。魔物の割には」

そう言った瞬間、その男の足が止まった。

ゆっくりとこちらを見るなり、何者だと言わんばかりに睨みつけられる。

にっこりとほほ笑んだ顔はなかなか解けず、ただじつとその男を見つめ続けた。

少しの間、空気の流れが止まった気がした。しかし、このまま立ち止まっているのには、身に危険が感じられる。

「ほらっ早く魔物を探しに行くよ」

先を歩きだしたのは俺だった。その後ろから視線を感じながらも、しっかりとその場から離れる。

## 第22話

王宮を出ると、ようやく隣を走っていた防衛長が口を開いた。  
結界から解かれ、身体力が少し抜けたのだろう。

「貴様何者だ」

「勇者だけど？ でも、別に魔物が嫌いとかじゃねえから安心しろよ」

「…勇者だと…」

そうだよというように、につこりとほほ笑んでやる。

どうしてこの魔物がこの土地にいるのかが気になる。そして、どうして防衛長なんかに。

しかし、ルーフォンやユンヒュがいる中、そんな話をするわけにはいかず、後ろを振り向きルーフォンを見る。来いという命令に氣付いたのか、ため息をつきながら近寄ってくる。

「どうした」

「悪い。ユンヒュと一緒にあいつ（アマシュリ）のところに…。一人じゃかわいそうだ」

「…わかった」

何かが気に食わない様子だった。しかし、何かの意図に気づいてくれたのだろう。ルーフォンは文句を言うユンヒュを引きずる様に、この場から離れて行った。

俺が魔物だと気づいていれば、考え込ませることはないのだろう

が、今はアマシユリが魔物だと言うことを受け入れてくれただけで十分だ。

心の中でルーフォンに礼を言ったのち、再度防衛長のほうへと向きなおした。

「どうして防衛団の中に？」

「関係ないだろう」

「あるよ。先ほどの王宮内には強い魔術で結界を張られている様子がある。その中に、堂々と立っていられた姿が勇ましく思えてね。しかも、国王は君の本来の姿に気づいていないとなれば、気になるもんさ」

「その辺の低級魔物と一緒にされては困る」

「一緒にはしてない。名は？ 俺はシレーナ」

「キーツ」

さっきから一方にこちらの質問に答える様子がない。

元々短気気味な俺にとっては、今ここで怒りだしたっていいところだというのに、必死に心の奥底で暴れようとする何かを抑える。

とりあえず、国王の命令で動かなければならないということを思い出し、考えもしていない道を歩き出す。

「で？ どうしてこの街に滞在している？ 思い入れがあるのか？」

「別に。ここを護りたいわけでもないしな」

「へえ。でも、必死に護ってやってるじゃねえか。長にまでなつて危険を承知で魔法を使用しているんだろう？ しかも、四六時中」

「必死ってわけでもない。実際さっさとこんなところから出たいんだ」

「じゃあなんでやってるんだよ」

言ってることとやっていることが一致しない。

何を考えているのか分からないこの男。キーツに、つつい首をかしげてしまう。

実際、周りから見たら「魔王が勇者に？」というのも、十分わけがわからないのだろうが。

「なぜ勇者にそんなことを伝えなければならない」

「まあ、そういう答えが普通か」

考えてみれば、街を破壊するためとか、国王を殺すため。とか言う理由を勇者に伝えたとしても、邪魔をされてしまうのはわかりきっていることだった。

勇者という実感がいまだにつかみ切れていないからこそ、そこまですべてが働いてはいなかった。

「じゃあお前はなぜ勇者になった」

キーツから口を開いたかと思えば、足を止め、きちんとこちらに向きあってくる。

魔物探しをしなくていいのだろうか？ 先ほどから話しかけてしまっていて、言える立場ではないものの、キーツから話しかけられたらかけられたで、疑問になってしまう。

「なぜ…か。気に食わなかったから」

「は？」

「気に食わなかったんだよ。この世の中が。魔王を討伐するよりも、国王をどうにかしなきゃと思ってね。だって、魔王を倒せって言う話だけど、魔王を倒したところで次の魔王が現れたら、またその魔王も倒さなきゃいけないんだろう？ 命がいくつあってもたりやしない。そんなこと続ける意味もない。だったら、魔王と国王が同盟を組めばいいんじゃないかって。お互い干渉せず、仲良くやってい

きましようって」

「話し合いか。甘いな」

「知ってる。でも、やってみないとどうにもならないだろう？ お前も来る？ キーツ」

「で。どうしてこんなことになってるんですか？」  
「いや、なっちゃったものは仕方がないんだって」

とりあえず、アマシユリの元へと戻ることにした俺は、その帰路怒られない言い訳を必死に考えた。が、あまり考えることに長けているわけでもない為、素直に説明した方が手っ取り早いと解決させ、キーツの話をした。

魔物だと言うことを伝えた際に、ユンヒュは相当驚いていた。ルイフォンも、気付かなかったと。面倒な相手かとは思っていたが、まさか……。と驚きを見せていた。

ルーフオンとユンヒュだけで宿に戻ってきたとき、アマシユリはいやな予感だけはしていたと、冷静に言われてしまった。

そのあと、成り行き上一緒に旅することになったと伝えると、驚きよりも、ユンヒュ以外は諦めモードに入ってしまった。ユンヒュはユンヒュで、もちろん最後まで文句を言い続けていた。

身体がだいぶん結界に慣れてきたアマシユリは、ある程度は自由に身体を動かせるようになってきていた。そして、二人つきりになり話したいことがあると言われたものだから、アマシユリと二人で買い物という名目で外に出た。

「なっちゃったものはって…。だって話の流れからして、キーツと一緒に来るって言うてきた理由が分からないんですって」  
「ノリで誘ったら」

『それもいいかもしれないな』

「って」

「勇者がどうのって言われたんですよね？」

「言われた」

「なのに…。まあ、そこは僕が言えた事じゃないですけど」

なのに魔物として勇者についてこようとするのか。と、言いたかったのだらう。

こういう会話は、出来ればテレパシーで通じあいたかったのだが、残念ながらテレパシーを使うほどの元気がなかったため、外に連れ出すことしかできなかった。

でも、確かに勇者がどうのって言うてた割に、誘った後の返事に抵抗が見当たらなかった。

実際、防衛長なんて良い地位にいたら、それ相応の金額が手に入っているだらう。しかし、勇者は別に営利的なものが発生しない。

要はボランティア団体に近いくらいだ。しかし、諸経費は税金で賄われているというのも現実。損は少ないだろうが、賭けるものが大きすぎる。

「それより」

「ん？」

「城から持つてこさせたあの本は…。どこにあったのです？ なにを…何を企んでいるのですか？」

「企む？ ひどい言いがかりだな。自衛のためだよ。今後このメンツで進んだところで、大きい壁があるかもしれないだろう？ 予備だよ」

「しかし、あれは…」

「無理じゃないよ。ただ、発動させるには相応の魔力が必要なんだ。発動できる魔物がそういなかったからだと思うよ…」

「しかし…」

「こんなにもアマシユリが“あの本”で突っ込んでくるとは思わなかった。」

“あの本”に書かれていたことは、相当な魔力と技術、精神力が必要となっているものだろう。魔物で使用する者を見たことがないいや、実際はそのようなものなら一度見ている。

本当に“それ”だったのかは定かではないが、それに近いものを父が。亡くなった父が発動させていた。あの父でも、発動後は相当の疲労が見られた。それでもかっこいいと思い、恐ろしくも思えた。

その日の夜、魔物を見つけることができなかった旨を国王に伝え、その場で防衛団を抜けてきた。

いろいろな面倒な書類だったり、無駄な引継ぎ等があつて、なかなかすぐには出てこれなかったみたいだが、他の魔導師により再度その区画の結界は張られ、疲れた様子でキーツは帰ってきた。しかし、

その疲れた様子のまま、出かけるところがあるといい、またすぐに  
出てしまった。

一体どこに寄るところがあるのだろうか、尾行したいのは山々  
だが、必死にその感情を抑え、眠りに就こうとした。

しかし、その睡眠はテレパシーにより、目覚めさせられる羽目と  
なった。

## 第23話

「なんだってんだよ」

「なんでも、魔王に直接お伝えしたいことがあるとのこと。敵意が見られなかったので、離れに待たせております」

起こしてきたのは、シェイルのテレパシーだった。

なんでも、一匹の上級魔物が魔王にお話があると言い、代わりにシェイルが聞こうとしても、一切その内容を伝えようとしなかったようだ。重大な話なのだろうとみなし、離れにある棟に待たせ、テレパシーを送ってきたとのことだった。

シェイルが他の魔物を通すというのも珍しく、いい話が悪い話か。いったいどんな話なのか、いろいろ考えながらも、その棟へと足を運んだ。

国王のところのように立派とは言えないが、この城の敷地内には、いろいろな所に会議室を設けている。特別使うことはないが、警備の魔物たちが相談したり、会議を行ったりする際に使用しているとのことだった。

連れられるままたどりついた先は、門の近くにある棟の2階に位置する会議室だった。

謎な緊張感が胸を走る中、シェイルは何も気にせず扉をあけた。先に中に入ったのはシェイルだった。後ろから護衛という名目でヴィンスが立っていたが、かなり警戒をしている様子だった。

そんなに危険な男ならば、中に入れないればいいのと思いが

ら、シェイルの後ろから男の姿を見つけた。

(こいつ…)

目の前にいるのは、サラサラな短い髪に、前髪を後ろに持っていてようにし、頭の上で2、3個の黒ピンで止めていた。年齢は、シェイルよりも下くらい。身長はシェイルよりもありそうだが、顔つきが少し幼めだった。オレンジ色のその髪に、瞳は赤色と、滅多に見かけない色合いだった。

しかし、この雰囲気は俺は知っている。この気配は…。

テーブル越しにある椅子に座れるようにセッティングはされているものの、まず先に要件を聞くため立ったまま見つめた。

すると、その男も立ち上がり、俺の5歩くらい前ににしゃがみ、右膝を立て、膝上に左手首を乗せ、首を下す。よくシェイルやヴィンスがやる体勢だ。

「魔王様。お会いできて光栄です」

「要件は？」

「はい。わたくしキーツ。勇者との接触に成功しました。よって、今後の勇者の行動を、逐一報告させていただきたいと思います。勝手な行動かとは思いますが、魔王様のお役に立てたらと思い、参上いたしました」

「本当勝手だな。しかし、それもまたおもしろい」

キーツ。やはりそうだったか。

この姿が魔物としての姿なのだろう。目立つ特徴を消し去り、見た目の印象を変えることで、魔物からばれないようにしていたのだろう。

シェイルの様子からして、何かを命令したわけでもなさそうだ。

しかし、これでキーツが来るたび、こちらに精神を動かさなければならぬということだ。少々手間となるが、こちらとの内通者がいるという現実も楽しそうだ。実際、それを何かの役に立てればいいものだ。

「ありがとうございます」

「しかし、始末はするな。あれは俺がやる。そうだな。いい方向に進みそうだったら、何か褒美をやらないとな。何がいい」

「恐れ入ります。私の目的は魔王の座」

「…ほお」

一瞬その言葉にシェイルが反応し、戦闘態勢に入ってしまったが、腕の前にやって制止させる。

止めるなど言わんばかりにこちらを睨まれたが、あえて気付かないふりでキーツのほうを、楽しそうな表情で見つめ続ける。

「しかし、それは勇者とのすべての決着が着き次第。魔王様とお手合わせ願いたいのです」

「もしお主…キーツが勝てば魔王の座と」

「はい」

「まあ、我を殺せたらな別にかまいはせぬ。しかし、その場合はこちらも、本気で行かさせていただくが？」

「ありがたきお言葉恐縮です」

コピーをシェイルに任せた後、すぐに本体のほうに精神を戻した。今回はアマシユリに何も言わずに精神を転送させてしまったから、怒っているかと思ったが、特別気付いた様子もなく眠っていた。

キーツもまだ戻っていないようで、シーンとした空気の中、ただひとり身を起す。

月光が部屋に入り込み、ルーフォンやユンヒュの姿が目に入る。すぐ隣で寝ているアマシユリまでも、既にルーフォンに警戒することなく眠りに入ってしまったている。

最初のころは、ルーフォンに警戒する様子を見せていたアマシユリだが、今はもうだいぶん慣れてきたようだ。しかし、慣れてきたところにユンヒュと出会ってしまった、次はユンヒュを警戒する。しかし、ルーフォンはルーフォンで、ユンヒュよりキーツを気にしている節が、ところどころ見られた。

やはり魔物だからだろうか。しかし、今回はアマシユリのように警戒しなくていい相手。というわけにもいかない。そうルーフォンに伝えたいのは山々だが、今は言うことができない。なぜならキーツと魔王が手を組んでいるのは、シェイルとヴィンスしか知らないから。アマシユリにも言っていない。

しかしそれは言うべきだろ。アマシユリがキーツを警戒していてほしいから。

（あ、やばい。忘れてた）

コピーに精神をゆだねていた際に、一つだけ忘れていたことがあった。

むやみにしゃべりすぎたことだ。

声を変えることなく話してしまったせいで、声がばれなければいいのだが。

アマシユリがではなく、俺がキーツに細心の注意を払って、警戒し続けなければならなかった。

（でも、俺を殺す…か。魔王の座を手に入れてどうするつもりなんだか）

## 第24話

再度眠り、目が覚めたところにはキーツが戻っていた。そのほかにもルーフォンはすでに旅の準備ができているようだし、ユンヒュだつて、少し眠そうだが活動準備に入っていた。

自然と目が覚めたのは、隣にいるアマシユリが俺を起こせるほど元気がないからだろう。

結界の中に居続けるには、相当体力が消耗する。寝ていたから回復はしているものの、やはり今までのようにはいかないみたいだ。

ルーフォンにアマシユリを運んでもらい、宿を後にした。この街ともいったんおさらばするため、次の街へと歩き出した。

地図上であれば、次は農村地区。村である。

街を出た瞬間、アマシユリはようやく身にまとっていた結界から解き放たれ、自由に動けるようになったようで、ルーフォンの腕から離れていた。

「次ここへ？　ここは噂ですが、魔物が行き来できる村だということです。この付近の魔物はそんなに凶悪ではないですし、結構協力的だとのことですよ」

「へえ。じゃあ、アマシユリが行っても問題なさそう？」

「まあそうですね」

魔物を隔てていない村。

村だからこそできることなのだろうか。

それから数日、その村に向かって歩いていった。しかし、眠りに着くころ、キーツはどこかに出かけてしまう。ルーフォンが不審に思っているものの、止める様子はなかった。

あれ以降、キーツからの報告はシェイルに直接伝えるようにしておいた。だからこそ、逐一向こうに精神を飛ばす必要はない。何かあったらこちらにシェイルからテレパシーが入るが、ただ今どのへんだとか、仲間の奴らがどうのとか。そういう話ばかりだった。

森を歩き続けると、人が住んでいそうな気配が徐々に近づいてきた。

森から出ると、田んぼや畑が広がっている。ところどころに古びた建物がある。人が住んでいそうな建物は、少し丈夫そうにはできているものの、今まで来ていた街よりは、丈夫さに欠けているところがある。

ところどころでは、人間が外に出て、動いている様子が見られる。木々に囲まれた村。魔物が襲うには絶好の土地だろう。

しばらく歩いていると、遠くのほうにはまた違った建物が並んでいた。中心部なのだろう。人の気配が強くなってくる。

今はまだこの村で魔物を見かけはしない。

「魔物も、そんないないのか」

「別に害がなければ魔物も襲いはしないからな」

キーツはため息交じりにそうつぶやいた。

今のところ、キーツはまだ声には気づいていない。場所も場所でも人間であり勇者という立場を見ると、先入観でそれはないだろう省いてしまっているのだろう。実際俺でもそうしてしまう。

「ふうん」

「うわっ」

前に向き直った瞬間、再度後ろから驚いたユンヒュの声がし、俺とアマシユリ、キーツは振り向いてしまう。

そこには、ユンヒュにぶつかり、転んでしまった子供の姿があった。

両手ではないと、その子供では持てないだろう大きさの籠だった。それを持って走ってしまい、気づかないでぶつかってしまったのだろう。

尻もちをつくように後ろに座り込んでしまった子供の前に立ち、ゆっくりとしゃがんで顔を覗き込む。

「平気か」

手を出し、起き上がらせようとした瞬間、子供の顔が上がった。

つい、ぴたりと体を止めてしまう。

その姿はまた珍しいものだった。

黒い髪に小さい手。小さい体は人間の子供そのものだった。気配も、人間のおいだ。しかし、顔は小さい唇に小さい鼻。そこも子供と同じようなものだ。しかし、片方は黒い瞳もう片方。左目が赤い瞳。

話に聞いたことがある。両目が同じ色ではない者は、人間と魔物の間に生れし子供。

人間と魔物が混じること自体が貴重であるため、その子供。半魔ハーフ自体が貴重な存在となってしまう、謎が多いため恐れられる存在だと。

目の前にいる子供は、魔物と人間の子なのだろう。

確かに、この村は魔物も生息しているという話だ。あってもおかしくはない現象だろう。

一人納得し、ポカンとしている子供にそつと微笑んでやる。

「どうした？ 足を痛めたか？ 立てそうもないなら背負うから腕を」

「だ、だいじょうぶ」

差し出した手をつかみ、グイツと引つ張って立ち上がらせる。

膝などに傷はないようだ。

付いた埃を軽く叩いて落としてやり、ばら撒いてしまった籠の中身を拾い集めてやる。

「ハーフとは珍しいな。貴重な体験をした。赤と黒とは、これまたきれいな色を手に入れたな」

そう微笑み、ぐしゃぐしゃっとその子供の頭を撫でまわしてやる。口にした瞬間、失敗したなとすぐに後悔。

人間の間では、黒と赤が交じる色は不吉な色とされてきているのだ。反面魔物の中では、赤と黒が混じる色は、綺麗だと絶賛される色。綺麗に分かれてしまっているからこそ、ここで“きれい”というのはまずってしまったようだ。

「あ、ありがと。僕も気に入ってる」

返答について考えてしまう。

つまり、そういう感性は魔物よりとなっているのだろう。今まで見たことがないからこそ、いろいろ観察したくなってきた。

「お前名は？ 俺はシレーナだ」

「メツシュ。よろしく勇者様。でも、僕が怖くない…？ 勇者様は魔王を倒すんでしょ？ 僕は…邪魔じゃない？」

「お前は。メツシュは何か人間に対して攻撃したのか？ 敵だと思っっているのか？」

「うっん！ この人たちは好き。ハーフの僕がいるのを許してくれているから。だから、護りたい」

「だったらいいんじゃない？ 無意味な争いが嫌いなだけであって、別に魔物が嫌いなわけではない」

「…うん！」

嬉しそうに微笑むメッシュが、あまりにも可愛かった。

楽しそうに話しながらも、家に招待してくれた。丁度泊まるところを考えていたからこそ、この者に会えば宿を教えてもらおうと思っていた。

連れてこられたのは、ここから中心部に向けてある道の間地点に位置する、一軒家だった。

中に入ると、母なのだろう女性が、台所の方に立っていた。丁度振り向くと、少し驚いた様子で手を止めてしまっていた。

「お母さん。勇者様だよ！」

「あ、あらあら。ごめんなさいね。どうぞ座ってくださいな」

少しだけ焦っている様子の母は、何かを隠すようにソワソワしていた。

他の部屋への空けていた扉を閉めて、コップを人数分だし、何かを準備していた。

その空いていた扉の向こうに、何者かの気配がする。しかも、魔物の。今の状況を考えると、そこにいるのはきっとメッシュの父。それを必死に隠しているだなんて、今まで相当周りの街から文句や非難を浴びているのだろう。

「すみません。お構いなく。宿を…。この付近で宿がないかお聞きしたかったのですが」

「や、宿ね。中心部に行ったらあるとおもいますよ。なんせ、ここ

らの人は宿とか使わないものですから、あいまいですが…」  
「いえ。では中心部に向かってみます」

長居しては迷惑だろうと、椅子に座ることなく、その場から離れようとした時、メツシュが俺の手をつかむ。

何かと、玄関の戸に向けていた体を戻し、きちんとメツシュに向かいあう。

「ん？」

「勇者様。もしよければ今日はここに泊っていくといいよ。…いいよね？ お母さん」

「こらメツシュ、ここは大層なものを出してやれるわけじゃないんだ。失礼に値するでしょ？ その手を離しなさい」

「やつぱり…駄目かな？」

「んー…。まあ、僕たちはありがたいんですが…」

黙っていたアマシユリが、頬を掻きながら、ちらりと魔物の気配がする部屋のほうを見ながら口を開いた。

アマシユリもさすがに気付いていたのだろう。気配からすると、そんなに強い魔物ではない。柔らかい雰囲気だからこそ、そんなに警戒していない。

「その部屋にいるのはメツシュのお父さん？」

「あ…うん」

「僕たちは全然気にしないんだけど、お母さんが隠したがってるしね」

「隠してるってなにをじゃ？」

全くわかっていない様子のユンヒュが、アマシユリの言葉に口をはさむ。

ルーフオンはメツシュに会った瞬間、母が人間であれば、父は魔物だと言うことに気づき、隠しているということに気づかなくても、今の雰囲気を読み取れてはいる様子だ。だからこそ、呆れたようなため息を出したのだろう。ルーフオンに関しては、特別説明をしてやらなくてもわかってくれるからありがたい。

それに対し、ユンヒュは本当にそういうところは鈍感にできている。

鈍感すぎて笑えてきてしまい、ため息交じりに口を開く。

「本当にお前は面倒だな。メツシュがハーフだったら、父か母は魔物だろう？ 綺麗なお母様が人間だったら、父は魔物ってこと」

「なっ！ 魔物だと！」

「今頃かよ……」

黙って聞いていることができなかったのだろう。ルーフオンは本格的にユンヒュが鈍感すぎると言うことに、ため息交じりにそう呟いた。

実際、ユンヒュよりもルーフオンが魔物といるのが苦となるはずなのに、今こうして平常心でいる。ということは、アマシユリのおかげで、害のない魔物にはあまり反応しないようになってきたのだろう。

扉の向こうに隠れている魔物だって、子供を作っていて、それで何よりこの女性を愛しているということだ。人間に手を出そうだななんて思っていないだろう。

「っていつか来る前に、魔物が出入りできる村だって噂があるよっていつてありましたよね？」

「しかし、こんな堂々と人間と接点を持っているだなんて！」

『それがなに』

ルーフオンとアマシユリが声を合わせて、もう面倒くさいと言わんばかりにため息をついた。

ユンヒュのことはルーフオンとアマシユリに任せ、俺は再度メツシユのほうに向きなおる。

「あの変な男は気にしないで。無意味に手を出すようだったら黙らせるから安心して。それより、ここまで来たらメツシユのお父さんに会ってみたいな」

「だめ…かな？ お母さん」

メツシユも、頼み込むように、上目づかいに母を見つめていた。頭のいい子だ。子供は上目づかいで大人に言いよれば、基本的に大人は崩れてしまう。それをしつかりと心得ているようだ。反面母は、ユンヒュのことがあつたせいで、結構警戒しているようだ。俺たちが何かしないか。勇者というだけで、魔物と隔たりを持たなければいけないのだろうか。

それだったら、最初から一緒にいるアマシユリ自体文句を言われしてしまう。

「ちょっとまっててね」

いろいろ考えた末、お母さんはメツシユをその場に残し、隠れている部屋のほうへと入って行つた。暫くすると、お母さんは再度戻つてきて、ゆつくりと奥の方から人影のようなものが浮かび上がった。

扉から出てきたのは、その辺にいそうな魔物だった。見た目は人間だが、気配が魔物そのものだった。

「はじめまして。メツシユの父、ルインです」

「はじめまして。勇者のシレーナです」



## 第25話

あれから自己紹介や、世間話、泊らせていただくことになった旨を伝えた。

一応キーツとアマシユリが魔物だと言うことは言わずにいる。知らないなら知らないままのほうが良いだろうし、ユンヒュが魔物に抵抗があると言うことは一切気にしないよう伝えておいた。

そのあと、夜になるまでメツシュが相手をしてくれた。

というより、相手をしたのは俺たちのほうだろう。外に出ては、いろいろなものを教えてくれる。その際に、俺を見た人たちは、家の中に何かを隠しているかのように、一瞬身体がびくついていた。つまり、その人の家には魔物が住んでいるということなのだろう。今のところ外に勇者である俺がいてしまっている所為か、魔物が堂々と外にいる様子はない。しかし、魔物の土地に面する森のほうから、いやな気配がする。

先ほどからは魔物気配が出たり入ったりしている気はしていた。襟首につけていた勇者の証たるバッチをいったん外し、内ポケットにつけなおす。勇者がいるからと、下手に魔物に襲われても面倒が起きるだけ。

アマシユリは家の中でお母さんの手伝いをしていた。一方キーツは、ところどころにある大きな石の一つに座り、ただボーっと空を見上げていた。ルーフオンは、メツシュの家の玄関すぐ横の壁に寄りかかり、腕を組んでただじっとしていた。ユンヒュはというと、ルーフオンの隣に座り、何か気に食わなさそうな表情を見せていた。ルーフオンはまだこのいやな気配に気づいている様子がない。

早めに知っておけば、ルーフオンが対処してくれるだろうと、一旦メツシュとともにそちらに向かった。

「どうした？」

「ルーフォン。森のほうから嫌な気配がする」

「敵意は？」

「あるねきつと」

「そんな！　ここに来る魔物はそんなことない… ないはずなのに」

メッシュは少しさびしそうに顔を下げてしまう。

優しく頭をなでながら、家の中へとはいっていく。魔物だと言うことは打ち明けていないようだが、アマシユリとルインは何か楽しそうに話しこんでいた。その時に少しだけ不安そうな顔を見せたメッシュに、ルインは駆け寄ってきた。

「森から嫌な気配がします。ここは魔物と友好関係にあるというのは知っていますが、一応メッシュを家の中に…」

気配はだんだん近づいてきている。しかも、何かに気付いているかのように、確実にこちらに向かってきている。

メッシュの背を押し家の中に入れた瞬間、その気配はすぐ後ろまで来ていた。すぐに振り向くと、剣を振り上げた魔物が外に立っていた。

いきなりのことにメッシュの母が叫んでしまう。

ルインはメッシュの腕を引き、家の中に入れてやると、母とメッシュをルインが隠れていた部屋へと押しやる。その姿を見られないためにも、すぐに扉を閉めて、鍵を閉めてやる。

扉の向こう側では、ルーフォンが対峙しているようだ。下手に手を出させないためにも、窓かどこから出ようと部屋を見回す。

「くらメッシュー！」

ルインの制止を聞かず、駆け寄ってきたメツシュは俺の腕を引く張って裏の方へと連れて行ってくれる。

「どうなってるの？ どうして魔物が襲ってくるの!？」

パニックに陥っている様子ではあるが、行動はしっかりと落ち着いていた。

「わからない。一応今話を聞いてみる。もしかしたら、俺たちがいるのが気に食わないのかもしれない。もしそうなら今晚中に、この村を出ることを伝えてみるよ。それでも無理なら追い払ってみる」

「こっ」

メツシュは俺の話を聞いているのかはわからないが、台所の横を通り、二個くらい扉を開けると、その先には勝手口のような扉があった。

そこを開き、メツシュは先に外に出してしまう。すると、待ち伏せしていたように別の魔物が剣をメツシュに向かって振り上げていた。恐ろしさにメツシュはその魔物を見つめたまま立ち止まってしまう。

上からかぶさるように、俺はメツシュを抱きしめて前へと身を跳ばした。

勢いで二回転ほど地面を転がり、身を起こす。すると、その魔物の振り上げた両腕には、アマシュリが拘束魔法で食い止めていた。

「アマシュリ！」

「シレーナ無事ですか？」

「ああ。メツシュは平気か？」

「う、うん」

腕に抱きしめていたメツシュを少し離し、顔を覗き込むと、うんと少し怖がつている様子を見せながらも頷いた。  
できればメツシュは家の中にいてほしかった。子供に怖いところを見せたくはない。俺が昔、父を失った時のような悲劇を味わってほしくないから。

「ほお。そのガキがハーフの子供か」

別の魔物がこちらに向かって走ってきていた。

目的は勇者である俺ではない。ハーフであるメツシュに向かって  
いるようだ。

「狙いはこの子か」

目で確認できる魔物で約6匹。実際にはもう少しいるのだろう。  
少しだけこちらが不利だろうかと思いつながら、向かってきた魔物から身軽に避け、しっかりとメツシュを抱きしめながら、適度な距離を置く。

メツシュが魔法を使えるのであれば、何か使ってほしい気持ちは  
いっぱいだったのだが、そうもいつてられない。人間の手により  
育てられてしまっているのだから、魔法の使用方法は父が教えてい  
ない限り、使用はできないだろう。

対処を考えながら敵の攻撃を避けていると、裏口が勢いよくあき、  
こちらを狙ってきている魔物に向かって魔法弾が撃ち込まれる。

ルインだ。

しかし、ルインが来てしまえば母は誰が護つてやると言うのだろ  
うか。

「私の息子に手を出すことは許さないぞ！」

「貴様かこのガキの親は」

「なぜこの土地に来た。争いをしたいのであれば、他へ行け！」

「他にはハーフの子がいないだろうが。いろいろ実験してみたいものでな」

「許さん」

魔物の標的はメツシュからルインに移り、荒々しく戦闘に入ってしまった。

魔術でカバーしてやりながらも、他の魔物からの攻撃を避ける。すると、腕の中でメツシュが小さくつぶやく。

「僕の所為だ…。ごめんなさい」

「メツシュ、お前は何もしていないだろう？　なのに謝るのはおかしい。悪いのは今襲ってきている魔物だ」

「勇者様…」

できるだけこちらにおびき寄せるように、ルインが相手をしている魔物にも、少々攻撃を与えてやる。しかし、あまり派手に攻撃できない理由があった。

暴れてしまうと、農作物に被害があるから。という理由ではない。よそ者の俺たちが、友好関係を持っている村に奇襲があったからといって、魔物と対峙していいのかが分からなかったから。それで崩れたとしても、責任を持つことはできない。

徐々にこちらを気にし出している様子を受け、ゆっくりとルーフオンの表側へとおびき寄せる。

ルーフオンもわかっているのか、派手な攻撃はせず、防御を主としているようだった。ユンヒュは、ルーフオンに命令されたのか、拘束魔術を使つて一匹一匹確実に動きを止めている。

「うわああっ！」

ルーフォンのほうに集中していた間に、ルインが叫び出した。振り向くと、腕を切られたのか、自分でつかんでいる腕から、止まりそうもない血の量が流れていた。

「父さん！」

その姿を見てしまったメツシュは、俺の腕から離れてしまい、ルインのほうへと走り出してしまった。

バカと叫んだが、こちらを振り向くことすらしようしない。それに気付いた魔物たちは、一斉にメツシュのほうへと足を運ばせていた。

数匹はアマシュリが気付いて拘束魔法で動きは止めたものの、止め切れなかった魔物たちが、メツシュのほうへと剣を振り上げてしまった。それに気付いたメツシュは足を止めて、腕で頭をガードする。

「メツシュー！」

魔法を使うべきか戸惑った一瞬、振り下ろされた剣はメツシュへと降りることはなかった。

メツシュの周りを取り巻くように張られた魔法の結界により、剣は食い止められた。アマシュリは拘束しかできないはず。他に魔法が使えるとなれば、メツシュだろうか。知らぬうちに魔法を仕える者なのか考えながら周りを見回すと、屋根の上にキーツの姿があった。

（やばい。キーツの存在忘れてた）

メツシュを護る事と、手を出さないようにすることで精一杯だった所為で、キーツも魔法を堂々と使えることにようやく気付いた。

ホツと胸を下ろしながらも、一度剣を引いた魔物たちのほうへと足を運んだ。

魔術・魔法は今使えない。となれば。

（体術しかないじゃないかつ）

体勢を低くし、地を足で一度蹴りつけ、風を切るようなスピードで魔物の一匹の足元に身を寄せ、下から魔物の顎を右足で蹴りあげる。脳が反応しなくなったその魔物を、蹴りあげた足をずらし、頬に踵を乗せて思いつきり地面にたたきつける。

後ろから魔法を使う気配がし、飛ばされた魔法弾を、支えていた左足で地面を蹴り、後ろへ大きく宙返る。頭が地面に向いた時に後ろにいた魔物の顎を両手でつかんでやり、遠心力で自分が地に足をつく前に、身体を捻り地面に背を向け、思いつきり放り投げてやる。地に足をついた瞬間、目の前に位置することになった魔物の腹に、右ひじを曲げ、右手を握りしめてその手を左手で固定し、思いつきり肘鉄を喰らわせた。

よろけたその魔物の足を足で引つ掛けて転ばしてやり、小さく拘束魔術の呪文を呟き、しっかりと縛り上げてやった。

立ちあがってこようとする魔物にも、呪文を唱えられる時間が設けられたおかげで、二匹とも拘束魔術により縛り上げた。

アマシユリが魔法で必死に止めている魔物にも魔術をかけてやり、拘束する。

「コンヒュ！ 治癒魔術を」

「なっ！ ……わかった」

ルインを指差し、コンヒュに命令すると、なんで魔物なんかにという顔をしたが、文句を言ったところで解決しないとようやく気付いたのか、躊躇ってはいたものの、ルインの腕に向かって呪文を唱

えていた。

その隣で必死に泣きそうなメツシュが寄り添っていた。

その程度の怪我であればそう命にかかわることはないだろう。ちらりと屋根の上に座って待機しているキーツは、何を考えることなくボーっとこちらを眺めていた。いったい何を考えているのかつかめない。

今はキーツのことはどうでもいい。いったん、交友関係にあるということ自体詳細を聞かなければならないようだ。

この付近の魔物の土地には、シエイルが鍛えた警備の魔物がいるはずだ。友好関係を知っているのかどうかと、そういう関係になっているのであれば、今回のようなことをできるだけでなくしてもらわなければならない。

いったんルインとメツシュを家の中に入れ、ベッドの中に横にさせる。

治癒魔術をしたからといって、派手の動かすわけにもいかない。

「今回のようなことはよくあるのか？」

「いや、ないわけではない。しかし、そう多くもない。あつたとしても俺ら魔物でおっぱったりする」

「友好関係にあるっていうのは本当なんだよな？」

「ああ」

「魔物と何かを結んでいるのか？ それとも暗黙のルールみたいな、自然的なものなのか？」

「一応。お互い手を出さないでおきましょうって、昔からこちらの魔物には話がいつている。こっちに移り住んだ魔物は、もう魔物の土地に足を踏み入れることがなくなってしまったから、魔王様が手配している警備の者は知っているかどうかは定かではない」

「口約束みたいなものか」

「ああ」

気に食わない様子のウンヒュは、扉のすぐ近くに立っているルーフォンの隣に立っている。

やはり人間の隣のほうが安心するのだろう。

俺が行くというわけにはいかないし、アマシユリに行かせるのはどうだろうといういろいろ頭の中で試行錯誤する。

頭を使うのはシェイルの仕事だったからこそ、最近よく頭を働かせている自信がある。

「この村の長は友好関係のことは？」

「村長は知っております」

「じゃあ会いに行ってみるか」

隣にいたアマシユリのほうを見ると、呆れたように立ち上がった。

「私はどうすれば？」

「いったんここで待機してもらえるか？ 詳細を聞いた後、もし

村長の了解さえいただければ、きちんと魔物の警備の者とやり取りよろしく」

「わかりました」

「悪いけどルーフォンはこの家付近の警備よろしく。ウンヒュは家の中で待機。下手に手出ししたら殺す。あと…キーツは」

隅にいたキーツを見て、キーツの役目が見当たらなかった。

一応魔王とやり取りをしているということをごちらは知らない。

ということにしておかなければならない以上、命令するに命令できない。

アマシユリとともに、キーツも行かせ、もし警備の者が手を出してくるようだったら共に戦ってもらおうか。しかし、戦いですべてを納めたくない。といって、キーツを連れていかず、アマシユリ一人に行かせるのは危険が高い。

城に出入りを許されているアマシユリだからこそ、警備の者は手を出さないと思うのだが、それまでの道のりがどうだか。

「キーツはアマシユリの援護。できるだけ戦闘体勢に入らないこと。守備重視で。ということで、キーツも待機」  
「わかった」

ルインをお願いして村長がいる場所までの地図をもらい、家を後にした。

## 第26話

「魔物の警備の者と…」

「はい。友好関係があるということと言わせていただきますが、私の仲間に魔物がいます。なのでその者に魔物の土地へと行かせようかと思っております」

「なんと。勇者の仲間に魔物が…っ」

「はい」

この村長は、前までいた街の国王とはやはり違っていた。話しやすいし、こちらの話を真剣に聞き入れてくれる。勇者ということもあると思うが、第一に魔物と友好関係を結ぼうとしている人だからこその性格だろう。

他の人も、できることなら警備の者と話は付けたい様子だった。

村長がいる建物の中にも、数匹魔物がいる。しかも、周りはそれを認識し、仲よさそうに微笑んでいる姿も見受けられる。

「ここは素晴らしい。魔物と友好関係を結ぶ街や村がもっと増えればいいのに。そう私は思っております」

「一応確認ですが」

「はい」

「勇者様御一行は魔王討伐では？」

「もしそれしか方法がないのでしたらします。しかし、魔王を倒したところで他の魔物が魔王になるだけ。意味をなしません。だとすれば、友好関係や同盟を結ぶ。もしくはお互い干渉しないよう完璧

に壁を作ってしまったほうがいいと思うのです」

「なるほど…。でもよろしいのですか？　もしかしたら、魔物の警備側は、友好関係をよく思っていないかもしれない。お仲間の方が危険な目に会うかもしれない…」

「もちろん一人では行かせません。もし、厳しい様子でしたら私も向かいます」

「…無理はせず…よろしくお願いいたします」

「ありがとうございます」

シレーナが戻ってくると、警備の者とのお話は了解を得たということだった。そのあと、おおざっぱにキーツの話をテレパシーで送ってきた。

魔王に直接会ってきているとの話。勝手な話だなとは思ったものの、魔王だから仕方がないかとあきらめ、家の中でいったん静かに気合を入れた。

久々に魔物の土地へと足を運ぶのだから、それなりに緊張する。逃げる心得はあるのだが、キーツがどう動くのかが気になる。

見送られながらも、森の中へと足を踏み入れた。

静かな森を歩いているとき、口を先に開いてきたのはキーツの方だった。

「やはり貴様も魔物だったのか」

「うん。そうだよ」

「勇者とはどうやって出会った？」

「襲われたところを助けてくれたの」

「人間にか」

「うん」

魔物なのにシレーナが魔物だと気づいていないところが笑える。

確かに魔物の気配を最低限まで消しているからこそ、あまり気付かないのはわかるが、人間の気配がするわけでもない。本当に気配自体を消してしまっているため、不思議だと思うのが普通だと思う。しかし、いままで遭遇していた魔物も、シレーナが魔物だということに気づいてはいない。

最初から魔物だとわかっていいるから、シレーナの魔物の気配を感じられているのだろうか。原理がわからなくなってきた、頭を悩ませてしまった。

「気になるんだけど、どうして街の中で防衛を？」

「成り行き。たまたま魔物に襲われている子供を助けたら、その子供、国王の子供だったみたいで、護衛のやつらも既に死んでいた。子供：王子を助けたからこそ、それを見こまれて防衛団に入らされた。別にお金が入るならいいかなと思ってたら、気づけば長。ただそれだけ」

「じゃあ抜けるとき結構ひきとめられた？」

「まあ、それなりに」

「ふうん」

魔物のくせに、人間を。しかも子供を助ける心があるというのに、どうして魔王なんかになりたがっているのだろうか。口にしないだけで、シレーナのように争いを嫌う体質なのだろうか。

よくわからないキーツの存在に、ため息をついてしまう。

もう少し考えてからキーツにお誘いをかけてくれればよかったのに。その時点では魔王の座を狙っていることを知らなかったからと言って、軽々と仲間を増やしすぎなのではないか。ユニヒュを除き、ルーフオンもキーツもそれなりに話がわかるからいいものの、これ以上増やし、魔物の存在を嫌う者まで増えると、俺が居にくくなる。それに、シレーナだって、今後魔物の土地へと出向き、魔王へ会いに行かなければならなくなるのではないか。

何を考えているのかわからず、またため息をついてしまった。

話すことがなくなり、ただ無言で進んでいると、魔物がすむ一つの地区に出た。

ここはそんなに魔物の数が多いわけではないが、昔争いが激しかったため、シエイルが警備をつけていた。一度だけ会ったことはあるけれども、向こうは覚えているだろうか。

気配に気づいたのか、ゆっくりと何者かがこちらに向かってきていた。先に気付いたのはキーツだった。そちらを見ているから何かと顔をかしげて見ると、シエイルが用意した警備の魔物だった。

「ここで何をしている。ここらの魔物ではないな」

「お話があつて」

「話？」

近くの人間の村の話をする、ここの警備の者もそれは知っている様子だった。ただ、すべてを把握しているわけではないし、他所から来た魔物がここ付近を通らなければ気づかないから、奇襲がか

かつても護ることはなかったとのことだった。

ここを通り、もし村を襲う様子だったら止めはしていたとのことだ。

今回のことをいろいろ話していると、地区長と話してみるとその場を離れてしまった。他にも、きつとシェイルにも話は行く。このことについてシェーナがシェイルに話をつけていてくれれば、きつと簡単に通ると思う。

こつも堂々と魔物と話すのは久しぶりだった。

しばらく待つと、先ほどの魔物が戻ってきて再度その話をしていった。魔王との連絡も取れたみたいで、できるだけフォローはすることだった。警備隊長としてシエイルと相談したところ、ここ付近の警備を増やすとのことでもある。

結構話が早く進んだことに驚きはした。

隣にいたキーツは、どうして魔王が今回のことを了承するのか。不思議そうな顔をしてはいるものの、口にすることはなかった。

ある程度の話を終えたのち、俺とキーツは村に向かって歩き出した。すると、不意にキーツの足が止まる。

どうしたのだろうか、ゆっくり振り向くと、いきなり魔法弾をこちらに向けて投げてきた。

反射的に避けたものの、足を引っ掛けてくじいてしまった。

「何を！」

「どうしてだ。どうしてこんなに話がスムーズに進む」

「はあ？」

「お前：魔王の情報魔だろうか。どうして勇者と同行している」

冷静に口を開くキーツに、しゃがみ、低い体勢をとっている俺は、見上げるように睨みつける。

確かに、魔王とつながりがあるとわかっている魔物はある。前回

もそれを口にされ、ルーフオンに魔王の使いだと言うことを知られた。しかし、それをキーツに知られてもいいものなのか。だが、情報魔というのを知られていて、何より魔王と繋がりがあるというのは知られている。隠しきれるものではない。

キーツは一步ずつゆっくりとこちらに向かって足を進めてくる。どうすればいいのか。

魔物の土地のほうに逃げるか、人間のほうへと逃げるか。しかし、そう遠くまでは走り続けることはできない。こんな時に足首を痛めてしまっているのは、少々大きい。

（すみません魔王！ キーツですが、情報魔だということを知っているようです。で、攻撃されてるんですが…）  
（なんだと…っ！）

何度も拘束魔法を使っているものの、そう簡単にかかってくれる様子はない。

「やめるキーツ！ お前はどっちの味方なんだ。魔物か？ 勇者か」

「どっちでもないよ。俺は俺の野望のため」

「野望…？」

「ああ。大きな野望があるのさ」

魔王になる。ということだろう。

しかし、魔王になったところで何を目的としているのだろうか。いったい何を考えているのだろうか。



## 第27話

いきなり入ったアマシユリの報告に、一瞬俺は身が固まってしまった。

まさか、こんなにも早く攻撃を仕掛けてくるだなんて想定外だった。いつかは裏切るだろうとは思っていたものの、アマシユリと二人きりで行かせたのが間違이었다。

ここを俺が守備しておいて、ルーフオンも行かせてしまえばよかった。しかし、今は後悔している時間ではない。

今走って行ったところで、逃げ回るアマシユリを探すのには時間が少々かかってしまう。ということは、他の者に行かせるのがベストだろう。

すぐに城に待機しているリベリオにテレパシーを送った。

ヴィンスであれば、今回の計画を知っているとは思ったが、キーツと面識がある。キーツと魔王が接点があると言つのを知られないか、という警戒心を持たれてはいけない。

（わー。魔王様に会えるのですね！？　今すぐ飛んでいきます！

おやつもたくさん持っていきますね）

（あーうん。まあ、急いでくれればどうでもいいよ）

相変わらず元気そうで何より。

そう思いながらも、アマシユリが向かった森のほうへと目を向けた。

アマシユリには少しだけ、悪いことをしてしまっただろうか。ちよっとした罪悪感はあるものの、無事だろうと祈り続けた。

（魔王が祈りか…。バカバカしいよなほんっと）

シエイルやアマシユリがよく呆れたようにため息をつく意味がわかったかもしれない。

こんな魔王らしくない魔王がいて、邪魔だとも思っているのだろっ。

「結局俺の居場所はないのかな…」

魔王の間にいた時も、席は用意されていても、何かがさびしかった。

隣にシエイルがいても、明るいいりべリオがいても、怪我に敏感なヴィンスがいても。シエイルとリベリオが話すような、楽しそうな会話にはならないし、することができない。

あの席も、なんだか居心地がよろしくなかった。それでも俺は、あそこにいることしかできないでいた。

（思い切って飛び出してみたところで、居心地の悪さは変わらないよ…父さん）

その場に座り込み、木に背中を預けて膝を抱える。

膝と自分の間に顔を伏せ、額に膝がぶつかる。

よくこの体勢になると父さんに怒られた。

『おバカ。そんな格好してたら、殺してくださいって言うてるようなものだぞ』

そう言って、父さんは俺の右腕をつかんで、無理矢理でも立ち上がらせようとする。

いつもその掴まれた腕が痛くて、されるがままに立ちあがっていた。

大人の魔物の握力は強く、まだまだ小さかった子供の俺は、どう頑張っても勝つことができなかった。

『だって…弱いんだもん』

『なんだ。またリルに負けたのか』

リルというのは、父さんの従弟の息子だ。俺より数年長く生きていて、かつこよくて強くって、でも優しい魔物だった。兄弟がいない俺によく構ってくれたのをなんとなく覚えていいる。だから、いつもリル兄って呼んでついてまわった。

戦いというものを知ってしまったころ、何度も挑んでいるのに一度も勝てたことがなかった。

今どうしているかはわからない。気付いたらリルと会う回数は少なくなり、ついにはピタリと会うことが無くなった。

あの時は平和だった。

人間が魔物を。魔物が人間を。ということは行われていたが、自分分は平和だった。

構ってくれる者がいたし、父さんもいた。楽しかった。自分の居場所は、父さんのすぐ近くにしかなかったから、そこにしかいれなかった。

なのに、父さんが狙われるようになってから、平和はどこかに消えてしまった。

マイナス思考に陥っている最中に、森のほうから数匹魔物気配がする。

敵意が見当たらない分、あまり気にしないようにしていると、森

のほうから楽しそうな声で名前を呼ばれる。

「シレーナ様あーっ！」

リベリオだろう。声でわかる。

ゆっくりと顔を上げると、片腕で紙袋二個抱えたアマシユリを抱き上げ、もう片方の腕でこちらに向かって大きく振っている。

（相変わらず明るいやつだな）

スツと微笑み、座り込んだまま軽く手を振ってやった。

後ろの方からは、怪我をした不機嫌そうなキーツがついてきていた。大きな戦いにならず、和解できたのだろう。一体何のために争ったのかまでは聞いていないが、後でじっくり聞いてやるとする。

「立てよ」

「腕かして」

「…」

いつものわがままを言いだすことに呆れたのだろう。返事が返ってこない。

言われるがまま立ち上がるのは、なんか気に食わない。腕を貸してくれないならいいと言わんばかりに座り込んでいると、いつも父さんが掴む右腕を掴まれ、乱暴に立たされる。

されるがままに立ちあがり、ちらつとルーフォンの顔を見ると、そこには呆れてものも言えないような顔ではなく、うつすらほほ笑み、優しそうな表情をしていた。

その意外さに少しだけポカンとしてしまう。

「はい。お土産ですー」

「あ、ああ」

抱き上げていたアマシユリを目の前に下ろし、アマシユリが持っていた紙袋を差し出してきた。おやつを持ってきたと言っていたが、またスイーツだのアイスだのだろうか。

ゆつくりと紙袋の中を覗き込むと、そこには個別にまとめられた一口サイズのクッキーが、数個入っていた。いろんな種類がないのに少し驚いた。

リベリオが準備する食べ物系列は、いろいろな種類が、無計画に広がっていることばかりだったから、何か一つに決めたリベリオが不思議でなかった。

「シレーナ。警備の者とは交渉成立です」

「そうか。よかった」

「本当！ やったね勇者様！！」

につこりほほ笑むと、後ろから嬉しそうな子供の声が聞こえてきた。

振り向く瞬間、グイツと腰に腕が回り、後ろから抱きしめられる。

「メッシュ」

「やったね！ 少しは平和になるよね」

嬉しそうに、につこりとほほ笑むその顔は、もう初めて会った時の恐れている面影はなくなってきた。不安だったのだろう。友好関係があったとしても、安心して暮らせるわけではなかった。どこかに危険がある事を、幼いながらも感じてしまっていたのだろうか。しかし、これでもほんの少しでも安心を感じてくれたら光栄だ。

頑張った。というか、アマシユリがほぼ頑張ってくれているのだが、いろいろ考えてきた甲斐があった。そう思えるのがなんだか可

笑しかった。

「勇者様が…」

「ん？」

先ほどとは変わった小さな声で、顔を下ろしてしまう。影になって表情が読み取れず、ゆっくりとしゃがんで頭を撫でてやった。

なんだい？ と首をかしげると、メツシユの頬に一滴の涙が流れ落ちてきた。

痛かっただろうか？ すぐに頭から手を離すと、その手をメツシユが小さな両手を伸ばしてギュッと包まれる。

「勇者様が魔王だったらしいのに…」

『だったら魔物と人間が、仲良く平和に過ごせると思っのに…』

そう震える声で言われた時、何かが心臓に刺さったかのように、一瞬胸が痛んだ。

ごめんね。

そう言いたくて仕方がなかった。

涙が次々と流れ落ちていくこの子供を、俺は平然と騙しているの

だ。

（心が痛むって…こういうことなんだ）

胸が痛んだ後は鳥肌が立った。

この子供の力にはなれそうだが、そこまでの道のりがすごく遠いのではないのだろうか。

メッシュに言いたい。すごく。言いたかった。でも、言える責任がまだ負えない気がした。

「子供の言葉というのは強いものなのですね」

その日の夜、なかなか寝付けることができず、ベランダで満月の光を浴びていた。

すると、後ろから優しい静かな声が聞こえてきた。アマシュリだ。キーツは先ほどいつものように出て行ってしまったから、あまり警戒していないようだった。

「本当。なんでだろうな」

「心のまま口にしてくれるから。ですよ」

「心のままか」

勇者が魔王だったら。だったらなんかではない。だからこんな世界になっちゃったのかもしれない。

でも、人間の土地と魔物の土地が分けられる前は、もう少し荒れていた。炎が上がるのなんか日常茶飯事だったし、住むところを狙われないためにも、あまり一つのところに身を寄せないようにしていた魔物。建物を作ったところですぐ魔物に壊されたり、燃やされたりしてしまい、安心して眠ることもできない人間。

魔物に対抗するため、魔術ができてもおかしくはない世界だった

のかもしれない。今となつては、人間に魔術の必要性が分かつてきた気がする。前までは、弱いくせに頑張るなよと半分馬鹿にしていた。けれど、分けられた後でも、まだ安心できる世界は訪れなかった。

もう少し、世界を知っておかなければいけなかったのかもしれない。

（魔王様。睡眠中失礼いたします）

（シェイルか。どうした？）

（キーツがしつこいのですが、殺してしまつても？）

（しつこい？ 何がだ）

（直接お会いしたいと）

「アマシユリ、眠つてもいいかな」

「はい」

どうせここでしょう？ と呆れたようにため息をつきながらも、部屋を背に正座をして、ポンポンと自分の太ももを叩いて見せる。嬉しくなつてにつこりほほ笑み、用意された温かい枕の上へと頭を乗せた。

「おやすみなさい」

「魔王様！ 一体どういことですか」

すごい気迫のキーツ、最初と同じ棟の同じ会議室に待たせたのち、出来るだけダラダラ歩きながらその場へ向かった。扉を開けたら開けたですぐこれだ。

何のことを言っているのかはなんとなく想像できるものの、そんなに怒る事かよと、内心呆れてしまう。口に出さずとも、ヴィンスもシェイルもため息をつきたがっているのはわかっている。どちらも、キーツと同じ気持ちなのだろう。

いまここで考えが違うのは俺だけ。独りぼっちだ。

「なにがだ」

「人間の村と友好関係を結ぶだなんて」

「そうか。お前には俺の心がわからぬか」

少しだけ口調がユニヒュ寄りとなってしまった。

（ぬって言っちゃった。ぬって…）

「魔王様のお心ですか」

「そうだ。わからんのならいい。下等な魔物にはわからないのだろう」

「下等…」

魔物風で考えれば、人間の国と手を組んでいるのは一つの楽しみだと思っ。

今回は村だったが、こちらは安全です仲良くしましょう。と表面上を伝えていれば、人間は徐々に不安が薄れていくはずだ。そこを一気に狙う。ということまでキーツは考えていないのだろう。

もちろん、そんなことをされたくはないのだが、何事も利用しなければならぬ。

どうすれば、キーツが早く勇者の元から離れてくれるのか。

「お前は勇者を倒せる力はあるか」

「あります！ あんな弱い人間、すぐにでも」

秘策があるのだろう。

力強いそのまなざしは、何か恐ろしいものを感じた。シエイルもわかったのだろう。一步前へ出て、防衛体勢に入りかけている。横目でそれを確認し、うつすらほほ笑む。

「ならば見せてみる。その力を」

「勇者を手にかけても良いのですね？」

「ああ」

恐ろしいものは、先に排除しておこう。

今は殺しをあまりしたくない。そう思っていたが、自分を護るため、出来るだけ多くの民を護るため。危険を避けるためには仕方ない。思い込むように、ゆっくりと目を瞑り覚悟を心に納めた。

キーツを帰し、城の廊下を速足で歩いていると、斜め後ろにいたシエイルが小言を言ってくる。

それをはいいいとテキトウに流し、今後どうするべきかを考える。キーツのことだ。やると言えば本当にやるだろうし、それも時間を空けてだなんて悠長なことはいらないだろう。ということとは、今すぐにもアマシユリのいる方へ戻らなくてはいけない。しかし、それにはまだ何の準備もしていない。

とくに、まだ実践していない技だって、いざという時に出来るかどうかともわからない。

不安はたくさんあるものの、戦いとなってしまった場合はどうにか対処するしかない。

アマシユリから聞いた話では、得意としている束縛魔法が効かないに等しかったという。実際、あの時明るいリベリオが空気を壊してくれなかったら、死を選ぶしかできなかったという。

得意というわけでもない束縛魔術を、束縛魔法が効かなかったキーツに効くのだろうか。

（いや…無理だよな）

魔物だとばれないように戦うことなど、最初はそんなに気にはしていなかったが、無計画に増えた二人の人間により、行動が狭まってしまった。

（こんなんじゃ、魔王らしくないっていわれてもおかしくはない…か）

「シエイル」

「はい」

「この身が消えた時は、俺の身に何かがあったものだと考えておいてくれ」

目を開けると、空の方向にはアマシユリの顔があった。  
満月を見つめ、優しく俺の頭をなでてくれていた。

「綺麗だな…」

「…戻れましたか」

「ああ」

ゆっくりと身を起こし、ただ茫然と森のほうを見つめた。  
もうそろそろキーツが帰ってくるだろう。

どうするつもりだろうか。なにを隠しているのだろうか。一体、  
どこで戦うのだろうか。何組で？

条件をそろえておくべきだったか。後悔しながらも、軽くため息  
をついた。

「どうかなさいましたか？」

「うん。厄介なことになりそうだなって」

「…今さらでしょう」

「ははっそうだな」

さんざん振り回されたのはアマシユリだ。

危険だと知っていてついてきてくれた。少なくともアマシユリは  
…この村は護らなければならない。

今回のことを言ったら、また呆れられるだろうか。きっと、もう  
俺の勝手についてこれなくなり、離れて行ってしまっただろうか。

いろいろ考えていると、森のほうからキーツが戻ってきた。アマ  
シユリのほうに目を一瞬向けていたが、目的だろう俺のほうをジッ  
と睨みつけてきていた。翼をしまうことなく、そのまま下降してく  
る。

ソツと足音をたてないように目の前に着地して口を開いた。

「お話があります」

「ここではみんなが目を覚ましてしまっ……。森で」

「ああ」

「シレーナ…？」

「大丈夫。すぐ戻るよ」

いやな予感を察したのか、アマシユリは歩き出した俺の手をつかみ、制止させて不安そうな瞳を見せた。うつすらほほ笑み、大丈夫だよと安心させてやる。

手を離してベランダから外に降りる。キーツは飛んだまま場所を指定するように、魔物の土地のほうへと向かって行った。

姿を森へ隠してしまった。

見送りはしたものの、この暗さの中で様子を見ることなんか無理そうだった。

何かがあつたとしても、どうにかしてくれるのだろうか、怖かった。シレーナが。魔王が消えてしまうことが。

一瞬戸惑ったものの、ベランダの扉を開き、部屋の中へと足を向けた。

扉に近いベッドを使用しているルーフオンの元へと駆け寄った。歩く音で目が覚めたのか、ルーフオンは身を動かし、ゆっくりと瞳を開けた。一瞬どこかわからないところを見ていたが、しっかりと

覗き込むように見ている俺の姿を見つける。

軽く目を擦りながら上体を起こし、口を開く。

「どうした」

「…どうしよう…」

「…何があつた」

泣きそうな弱々しい声を出してしまった。

泣いてはいけない。そう言い聞かせていたというのに、口を開こうとしない俺の頭を、珍しくも優しく撫でてくれた。その今までにない優しさの所為で、涙がこぼれおちてしまった。

## 第28話

「話というのは…」

「馬鹿じゃないのか」

「は？」

地に足を下ろしたキーツだが、一向にこちらを見ることなく背を向けたままだった。

一体何を考えているのだろうか。口を開いたと思えば、一番にそれだ。徐々に現す魔物の姿。もう、隠すつもりもないのだろう。それとともに、殺気を徐々に露わにさせた。

ゆつくりと振り向くキーツの顔は、もう殺すことしか考えていない、殺意で暴走した魔物の表情だった。

今まで隠していたかのように、徐々に魔力がキーツの身をまとう。その力は、その辺の魔物よりも、相当強いものだった。

宝石により苦しんでいた時に見た、あの夢の中にいた自分みたいだった。

自らの力にうぬばれ、我を忘れて無我夢中に暴れまくっていたのだろう、あの自分だ。

「馬鹿だよみんな。こんなお人よしを勇者なんかにして…」

「キーツ…」

自分には戦意がないことを示すように、そつとキーツに手を伸ばすと、速いスピードで現れたキーツの右手が手首をつかむ。その握力に、手首が折れてしまうのかと思うような強さ。全身に力が入ってしまう。

カリツと口の中で音がして、歯までかみ合わせるほど力んでいたことに気づく。ゆつくりと息を吐き、自分自身を落ち着かせる。まだ、ここで魔王である自分を出してはいけない。そう言い聞かせながら。

キーツの手は、引き寄せることも、引つ張ることもしない。ただ、掴んで力を入れているようにしか見えない。掴んできた右腕を逆に掴み返し、離せと怒鳴りつける。その瞬間、キーツの左手が俺の額をつかむ。

（まずい…）

想像以上の速さと力に、頭が握りつぶされると感じる恐怖。額をつかむ左手から何かが感じられる。

（なっ…っ！）

魔法が使われた。

認識すると同じく放り投げられた。

後ろに、構えていたかのように植えられている木の幹に、力強く背を打ちつけられる。木が折れることまではなかったが、全身の痛みが尋常じゃない。

特に握られた額が痛い。火傷を負ったかのようにヒリヒリするだけではなく、脳味噌に直接何かを注ぎこまれたみたいだ。

動く気力が薄れていく。

ズルズルと背を木の幹に摩りよせるように、膝に力が入らず座り込んでしまう。

首も疲れた。手も疲れた身体が疲れた。全ての疲労感。

「どうした？ もう終わりか」

どうして。

どうして俺は魔王になったのだろう。どうして俺は勇者になったんだろう。

どうして俺は…。

「どうして…？」

「…あ？」

「どうして生きてるんだろう。生きる価値なんてないのに。魔王を倒せばいいの？ 魔王を倒せば幸せな世界が待っているの？ 今こうして人間が生きる土地があるのは、魔王のおかげなのに…？」

奥から二つの気配がする。

片方が魔物の。片方が人間の。

「お前に聞きたいことがある」

キーツは、その気配を余所に質問を始めた。

「…」

「何故あの家に魔物がいることに気付いた？ 人間は魔物の気配を感じ取れないはずなのに」

「なぜ…？ どうしてそれをお前なんかと言わなきゃいけないの…」  
「シレーナ！」

聞き慣れた声がする。

声がした方向を見ると、そこには息を切らしているアマシユリと、

怪訝な表情をするルーフォンの姿があった。

（なんだか、ルーフォンの表情は怪訝そうな表情しか見てなかったな）

だからこそ、落ち込んでいた最中に立ちあがらせ、微笑んでいた表情がわからなかった。

駆け寄ってきたアマシュリは、肩に手を乗せ怪我があるのかいろいろな部分を探していた。特別何も見当たらなかったのか、眉間にしわを寄せてキーツに振り向き怒鳴りつけた。

「キーツ。シレーナに何をしたのですか！」

「何を？　ただ俺はそいつに負の思考にさせる魔法を使っただけ。

暴心法さ」

「負の…？」

「全てがマイナス思考になるのさ。かかった者の心が読めるってわけさ」

「なっ…」

（心？　マイナス？　何言ってるの。俺はいつだってマイナスにしか考えられなよ）

いつも感じていた。

魔王になる意味を。

不思議に思っていた。

何故俺だったのか。

「もうやだ」

「し、シレーナ？」

「…シレーナ？　はっ誰それ…？」

口元が上がってしまう。

作られた名前で暫く呼ばれるのは楽しめた。もういい。そんな偽名、必要ない。

最初はルーフォンに警戒していたアマシユリだって、今じゃもうアマシユリがルーフォンを信用してしまっている。だからこうやってルーフォンをこの場へと連れてきたのだろう。

どうして？

もしかしたら、ルーフォンはそうやって信用させて、隙を突こうとしているのかもしれない。そんなのアマシユリが困るだろうに。どうして頼ろうとしちゃってるの？

また、

「また、俺を一人にするのか…そうやって…っ！」

パシンッ！！

怒鳴りつけてやろうとした瞬間、アマシユリの手が俺の頬を叩いていた。

叩かれた頬に触れる。

熱い。痛い。ヒリヒリする。

どうして。

「いい加減に目を覚ましなさい！　ダラダラ何かを引きずってるなら俺に見せてみる！　引きちぎってやるから」

震えた声で。でも、しっかりと俺のほうを見て、乱暴に怒鳴りつけるアマシユリの頬には、涙が流れていた。

どうしたのだろう。

いつからだろう。

顔を上げなかったから気付かなかった。

「いつも勝手に行動して周りを心配させて…。危険だってわかっててキーツと二人つきりになんかなくて…。どこまで心配掛けさせるんですか！どこまで心配かけさせれば、あなたはもう一人じゃないってわかってくれるんだ！」

「…もう…？何を言ってるんだ？何をやってるんだ？貴様は俺に手を出していい立場か？」

「立場？そんな地位的存在あなたは嫌っているでしょうが！」

「ああ嫌いだよ！何もかも！勇者なんて…勇者なんてクソくらえ！」

怒鳴りつけていたアマシユリの顔が、その時ふつと優しくなった。目元を下げ、そつと言い聞かせるように、口調も丸く暖かく。

「じゃあもうやめましょう？まだ終了は効きます。あなたの顔は他には回りきっていない。でもいいのですか？メツシュは、あなたが魔王のほうよかったと笑っていたではありませんか」

「魔王のほうが良い？ふざけるっ…っ！」

怒鳴りつける俺の言葉を止めるように、アマシユリは俺に向かって束縛魔法を使用してきた。

両手を身体と一緒に縛られ、言葉を発せられないように喉を締め付けられる。

ふざけるな。魔王のほうがよかったっていわれたって、すでに魔王なんだから。そう言いたいのに、苦しくて声が発せられない。

もついい。ばれたって支障はないんだろう。メツシュは人間の勇者ではなく、魔物の魔王を望んでいたのだから。

「勇者をやめて戻ってきてくれますか？ 必要ないならば、ルーフオンに任せてしまえばいい。でも、そしたらあなたが途中で決めた、魔物と人間の共存はなくなります。それでも？」

抵抗していた身体の力を弱めた。すると、もう暴れ出さないとわかってくれたのか、アマシユリは魔法を解いてくれた。

「知ってたのか」

「ええつ。気付いてしまいました」

「でも俺は強くなかない。強いのは力だけ。魔王と同じだよ。力だけあって心は弱い。すぐに殺せてしまおう。そうだよ。魔王が死ねばみんなは喜ぶんだ。だったら殺してやるよ」

「お前なんかに殺せるかよ」

キーツが挑発するように高笑いする。  
そんなの簡単に殺せる。

「ええつ。あなたは魔王を殺すことなんか、赤子の手をひねるのと同じくらい簡単かもしれませんよ。でもそれをさせるわけにはいかないんです。わかってください」

「ほお。お前はやっぱり魔王側についていたのか。そうだよな。そんな弱々しい人間の下になんかついていたくないよなあ」

楽しそうに笑い続けるキーツに、だんだんと腹が立ってきた。  
知ってるこの感覚。

そうだ。俺は魔物だ。魔王だ。この力を持て余し続けてきたのだ。足に力を入れ、きちんと立ち直る。ギュツと右手をグーに握りしめ、そこに魔力を溜めこむ。

脳味噌に直接、駄目ですとアマシユリが叫んだ気がしたが、暴走

しかけている“心”はもう止まらない。

手の力を緩め、人差し指と中指の先に小さな無の魔法弾を一つ作り、それをキーツに目掛けて一弾投げつける。その弾はキーツの右肩を貫く。

「うあああつ！ なっなんだ貴様は！ …この感覚…もしかして」

流れ落ちる血を止めるように、左手で撃たれた右肩の傷を抑えつけないながらも、数歩後ろに下がる。

近くで見ていたルーフォンも、今の状況を理解し、俺の種族も理解しただろう。知られてしまったことに、アマシユリが恐れるような瞳を見せたまま、口を両手で押さえている。しかし、ルーフォンのほうから剣をつかむような気配がしない。

ルーフォンが嫌った魔物だ。わかっているはずだ。なのに、どうして俺に切りつけようとするしない。

「ああ。そうだよ。魔物だよ。だからなんだ。人間？ はっ！ この場に人間はルーしかいねえよバーカ！」

わかった気がした。

この魔法の本当の力が。心をかき乱して動揺させる。たったそれだけ。動揺とともに心に隠していたものまで口にしてしまうだけ。そんな簡単な魔法にかかってしまうだなんて、馬鹿は自分なのかもしれない。

そうだ。ここに人間はルーフォンしかないのだ。自分を守るくらの能力はある。だから、暴れたって問題ないのだ。ちょうどあれを試してみるのもいいかもしれない。

「今日はきれいな満月だな…」

「…はい？」

「結局魔物か。魔物が勇者だと…ほんと笑えるな。魔王に逆らうなんて本当馬鹿だ。馬鹿にもほどがある」

頭が狂ったように怒鳴りだしたキーツは、こちらに向かって魔法弾を数発撃ちこんでくる。アマシユリの腕をつかみ、勢いよくルーフォンのほうへと放り投げて、魔法弾の嵐から遠ざけてやる。

向かってきた魔法弾を、魔法弾で数発消滅させる。が

「あぁっ…っ！」

いきなりアマシユリが痛みに耐えるような叫びを発した。

目に入ったものは、ルーフォンをかばうようにキーツに背を向けて、ルーフォンに寄りかかっている姿。そのアマシユリの左肩には、魔法で作り出された細い槍だった。

ルーフォンのほうには、アマシユリが流し出した大量の血を浴びている。

「お…おい…っ」

ルーフォンは、そつとアマシユリに触れてみるが、痛みに耐える震えが伝わっているようだった。

すぐにヴィンスを呼び出してしまふ。痛そうだった。苦しそうだった。そんな姿をただ見ていられしかできなかった。

重く感じる足を、ゆっくりとアマシユリのほうへと進めていく。それを許さないように、キーツのほうから数発、魔法弾ではなく、傷を負わせていた槍を数発投げつけてきた。

地を蹴りつけてそれから後ろに逃れてしまふ。アマシユリから距離が広がる。それが怖くなり、アマシユリではなくキーツのほうに向きなおした。

「貴様…。アマシユリに何しやがる！」

「だ…っだめです！」

止めるアマシユリの声はしっかりと聞こえたが、今この感情を抑えられる気がなかった。

キーツに向かって飛び着くのではなく、膝を地に乘せ、かかとに尻を乗せて座る。少し前かがみになり地に両手をべったりくっつけ、目の前の地面に大きく円を描くように魔力を注ぐ。

作られた円陣の中心に自分がいる。

そつと目をつむり、大きな獣を想像する。

地下で見つけた“あの本”に記載されていたあの獣を想像する。

頭の中にしっかりとその姿が刻まれた瞬間、両手が地面に沈み込み、何か固い鎖のようなものをつかんだ。その瞬間、力強く地面が盛り上がる。そのつかんだ鎖を必死に握りしめ、振り落とされないように腕に力を入れる。

盛り上がったその土は、人が乗れるくらいの大ささの狼。黒く、瞳が真っ赤に染まっていて、満月の夜にはちょうどいい獣だった。優しく地に舞い降りると、土から登ってきたようには思えない、やわらかくて触り心地のいい毛。

つかんでいる鎖は、その狼の首輪につながっていた。その黒い歯をむき出しにして、今にでも肉を食いちぎりたいような意欲を見せている狼の背に乗り、成功へのほほえみを出してしまう。

優しくなでやると、その狼はこちらをちらりと向いてきた。キーツのほうを見て、ゆっくりと指さす。

「お前の標的はあれだぞ。行け」

「…なんだそれは…っ！」

「これ？ 召喚獣だよ」

「召喚獣…だと」

「あ、ヴィンス。遅かったね。頼む…アマシユリを…っ早く！」

キーツとの会話中、ヴィンスがようやくこちらに到着した。  
子供の姿ではなく、魔物としての姿。

呼び出した召喚獣に驚いてはいたものの、アマシユリの姿を確認すると、すぐにはいと頷きアマシユリのもとへと駆け寄った。一瞬ルーフオンが警戒したが、名前を出した瞬間、その警戒はきれいに解き放たれた。

しかし、キーツはそうもいかなかった。

召喚獣の登場とヴィンスの登場。どちらにも驚いている。

「貴様っ！ 貴様も勇者についているのか！」

「…」

治癒に集中するヴィンスは、声も聞こえていないかのように、振り向くことも反応することもなかった。

ルーフオンは、アマシユリをヴィンスに任せ、ヴィンスの前に出てキーツからヴィンス達を守ろうと剣を抜いて構えていた。その現状の把握の速さに、少しだけこちらが驚いてしまう。

「…なんなんだよ…魔王は何を考えているんだ！ 魔王は…」

「もう、うるさいよ。さ、ご飯の時間だ」

狼の背から降り、そつと尻をたたいてやると、お腹を満たすために、キーツという餌に向かって素早い速さで駆け出した。

恐れて足がうまく動かないのか、逃げることですらできず、しかし、抵抗するように魔法弾を数発撃ちこんでいるが、素早い狼の身軽さは、それを避け、なおかつ餌のもとへと地を蹴り続けた。

目の前に構えると、腹や足ではなく、確実に喉仏を噛み切る位置に歯を喰い込ませたが、その歯はそれ以上奥にはいかず、狼の勢いに負けたキーツの身体は、後ろへと倒れ込む。それでもまだ、飛ぶ

血は現れない。

死を覚悟していたキーツは、息を荒くし、冷や汗を流していた。死を待っているキーツを放置し、ヴィンスへと一つの提案をテレパシーで送った。

いっそのことすべてばらしてしまえばいい。

一瞬驚くヴィンスの姿が目に入ったが、気にすることなく、頷いてやる。すると、呆れたような溜息をついた後口を開いた。

「キーツよ……。お主は魔王になりたいのだろうか？　チャンスをやる………なんだよ……チャンスって……」

「自分の死は自分で選ぶのがいい。今から魔王のもとへと行け」

「なっ……」

「戦ってこい。そして、もし“魔王”に勝てたのならあの座はお前のものだ」

## 第29話

治癒魔法が終わったアマシユリは、メツシユの家で休んでいるといいと言ったのだが、どうせ無茶をするのでしようと、少し怒ったような声でテレパシーが入り、断固としてついてくることを願っていた。

キーツとヴィンスのみではなく、俺やルーフォン、アマシユリを連れて魔王の城へと足を進めた。

ヴィンスの姿を見る魔物は、人間がいるからと襲うこともできず、ただ木の陰から睨みつけているだけだった。ルーフォンも、さすがに緊張しているようで、周りを見回しながらも、鞘に収まっている剣から手を離そうとはしていなかった。

魔物の地を歩きなれている俺やアマシユリにも、少しだけ緊張が走る。

無言だから余計。

「ごめんルーフォン」

「あ？」

「魔物だつて黙ってて」

「…もしかしたらそうなんじゃないかって、何回か考えたことはあったから、それなりの覚悟はできてる」

「…そう、だったんだ？　じゃあ、どうして聞かなかったの」

「聞いたって、白を切るだろう」

鼻で笑うかのように、憎んだ口調のないルーフォンの言葉。ちら

りと横目でそれを確認しながら、質問を投げかける。  
それに対しても、ルーフオンは淡々とした口調で、自分の意見を述べた。

「じゃあ、お前が最初に言った、非道なことには入っていないのか」  
「人間に対して害はなかった。それに、俺は勇者になりたかったわけではない」

「でも、魔王は倒したいのだろうか？」

「それはお前が言っただろう？　魔王を倒したところで別の者になる。そしたら今よりも悪い状況になるかもしれない。だったら、お前が言う共存の道も考えてみてもいいのかもしれないって」

「…ありがとう」

励まされた気がした。

魔物の土地を歩いていて、それで尚且つ魔物に囲まれた中たった一人、人間として歩いているというのに、恐れている様子がない。だからこそ、安心して魔物の土地を歩くことができた。

魔物払いはヴィンスが行ってくれているというのも、心強かったのかもしれない。

しばらく歩いたところで、アマシユリが足の疲れを口にはしないものの、感じている様子を見せた。

実際、ルーフオンもそれなりに疲れては来ているだろう。俺だつて疲れてきた。飛んだら早いのにと思いつつも、それは無理だということに気づいている。

召喚し続けていた狼を、アマシユリのもとへ連れてきて乗せる。最初は遠慮していたものの、につこりほほ笑むと、ゆっくりと腰を

おろしていた。その時、ヴィンスが何かを思い出したかのようにテレパシーを送ってきた。

内容に焦り、つい足を止めてしまった。

「あ、ごめん俺便所いきてえ…。立ちションしてくる」

そう言って森のほうへと駆け出して行った。

誰にも見られないように、ブラインド結界を張り、片手を目の前にかざし、そつと目を閉じ、城を離れる際に行ったコピー作成を行った。

ヴィンスから連絡が入ったのは、俺がキーツの術にかかった際に、コピーが消滅したとのことだった。登場が早かったのも、反応したシェイルとヴィンスがこちらに向かいかけているところ、ちょうどヴィンスの方に連絡が入った。シェイルを止めて代わりに向かったのだった。

確かに、下手に気を抜いたらコピーは消える。魔法が掛かってしまった際に、すべてをリセットしてしまったのだろう。変化まで解かなかった自分がすごいと、改めて実感。

作り上げられた魔王のコピーに、数秒だけかかる変化魔法をかけておいて、そのまま魔王の城へと飛んでいく。少ししてから結界を解き、ルーフオンの元へと戻った。

それからまたしばらく歩くと、日が昇るころに城へとたどり着いた。

ユンヒュの存在を思い出し、ヴィンスとアマシユリにその場を任し、ヴィンスに借りた上着を羽織り、フードをかぶって姿をばれないようにし、翼を出して魔物の土地から人間の土地へと飛んで行った。

途中で降り、ユンヒュのもとへと走って行き、必死に叩き起して魔王の城へ行くぞと説明を省き、魔物の土地へと入っていく。途中で戻ってきたときのように翼を生やし、重いユンヒュを担ぎながらヴィンスのもとへと戻った。

その間、魔物だったのかといろいろなさく言われたが、最初の方でサイレント魔法をかけてやった。いろいろ説明したのち、黙る様子が見られたから、サイレントをはずしてやり、地へと足をつけた。

状況を何となく、無理やりだが飲み込ませられたユンヒュは、気に食わないようにルーフォンの隣に立ち、門をくぐって行った。控えていた兵には、ヴィンスかシェイルからテレパシーが入っていたみたいで、警戒はしているものの、襲いかかるのをグツと我慢していた。

従順な兵だな。

そう感心しながらも、兵に囲まれた通路を進んでいく。

魔王の間への通路。左の大きな窓からは、ヴィンスが整えた立派な庭が見える。

懐かしい。どうしてこんなにも懐かしいのだろうか。暫く来ていなかったから。としか言えないのだが、相当長いことこちらにきていないような気がした。

歩き慣れた通路でも、ヴィンスより先を歩かないように、周りを見渡しながらかき続ける。

ようやく辿り着いた魔王の間の扉を、ヴィンスは大きくノックを鳴らす。すると、扉が向こうからゆっくりと開かれた。シェイルだ。

さすがにルーフォンもユンヒュも、攻撃態勢に入るかのように、個々の武器をしっかりと握りしめ、体勢を低くした。

「何しにここへ来た。キーツ」

「魔王様を…」

「どうしてやることを許したヴィンス」

「魔王様の御意思により」

冷たく言い放つシェイルは、キーツの返事を聞くことなく、すぐにヴィンスへも問いかけていた。そのあと、また面倒なことを言わんばかりに、シェイルの目が俺の姿を視界に入れた。

全てを答えさせてくれなかったキーツは、ギョツと拳を握りしめ、ジツとしていらなかった魔力が、シェイルへと攻撃を仕掛けた。寧ろ、今までおとなしくヴィンスに引き摺られていたのが、意外だったのだが、きつとここでの体力を温存するためだろう。

反撃するシェイルの手が拳がった瞬間、その手を目掛けて俺はドロップキックを喰らわせる。

まさか俺からの攻撃が入ることを想定していなかったシェイルは、蹴りつけられた手をひっこめ、俺から数歩距離をとった。とりあえずシェイルの相手は俺がしておかなければならないのだろう。

シェイルという強敵の標的が変わったのをいいことに、キーツは魔王。俺のコピーの元へと走りだした。その瞬間、その間へと向かう一つの白い靄が見えた。

リベリオだ。

魔王様への忠誠心がより強いリベリオが、コピーだと言うことはわかっていても、護らなければならないという使命を感じたのだろう。その反応の良さは素晴らしかった。

リベリオだという存在がはつきりし、キーツはリベリオと対峙する。

剣を鞘から抜くルーフォンは、キーツかりベリオ。どちらを斬るつもりかはわからないが、二人の元へと駆け出したが、そこまでの間にヴィンスが通せんぼをする。振り上げていたルーフォンの剣は、

ヴィンスが構えた、どこからか見つけ出したかのような、古臭い槍で受け止めた。

それを援護するかのよう、ユンヒュがヴィンスへ向けて魔術を唱え始めるが、その後ろからある女性の魔法を感じ、中断してし、自分の守備態勢へと移る。

現れたのは、シンリンだ。

一つの筋のようにユンヒュへ素早く向かう電撃を、魔術のバリアにて跳ね返す。

跳ね返された電撃は、狙いを定めることなく、天井のほうに飛び、消えていく。

ためらっていたアマシユリは、俺からのテレパシー指示により、駆け出してキーツが相手にしているリベリオの足元を狙って走り出し、スライディングで足を引っ掛けてやる。

反応はしたものの、両足とも避けることができず、片足のみ足首にアマシユリの足がぶつかる。

その隙を利用し、キーツはリベリオから視界をはずし、魔王のもとへと駆け出す。食い止めようとリベリオが手を出すのを、アマシユリは許さなかった。拘束魔法で伸ばした手を動けないように拘束し、軽く脇腹を蹴り、キーツからできるだけ離れさせた。

アマシユリ程度の拘束魔法で、完璧にリベリオを止めることはできない。

魔王に反抗する者を、いくら今まで味方だったからと言って、容赦ないリベリオは、確実にアマシユリを殺すかのような勢いで、魔法を発動しようとする。察したアマシユリは、恐ろしさに身体を動かすことができず、逃げることもできなかった。

横目で確認した俺は、状況を嫌々察してくれているシェイルと、手合わせ程度にやりあっているふりをし、リベリオにテレパシーを送る。その瞬間、リベリオの手はぴたりと止まり、一度こちらを見なおした。

頷いて見せると、何か頭の中で葛藤する様子を見せ、渋々首を縦

に振った。

（ごめんねリベリオ）

（…魔王様のためなら…しかし、このままじゃ）

（まあ、ちよつとコピーでキーツと戦うのは厳しいけどね…）

しかも、今までみたいに、精神を移動することはできない。何せここにいる人間は、魔物だとわかってても、魔王だとは気付いていないものばかりだ。それで何より、今必死に動かしているコピーと戦っているキーツだって、勇者である俺が魔王だとは気付いていない。コピーの存在と、先入観の効果は偉大なものだ。いまだに声で、魔王だということに気づいていない。

振り上げた剣は、しっかりと古い槍にて食い止められる。

魔術を使いたいのには山々だが、ヴィンスのスピードに合わせることはできない。ときどき魔法を使用してくるのも含めると、こちらはガードに回ることしかできなくなる。

精神も体力も、もうそろそろ息が上がってくる。

反面、ヴィンスは子供の姿のように小さい姿にはなっていない。身長は高く、細身だがしつかりついている筋力のせい、まだ息が上がる様子はない。むしろ、余裕があるように見える。

確かに、今の状況で勝てるとは思ってはいなかったが、いい戦いはできる自信があった。しかし、今現状をみると、互角に戦うことなんかできやしない。もてあそばれ、すぐに殺されてしまってもおかしくはない。だというのに、余裕を見せ、殺そうとする意思がヴ

インスには見られなかった。

どういうことなのだろうか、不思議になりながらも、愛用していた剣を力強くヴィンスに向かって振り上げた。その瞬間、受けとめようとする槍ではなく、その槍から手を離し、素早い手つきでヴィンスの手が振り上げた手首をつかまれる。

速さに追いつけなかった目は、一瞬何が起きているのかを理解せず、ぴたりと体を止めてしまった。

止められている。それを感じた瞬間、その手首から解放されようと、必死に振り払おうとするものの、その力は一向に衰える様子はなかった。

「くっ……」

「もうそろそろ諦めたらどうだ？ ルーフォン」

「……そっちこそ。どうして殺さない！？　すぐに殺せるだろう……」

「結構いい腕をしているのは確かだからな。それに、殺すのは魔王の意思ではない」

「え……？」

殺しが魔王の意思ではない。

それはどういうことなのだろうか。やはり、弱い者をいじめ続ける性格をしているのだろうか。しかし、シレーナとは仲がいい。というより、悪友だと言っていた。すっかり忘れていたが、シレーナと魔王の仲はいったいどのようなものなのだろうか。

いろいろな疑問点がわきあがり、体から力が抜けてしまう。

そんな時、不意に奥のほうから叫ぶ声が聞こえてきて、体をぴたりと止めてしまう。

「魔王様！」



### 第30話

いきなり叫んだのはリベリオだった。

アマシユリと対戦していたはずだというのに、アマシユリも身を固め、キーツと魔王<sup>コピー</sup>のほうへ目を向けていた。

しかし、俺まで目を向けなくとも、コピーを動かしていたからこそ、何が起きているのかわかっていたというのに、つい向けてしま

う。

ようやくこの時が来た。

まだ、ユンヒュとルーフォンには早いとは思ったものの、キーツを殺さずどうにかするには、こうすることしか思いつかなかった。

リベリオは完全に攻撃態勢になってはいるものの、俺の命令により、それから先は身体を動かせないようだった。シエイルも、手を止めてじつとキーツのほうを見つめ続けていた。

「なんだ…魔王<sup>コピー</sup>だったって、そう強くなかねえじゃねえか。噂はただの噂ってことか」

「…っ」

数回の攻撃によりひるんだコピーは、地面に座り込み、椅子の足に寄りかかるように身を起こしていた。その前には、キーツが見下ろし、魔法弾をいつでも飛ばせるように、指先に魔力を集めていた。

冷たく言い放つキーツの言葉には、今までのキーツの様子とは違っていた。

魔王になれるという願望が叶うという喜びに、口元は上がり、も

うすでに下の者と決めつける、冷たい瞳がコピーに注がれていた。  
ルーフォンもユニヒュも、ヴィンスもシュンリンも戦いを忘れた  
かのように、ジツとキーツとコピーを見つめていた。

「さようなら」

振り上げたキーツの手は、振り下ろすとともに、その魔法弾をコ  
ピーの体に向かって放り投げた。

消滅するコピーの姿。呆気なかったと高笑いし、先ほどまでコピ  
ーが座っていた魔王の椅子に座る。

「魔王を…魔王を殺したんだ！ 俺が…俺が魔王を！！ ふははは  
ははははっ」

喜びからちらりとみんなの姿を視界に入れるキーツは、高笑いを  
止め、微笑んでいた頬をおろし、下から睨みつけるようにヴィンス  
のほうを見つめてきた。

「お前ら…その人間どもやつちまえよ。俺が魔王だ…命令は聞ける  
だろう？ これが約束だっただろう！」

“魔王”という肩書がそんなにもうれしかったのか、奥底から笑  
いを浮かべ、ひじ掛けに堂々と腕を乗せていた。

その姿を見たヴィンスは、何も言わずに武器を真下に落とし、ルー  
フォンから手を離す。そして、ヴィンスの手により怪我を負ってい  
たルーフォンに、そっと治癒魔法をかけてやる。すると、その行動  
に驚くのは、ルーフォンとキーツ。

大きなため息とともに口を開いたのは、アマシュリだった。

「バカバカしい」

「何だと！」

一言に苛立ちを感じたまま、キーツは魔法弾をアマシユリに向かって即座に投げ込む。しかし、リベリオの手によりその魔法弾ははじき返された。

行動一つ一つが気に食わなく感じるキーツは、キツとリベリオを睨みつけどうしたことだと叫び出した。その陰で、あまりにもその姿が面白く、にやりと上がってしまう俺の頬は、言うことを聞いてはくれなかった。

「どういうことだだと？ 貴様は本当に魔王を殺したと思っているのか？」

「見ただろう！ 俺が殺した！ 俺が魔王だ！ そういう約束だろう？ 魔王を殺したら魔王の座をいただく！ そうだろう！？ シエイル！」

「魔王を殺した…？ まったくバカバカしいにもほどがある」

ため息交じりに答えるシエイルの頬も、少しだけ上がっている。シエイルもシエイルで、この現状を楽しんでいるようだった。

だんだんとその姿もうれしくなってきた、声に出して高笑いしたくなってきた。

「ほおんつと馬鹿。っていうか、そもそも殺された魔王と話してたって言うのに、ほんつとうに気づかないなんて、ほんと馬鹿」

「…なんだと？ 魔物が勇者になるなんて状況も、十分バカバカしいが？」

「は？ 誰に向かってバカって言ってんだよ雑魚」

笑いを止めることなどできなかった俺は、笑いながらもゆっくりとキーツに向かって歩きながら口を開いたが、そのキーツの返答に

脳みそのどこかが切れた気がした。

つい笑いが消え、足が止まり、より低い低音でそうつぶやくように口を開いた。その瞬間、ようやく声質に気付き、キーツの姿はぴたりと固まった。

「…っどういうことだ!」

「ここまで来ても分からないの? ヴィンス。こいつ馬鹿だね」

アマシユリもついに笑いを堪え切れなくなったのだろう。嬉しそうな高い声で、笑いながらもキーツに指をさしながらも、ヴィンスに向かってそう笑っていた。

すると、スツとほほ笑み、そうだなと治癒しながら言うヴィンスの姿に、ルーフォンは戸惑いを隠せない様子だ。

「どういうこと…だ?」

「あ? ああ、今まで見ていた魔王の姿はすべて、魔王本人が作り上げたコピーだよ」

ルーフォンの質問に、優しくヴィンスは答えてあげた。すると、それを聞いたキーツはまたしてもどういうことだと叫んだ。

そのうるさい言葉に、サイレント魔法をかけてやる。

「うるっさいなあ。だから、ずっと魔王は魔王であって、お前が見ていた魔王は、その魔王…俺が作ったコピーだっつうの」

そう言いながらも、俺は着ていたロングコートの前を締め、変化も解いて魔王の姿を露わにする。その姿は、先ほどまでキーツが戦っていた魔王そのものの格好だった。

姿を確認したキーツと人間は、すべてではないが、魔王という存在をはっきりと確認できたようだった。

カランと何かが落ちる音がした。

音源を探してみると、そこはユニヒュの足元だった。全ての希望が消えたかのような表情で、手元から武器が足元へ落ちていた。その手が震えているのを、しっかりと確認できる。

「確かに言ったよ。魔王を殺したら、魔王の席はお前の者だと…。しかし、今現実魔王を殺してはいない」

「…ず、ずるいぞ…」

「ずるい？ 自分の身を守ったまで。どうした？ 足が震えているぞ…？」

「……っ！」

睨みつけてくるキーツにうつすらとほほ笑み、視線を外す。リベリオ、アマシユリの横を通り、ヴィンスの元。ルーフォンの元へと足を運ぶ。後ろからぺたりと座る音がする。震えた足は限界だったようだ。

手当てをされているルーフォンは、座っている状態から見上げるようにこちらを見つめてきた。その目は現状を理解し、自分の行動を考えているところだろう。敵意はないものの、警戒してはいるようだ。

ルーフォンから口を開くことはないようだ。  
ゆっくりとしゃがみ、ルーフォンと視線の高さを合わせる。

「怪我は深くなさそうだな」

「…」

「魔物だと知ったすぐに魔王だと知るの、結構精神的に参るか？」  
「…まあ、それなりに？」

呆れたように、ため息交じりにそう言った。  
言っているより、参っている様子はなさそうだ。

「まさか…お前が魔王だなんてな」

「ほんと。メッシュに言われた時は、心臓が飛び出るかと思った」

そう笑って答えてやると、うつすらとルーフォンの頬が上がった。恨んでいる様子はない。あんなにも魔王を殺したがっているというのに、目の前にいる勇者でもある俺が魔王だと知って、殺気立たないのが逆に怖かった。

「もう一度聞くが、ルーの言っていた“非道なこと”には入らないか？」

「お前が魔王なら、いいんじゃないのか？」

「ルーにしてはてきとうな答えだな」

「そうだな」

二人して声をあげて笑ってしまった。

魔王を追っているすぐそばに魔王がいたなんて、思ってもみないこと。しかし、実際に目に見てみれば、呆気なく許されてしまった。しかし、魔物に殺された両親や姉のことまでは、許してはもらっていないだろう。

むしろ、許されないほうがいい。そうやって、自分を苦しめておかない限り、魔王だという自覚を失いそうになる。

（でも、そんな自覚、もういらなかもな…）

ゆっくりと体を起こし、ユンヒュのほうをしてみる。しっかりと武器を持ち直し、こちらを睨みつけていた。ルーフォンのようには行かないみたいだ。

足を進めようとした時、後ろからガシツとつかまれる。振り払うことなく、ゆっくり振り向くとそこにはヴィンスが不安げにこちら

を見ていた。

「危険です」

「まあ、あんなに殺気立ってればな……。離せ」

「……」

命令として言った言葉に従わなければならないヴィンスは、ゆっくりと手を離し、下ろしていた。

うつすらと微笑み、大丈夫だということを示してユンヒュのほうに向きなおった。足を進め、ユンヒュへ向かうと、武器を握る手に力が入ったのがわかった。

ゆっくりとこちらに振りかざし、小さく呪文を唱え、すぐに発動させるが、後ろにいたシュンリンの存在を忘れていたようだ。シュンリンの電撃により、体がしびれ、魔術が発動しなかった。

ぺたりと地に膝をつき、痺れる身体を抑え込む。

「くっ……貴様……」

「黙ってて悪かった。ユンヒュには少し早かったかも知れんが、近くにいる以上一人だけ知らないというのもどうかと思っただ。どうする？　これからまだ旅を続けるつもりでいる。共存する世界が出来るまで。ついてくるか？　否か……」

「……なぜだ」

「あ？」

「何故魔王である貴様が、共存しようと口にするのじゃ！　それがわかりかねる。お主たちは人間を滅ぼそうとしているのではないのか！」

「さあ、他の魔物は知らん。が、できれば強制ではなく、共存しようという心を持ってもらおうと、努力はしようと思っている」

「なぜだ……」

「その方が、幸せだろう？　ビクビク怯えながら生きていく人生な

んで、もったいないと思わないのか？ だったら、共にすごし、死んでいく方が幸せだろう？ ただでさえ人間は短命なんだ。大事にすごさなければな」

ゆっくりとユンヒュの前にたどり着き、座り込んだユンヒュに手を伸ばす。

手を握り返すかどうか。そのまま攻撃されてもおかしくはない。が、ユンヒュの後ろでシュンリンが警戒しているのがわかる。

「…その心は本物の…」

「じゃあ、それをユンヒュ、お前の眼で確認すればいい」

「ついて行けというのか」

「心があるのならば」

微笑むと、ため息交じりにそつと手を握り返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5509/>

---

満月ロード

2011年9月23日03時24分発行